

名探偵と探索者でいあ！いあ！

犬（くろ）

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

大体タイトルの通りです。見切り発車です。メタ推理しても、ダイス運が息してないので身内でやると大惨事が起きるので名探偵におすがりしたく…。

と、思った筈が選んだPCのせいで、なんだかコナンサイドが苦戦する未来しか見えません。簡単にいいますと、名探偵コナンの世界でクトゥルー的事件が起きます。

探索者がいろいろありまして純粋な人間ではありません。いあいあ。

アンチやヘイトの思惑は有りませんが超常現象が起きると、大体を疑ってかかるすれた探索者のせいでコナン厳しめになる予感があります。

# 目次

プロローグと探索者	1
かまど旅館でいあいあ！	4
かまど旅館でいあいあ！2	6
かまど旅館でいあいあ！3	9
かまど旅館でいあいあ！4	12
かまど旅館でいあいあ！5	14
かまど旅館でいあいあ！6	16
かまど旅館でいあいあ！7	20
閑話とネタと次のシナリオアンケート	24
かまど旅館でいあいあ！8	27
かまど旅館でいあいあ！9	31
マジカロギア編予告！名探偵と禁書を追え！（四月馬鹿）	34
かまど旅館でいあいあ！10	38
かまど旅館でいあいあ！11	41
かまど旅館でいあいあ！12	44
かまど旅館でいあいあ！13	47
かまど旅館でいあいあ！14	50
かまど旅館でいあいあ！15	54
閑話 彼らが旅館でいあいあしている間に…	58
かまど旅館でいあいあ！16	62
かまど旅館でいあいあ！17	68
かまど旅館でいあいあ！終と次回のプロローグ	72
黒き地母神に奉げるいあいあ！1	81
閑話 彼らが母を求めている間に…	86

黒き地母神に奉げるいあいあ！2	98
黒き地母神に奉げるいあいあ！3	103
黒き地母神に奉げるいあいあ！4	109
黒き地母神に奉げるいあいあ！5	113
黒き地母神に奉げるいあいあ！6	120
閑話 彼らが母を求め始めた時に…	126
黒き地母神に奉げるいあいあ！7	131
黒き地母神に奉げるいあいあ！8	136
黒き地母神に奉げるいあいあ！9	140
黒き地母神に奉げるいあいあ！10	145
黒き地母神に奉げるいあいあ！11	149

## プロローグと探索者

ぷつと、通話ボタンを押すと同時に相手の声が耳に届いた。

「あ、さよりん？元氣してる??」

「はい。まあまあですね。それより突然何ですか？あなたここ数年音信不通だったじゃないですか」

「んーちよつと君達に頼みたい事が有ってね。ひとみんなも今一緒？一緒だろうねー。君達ラブラブだもんねー。障害が多いほど燃え上がるタイプだもんねー。」

「早く用件に入らなければこの電話を切るが、いいか？」

「だめだめ！やめて!?!お願い!!用件だけどね。ちよつと胡散臭い旅館があるんだよお。中々に繁盛してるようだけど、裏で何やってるんだか。もうキナ臭さぶんぶん！それでえ、君達に探りを入れて欲しいんだよね！」

「僕らも一応それなりに忙しいんですけど。…あなたには恩が有りますからね。受けますよ」

「ありがとうございます！そういつてくれると思ってたよ！詳細は近いうちに送るから！楽しみにね!!おつと、出向先が旅館だからって二人でにやんにやんするのに夢中になって仕事忘れちゃ駄目だぞっ☆」

「今、あなたに物凄い殺意を抱きました」

「やだー。中身出ちゃうじゃないですかやだー。微笑みながら100面ダイス渡さなきゃー。」

「何意味分からない事言ってるんですか。切りますよ」

「うん。用件は済んだから。じゃあね！」

ぷつと、通話は一方的に切られた。

スマートフォンを憎憎しげに眺めていた、人形のような全身真っ黒なゴシックドレスの少女はさも不機嫌そうにため息を付く。

「小夜林、どうかしたのか？」

電話をしていた少女の隣で、静かに控えていたスキンヘッドに真っ白なパンク衣装を着こなした、美しい顔立ちの…恐らく女性が首を傾げる。

その首と後頭部には蛇の鱗の様な刺青が彫られている。

「ニアからです。突然電話を遣したと思ったら、どこぞの旅館へ探りを入れてくれという事ですよ」

「全く：何故私達の居場所が割れて居るんだか…」

「ニアですからね」

「不思議な人だな。相変わらず。まあいいさ。君と旅行に行けるって事だろう？私は君と一緒になら何だっていいさ」

「人巳は、すぐそうやって恥ずかしいことを言いますね…」

自然な動作ですつと抱き寄せられた黒い少女は赤面しながらも、白い美女へ擦り寄った。

#### 元PC紹介

黒井小夜林（クロイ サヨリ）

黒いゴシックワンピース装備のロリ（に見えるだけの成人）。SIZ8。APP12。後は諸事情により、今は秘密。見た目で分かる分だけ。

とあるマイナーなヴィジュアル系バンドのボーカル。

ゴシックワンピースに合わせて、蹄を模したブーツを履いているので、DEXがマイナス補正入っている。職業上キャラ作りは大事。

技能は探索寄り。対人は皆無。

特記すべき技能は「芸術：歌唱95」程度。

加賀知人巳（カガチ ヒトミ）

黒井に合わせたような白いパンク衣装の麗人。長身細身。スレンダーな体系。SIZ16。APP18。後は諸事情により、今は秘密。見た目で分かる分だけ。

とあるマイナーヴィジュアル系バンドのベース。

スキンヘッドに鱗の刺青というなかなかパンチのある姿だが、職業

上キャラ作りは大事。

技能は対人より。詐欺師染みてる。

特記すべき技能は「芸術：弦楽器90」と「薬学90」程度。

とあるマイナーなヴィジュアル系バンド。

4人グループ。

黒井と加賀知の参加するバンド。マイナーと言いつつも、好きな人は好きなのでそれなりに収入はあるし、ファンも居る。

悪魔や邪神崇拜をテーマにした世界観で楽曲を展開している。なんと厨二病御用達の様な内容だが、ネット上で「なんかガチ過ぎて引く」との意見も出ている。

身内で、シナリオクラッシュをしながらも、無双には成らずにシナリオを進める。をテーマに作ったキャラです。

事情により秘密、とは言ってますが名前が完全にネタで付けているので、気づく人はすぐ分かると思います。

身内でよくKPを勤めてくれる人が、技能は最大95までというルールを設けて居るのですが、キャラのコンセプト上いつものルール、ルルブを無視して技能が振られていたりします。

かまど旅館でいあいあ!

旅館、と聞いていたがホテルと言われた方がしつくり来る様な建物だった。

「ホテルと旅館の違いは和室と洋室の部屋数と、大きさらしいです。ぱつとみ洋風の建造物ですが、ここはどうやら和室がメインみたいですね」

「そうなのか。私はてつきり温泉が有るのが旅館だと思ってた」

かたなかたんと蹄を模したブーツで不安定に歩く小夜林を支える様に自然に腰に腕を回した人巳がスマホの画面を見ながらも、エスコートする様に進む。

「ここ、かまど旅館はなんでも珈琲が美味しいらしいな。宿泊施設としての評価より、ここで独自に炒ってる豆が美味しいそうさ。そう言った口コミが数件。それだけさ」

「ニアは『繁盛している』と言って居ましたが…あくまでも『裏が繁盛している』という事なんでしょうか。人で賑わっている様に、わっ…!!」

人巳が腰に手を回していたと言っても、蹄を模して、極端なつま先立ち状態でヒールも存在しない。背後からやって来た別の客にぶつかり前方へよろける。

とっさに支えられて、小夜林が転ぶ事は無かったが染みに足を捻った様で顔を僅かに顰める。

「小夜林。怪我は?」

「僕は平気」

「ごめんなさい!」

「お姉さんごめんね…怪我してない?」

女性の謝罪の声と、幼い男の子の気遣う声が聞え振り返る。後から来てぶつかったのはどうやら、四人組の客の内の小さな子供だった様だ。

大人三人を見上げて会話をしながら歩いて居たらぶつかってしまったようだ。

いち早く謝罪したのはその眼鏡の少年の姉か、中々に美人な長髪の女性だ。半歩後ろに居たチョコビ髭の男性は「余所見してんじやねえよ」と呆れ顔だ。彼がこの姉弟の父親だろうか。もう一人、二十代半ばの女性は一体どういった間柄だろう。二人の母親にしては若いが兄弟にしては些か男性と歳が近すぎる。

「大丈夫です。…ごめんなさい。僕らも歩きスマホをしていたから君に気づかなかったんです」

振り向いて真正面から向き合った、小夜林と人巳の派手な、言ってしまうと割る目立ちする奇抜な様相に四人組は呆気を取られた様にする。

真つ黒な人形染みたゴシックのワンピースの少女に見える人物と、これまた何の衣装だと言いたくなる様なベルトと装飾過多な、上下真つ白な服のスキンヘッドの美女。

「小夜林。邪魔に成っている様だよ。彼らもかまど旅館に用の様だ。お先にどうぞ」

人巳が笑顔で道を空け、四人組を先に正面玄関へ向かわせる。

道を譲られた四人組みはどぎまぎして、ちらりちらりと人巳を伺いながらも、会釈をして通り過ぎて行く。特に小夜林にぶつかった少年が興味深そうに、堂々と隠しもせず振り返っていた。

「やっぱり私の外見は目だつ様だよ」

「小さな子にはその鱗が怖いんじゃないですか。…僕は人巳ならどんなでも好きだけど」

## かまど旅館でいあいあ！2

宮口絹江という女性に依頼されたのは、『一週間前に行方不明に成った弟を探して欲しい』というものだった。

もちろん依頼されたのは、世間的に超有名な名探偵毛利小五郎であってコナンではない。

だがどんな事件かと気になりソファアの背もたれから顔を覗かせ共に絹江の話を聞いていた。

まあ、ここまでの事件を解決してたのは全てコナンだと言っても過言ではないので、今回も何があってもいい様にと一応話は聞いていたが、単なる人探し、という程度で落ち着きそうだ。

「正平は…その…恥ずかしながら、所謂不良で…地元の警察にも何度もお世話になっていて、それで警察もまともに取り合ってくれないんです」

これまでも何度か学校もサボり何日も連絡なしに家を空けた事も有るといふ。ではなぜ今回は、わざわざ探偵に依頼してまで弟の行方を探るのか？

「それでは今回は今までと何か違ったんですかな？」

「はい。こんな物が送られて来なければまたお友達と遠出でもしているのかと思っただんですが…」

絹江はそこで言葉を切り、スマートフォンを操作し、その画面を小五郎に向ける。

映っているのはラインのトーク画面で相手は『正平』と表示されている。そのもつとも新しい相手方のメッセージ。一週間前の日付で、正平から『かまど旅館』と書かれた看板の画像と、『ねえちゃん助けて』と、一言だけ送られていた。その下にはいくつか絹江から送られたメッセージが続くが全てに既読はない。

「助けて…とはまた物騒な」

身を乗り出して画面を覗き込むコナンも眉を潜めた。確かに。これは穏やかではない。

「何度か電話もかけたんですが、電源が切れてしまってるようで…」

警察も、一応私もこの『かまど旅館』連絡を試してみたんですが…そんな人は来ていないと…お願いです!!」

「はひいっ!」

瞳に涙を溜めた絹江は画張りとお五郎の手を握る。余りの勢いに若干小五郎は仰け反る。

「名探偵さん! 正平を…弟を探してください! 悪さばかりしている様な、いい子とは言えない子ですけど、私にとつては大事な弟なんです」  
一つ、この宮口絹江について付け足そう。彼女、とても美人なのだ。いったい何の事か分からないが、具体的には『APP17くらい』と謎の言葉が浮ぶほどに美しい。

そんな美女に手を握られ涙で潤んだ瞳で見上げられ、頼られて揺らがない男は滅多に居ないだろう。何処かで何らかの対抗ロールに失敗した賽の音が響いた気がする。

「まっかせてください!! この名探偵毛利小五郎、貴女の弟さんを必ず見つけてみせましょう!!」

いつもなら、またおつちゃん調子のいい事を…と乾いた笑いと諦観の眼差しを向ける所のコナンだが、今回は少し難しい顔をして一人考え込んでいた。

不良、それも何度も警察にお世話になる様な類のチンピラ。それでも唯一心を開き気にかけていたであろう姉に対して余裕のないSO Sを残して音信普通。

そうになると、もしや、と考えてしまう。やくざや何やら胡乱な連中とまでつるんでしまい、良からぬ辺りまで首を突っ込んでしまったのでは無いかと。

最悪の予感として、あんな風に見得を切ってしまい、絹江を絶望させてしまう真実にたどり着いてしまうの結果。首を突っ込んでしまった結果、消されてしまった可能性。

もちろん、コナンの知りえない、宇宙の果て、あるいは次元を液晶挟んだ世界のナニモノかがお前が言うのかよwwwと大草原を生や

している事だろう。

## かまど旅館でいあいあ！3

宮口絹江の依頼により、件の『かまど旅館』に小五郎に蘭、依頼者である絹江も伴いやつて来た。

一度直接かまど旅館に行きたいと言ったのは絹江本人だ。

その旅館がある周辺には目ぼしいものも無く、旅行で訪れようとは思わない土地。周囲には他に宿泊施設もなく『かまど旅館』は遠出する為の中継地点としか利用されているようだ。

建物こそは、どこか小洒落たアンティーク調の建物だが駐車場はがらんとしており繁盛している様には見えない。

旅館の人間は宮口正平を見たいと言えども、ここを利用した客などからも証言を取ろうと思っていたのだが…思いの外周囲が閑散としており、まず尋ねる人間も居ない。

周囲をしばらく観察し、これは得られる情報も無さそうだと苦い顔をする小五郎を見上げながらコナンが言う。

「最近から旅館の中で喫茶店を始めたみたいだよ。珈琲が美味しいってレビューが何件か付いてるし、常連さんも居るかも。その人たちがらなら何か聞けるかもよ」

道中検索していた結果の画面を背後を歩く大人たちを振り仰ぎ、掲げてみせる。

と、背中に軽い衝撃と、

「…わっ！」

という驚いた声。

慌てて振り向くと、白と黒の中々に奇抜な格好をした二人組みが居た。背の高い白い方が黒い小さい影を抱きとめて居るところを見ると、どうやら前を歩いていたその人物にぶつかってしまったらしい。

「ごめんなさい！」

いち早く謝罪を述べたのは、小五郎よりも保護者然としている蘭でコナンも慌ててその謝罪に続ける。

「お姉さんごめんね…怪我してない？」

白い方に支えながら体制を立て直した黒い人物は、成人しているに

しては随分小柄でレースとりボンが多量に使われた服にバランスの悪そうな靴を履いてた。

これでは、小学低学年まで小さくなった体での衝突でも転んでしま  
うだろう。

「大丈夫です。…ごめんなさい。僕らも歩きスマホをしていたので君  
に気づかなかったんだ」

不安定な靴なせいか、屈んで目を合わせるまではしなかったが外見  
上はこんな小さな子供にも丁寧な言葉で謝罪する。

しかし真つ直ぐに見つめられたコナンはその彼女から妙な違和感、  
というよりも何とも形容しがたい薄ら寒さを感じた。日本人らしい  
黒い瞳なのだが、何故かその黒さが正体の掴めない混沌たる闇のそこ  
を覗き込んでしまつてる様な焦燥感が押し寄せるのだ。

そのなんとも粘つく様な黒い瞳のせいで瞬時に何かを言い返すこ  
とも出来ない。

「サヨリ。邪魔に成っている様だよ。彼らもかまど旅館に用の様だ。  
お先にどうぞ」

ほんの数拍、妙に長い時間を感じたがそれはもう1人の白い人物に  
寄つて遮られる。

背の高さや凹凸の無い体つきで男性かと思つて居たが、驚いた事に  
その声は女性の物で、そう思つてよくよく見れば顔立ちも驚く程に美  
しい。

まさに美女。人類の最高峰だと言ってもいい具合には美人なのだ。  
ただ、偶像のキヤラクター染みた衣装にスキンヘッド、その毛髪の無  
い頭皮に入れられたタトゥーに、普通の感性の人間ならば怖気づくだ  
ろう。

現に、数々の事件で巡り合つた美女達に鼻の下を伸ばしていた小五  
郎でさえあんぐりと口を開けて何も言おうとしない。

お先にどうぞ、と笑顔で道を空けてくれたその異様、異形とも言つ  
ていい麗人に軽く会釈をしながらコナン一行は一足先に旅館の中へ  
入る。

しかしコナンはその姿が見えなくなるギリギリまで、その笑顔から

目が離せなかった。サヨリと呼ばれた黒い少女と同じ様に微かに白い人物からも妙な感覚を覚えたのだ。

朗らかな笑顔が、何故か得物を見つめる蛇の様に見えた。

…。恐らく鱗の刺青の印象が強かったせいだろうか…。

## かまど旅館でいあいあ！4

先ほどの親子連れらしき4人組から少し間を置いて、チエツクインをする。支配人らしきフロントの渋い男性は驚いた顔をする。

それは人曰や小夜林の服装にもだが、なによりも「こんなにお客が来るなんて」と言った顔だ。

「今日はそんなにお客さんが多いんです？」

フロントに僅かに身を乗り出すようにして尋ねる人曰に、ええ、と支配人は頷くが、事務的な処理を終えて手元の作業、時計を磨くことに意識を集中している。

「一日に三組も宿泊のお客さんが来るなんて滅多に無いですね。最近 は家内のやつてる喫茶店への人ばかりで」

へえ。と相槌を打ちつつ支配人が視線を逸らさない時計へ目をやる。

「中々素敵な時計ですね」

「そうですね、そうですね。どれも私自慢のコレクションなんですよ。いやあ、さっきの子も時計に興味を持ってくれてね。小さい子ながら中々見る目のある子だと思うよ」

時計に話を振った瞬間に嬉々として話し始める。その目の輝方が、二人が今までに数度目にした『狂信者』というそれを彷彿とさせるもので、心中でのみ苦い顔をする人曰だが、表面には出す事は無く、しれっと部屋の鍵を受け取り時計に対する熱いご高説を交わしながら小夜林を伴って客室へと向かう。

一回のフロントに併設する喫茶点には先ほどの四人組は居らず、中年の男だけが窓際の席で足を組んでこちらを眺めていた。

「狂信者染みた人だったね」

エレベーターの様な物は無いらしく、階段が一つだけ。そこを上っている途中で人曰は小夜林に話しかける。普段人前で熱狂的に歌う小夜は林だが本来は人見知りで口下手なのだ。

丁度自販機等とソファアの並ぶ、広めな空間に出た所だった。壁際の棚には30体近いこけしが並び、こちらをじっと眺めている。何と

も拙い作の割りに、それぞれ顔の特徴は違い、無気味だ。

「時計：時間に関するアレの狂信者で無いといいのだけど」

散々怪異紛いのオカルティックな事件に巻き込まれたせいで、狂信者という厄介な存在の危険度は身にしみている。

「その可能性は低いと思います。彼は魔術師の類には見えませんでしたよ。お母さ、地母神の様な万人に分かりやすい恩恵が有る訳ではありませんし」

「ひっそり信仰しているだけなら私達になんの害も有りはしないし、放って置こう。変に関わって狂気を目撃したくもない」

「そうですね。僕らはニアに頼まれた事だけを済ませましょう」

そんな風に話してる間に客室に付いてしまう。もともと荷物は最小限。

残念ながら二人には『鍵開け』をする様な手先の器用さも無いので、そういった小道具を持ってきても何ら意味はない。

「さて、先ずは色々見ておきたいし評判の珈琲を飲みに行くかい？」

実はこの旅館、入り口からだが館内全体に珈琲の香りが満ちているのだ。若干、胸焼けを起しそうな位程に。

「はい。あ、いえ。人己は先に行ってください。僕は少し気になる事が有るので。そっちを見てから行きます。…その、すぐに行きます」

「そうかい？ 足元に気をつけて来るんだよ」

役者染みた、いかにも残念だ、という表情を作り小夜林の頭を撫でて出て行く。

その手の感触を名残惜ししながらも小夜林も行動すべく立ち上がり、部屋をでた。珈琲の香ばしい匂いに紛れて少しばかり焦げ臭い臭気を僅かに感じ取ったのだ。

## かまど旅館でいあいあ！5

ことんことん、と蹄の音を鳴らしながら少女の形をした黒い影は宿泊施設独特の雰囲気のある廊下を進む。

ここは四階建てで、一階にはフロントと喫茶店。敷地の面積からしてスタッフルーム等もあるかもしれない。夕食や朝食は喫茶店のスペースで提供すると聞いていたから、旅館の孤立した厨房は無いだろう。

残りの二階から四階までが客室の様だ。

ただし、二階は広めに取られた休憩スペース、あのこけしがずらりと並んだ場所と浴場があったので客室は二つ。三階、四階に四部屋づつ。

小夜林と人巳が宿泊するのは四階。

その同じ階から、焦げ臭いものを感じたのだ。

四階の一部屋挟んだ隣。臭気はそこからの様。

こつんこつん。と爪の先まで黒いマニキュアを塗った小夜林の手がノックするが何の反応も無い。遠慮なくノブを回してみるが鍵がかかっている。

そつと耳を寄せると、何やら声が聞える気がする。

「はっ・・・ははははっは・・・あはは・・・！居たんだ、本当に、いた、存在、はははは・・・」

荒い息に、うわ言の様に何かを繰り返している。

「・・・放つて置きましょう」

鍵も掛かって居るし、中の人間は普通に健在のようですし、聞き様によっては生物としての本能、子孫繁栄の活動に勤しんでいるのかもしれない。

と、一瞬思った。

普通の人間は些か怪しげな物音がしようが、不穏な匂いがしようが、特に何も起きていないのに鍵の掛かった扉を無理矢理ぶち破ったりはしないのだ。

声をかけたりして、人が出てきたとしても若干のコミュ障を拗らせ

ている小夜林にはその後の誤魔化しが聞かない。寝煙草で火災、という事は無さそうなので、よしとしよう。

自分は問題ないのだが、人巳は煙草が嫌いだ。

ことんことんと相変わらずな音をさせながら一階の喫茶店へ向かうところで、旅館の玄関前でぶつかつた少年がいた。興味深そうに大量のこけしを眺めている。

小夜林の見解では、こういった人型の物を小さな子供は怖がる様な気がするのだが。ましてや男の子。人形は興味の外だろう。

ことんことん、という独特な足音に彼は気づいたようで、「あ」と言つて此方を向く。

「やっきのお姉さん」

小夜林は別だん何と呼ばれ様が気にしないが、どうも「お姉さん」と呼ばれるのは気になる。

「僕はお姉さんじゃなくて、黒井小夜林です。聞きそびれましたが君は怪我はしませんでしたか。僕の靴は結構硬いので、よろめいた時に蹴つたりしては居ないですか？」

「うん！大丈夫だよ！それからボクは江戸川コナン。よろしくね？」  
可愛らしく、というのが世間一般的なのだろうがどうも黒い少女の形をした者にはそれを愛らしいとは思えなかつた。

無遠慮に此方を詮索する視線、というのか此方を見据える視線があどけなく邪気なく物を見ようとするものではなく、『者』を見極めようと検分する目なのだ。

こういう類の目には何度か出会つた事がある。己の興味のみで、事件に首を突つ込み、荒らしたいだけ物事を食い荒らし、『真相』という美味しい所を持つていく者だ。

彼はオカルト作家で、未知に関してとても貪欲だったが、その最後は無残なものだった。それだつて自分だけが被害を被るなら構わな  
いが、彼は危うく人巳まで巻き込む所だつたのだ。

だからポロリ、と小夜林は言葉をこぼしてしまつた。

「…そんなに僕を見ていると深淵を垣間見ちゃいますよ」

## かまど旅館でいあいあ！6

部屋は宮口絹江で一室。小五郎、蘭、コナンで一室。こういった場で小学校低学年の子供は「一人」という勘定に入れて貰えないのは最早慣れっこだ。毛利親子と同室。基本的に和室が多いようなので、布団を一組増やす位なら余裕が有りそうだった。

：万一布団を敷くことが出来なかつたとしても、現在のコナンとしてのサイズ感なら親と同じ布団で寝るといふ場合も可能だろう：この場合は、蘭に成るだろうか：と考え、中身は健全な男子高校生である彼は頭を振る。

そんな事態に成つては緊張と己の心音で眠らない事間違いなし。何度となく共に入浴すると言う幸運、いや、ハプニングに合った事も有つたが、8時間近くを密着して過ぐすのはとても精神衛生上よろしくない。

そんな心配事は、無事三組の布団が敷けそうな部屋の大きさにいらぬ事となった。けして残念がってはいない。

それよりも気になる事は有つた。  
コナン達の宿泊する部屋は三階。四部屋並ぶものの階段側に二部屋だ。その部屋に至るまでにチラリと目に入った二階のこけしの群れ。

それに、何故か分からない引つ掛かりを覚えたのだ。

これからの予定に関しては、支配人である男性、亀山以外の証言を集める、というもの。利用客も少ないこの宿ならば、下階の喫茶店に向かつてみる、という事になったのだ。何の見所もない土地なのでせめて、口コミにはなっている珈琲位は飲んでおこう、という余りにも小さい打算が混じっていたりもする訳だが。

そして依頼者の絹江が少しでも落ち着ければ、という案だ。

なんとたつて絹江は旅館に着いて直後に、支配人に詰め寄つて弟の事を尋ねていたのだ。鬼気迫る勢いで。

普段は迷探偵ぶりを遺憾なく発揮する小五郎だが、これまで探偵で

食ってきた程度のノウハウは有る。そんな風に詰め寄っては得られる情報も得られない、と絹江を止めた。

一体何が意識に引っかけたのかと30近いこけし達の顔を眺める。

そのどれもが顔立ちが違い、まるで街中で大勢の見知らぬ人間達とすれ違った様な感覚に陥る。

見知らぬ人間…？

そして何に引っかけたのか気づいた。

もちろん、そんな音は鳴っては居ないし、『アイディアロール』なんて言葉は存在しないが100面ダイスが転がり良い出目を出したような軽快な音が響くように、ぴこん、と閃いた。

こけしの群れの端、つい最近見たような顔立ちのこけしが居た。

宮内絹江が見せた弟の正平の写真。その顔に良く似たこけしが無表情に此方を見ている。

その宮口正平の特徴を捉えたこけしへ手を伸ばそうとした所で風変わりな足音に気づき、階段の方を見る。

「あ」

思わず声が洩れていた。旅館の入り口でぶつかってしまった、派手な服の黒い少女。

「さっきのお姉さん」

彼女はこつんこつんとアンバランスな靴で歩み寄ってくる。傍で蘭を見ていても、常日頃から思うのだが、女性達はなぜハイヒールと言うものを履いてこんなにも上手く歩けるのだろうか。

「僕はお姉さんじゃなくて、黒井小夜林です。聞きそびれましたが君は怪我をしていませんか。僕の靴は結構固いので、よろめいた時に蹴ったりはして居ないですか？」

先ほどの様な、自分より年下に見える相手にも警護で話すのだその表情は微動だにしない。

「うん！大丈夫だよ！それからボクは江戸川コナン。よろしくね？」

天真爛漫な人懐っこい子供らしく、笑顔で名乗る。名乗られた、と言うのも有るがコナンとしてはこの人物のなんとも居えない違和感

が気になって仕方ない。

まるで全うな人間では無い様な、どこか仄暗い影のようなものを感じたのだ。その正体を掴めない者かど、もう少し接近して見たいと言う探究心が、名乗らせ距離を縮めようと図るのだ。

「…そんなに僕を見ていると深淵を垣間見ちゃいますよ」

え？と目をぱちくりとすると同時にっう…と背中に冷たい物を感じた。まさに嫌な汗。これまでに数多の犯罪者や、例の凶悪な組織を追うに辺り何度か危機に面した事は有るが、この感覚は何かが違う。

コナンにはその感覚の名前を見つける事は出来なかったが、ふと、秘密の共有者である少女、灰原哀が感じ取り、『おい』と表現する恐怖心のようなものがこんな感覚なのではないかと…。

「もーコナン君！先に行っちゃ駄目じゃない！」

正体不明の感覚に呼吸を忘れそうに成っていたコナンだが、幼馴染の声に我に返る。ごめんなさいい、とさも申し訳無さそうに蘭と数歩送れて階段を下りる小五郎も緋江にも視線を向ける。

いつもそう言っつて何処か行っつちゃうんだから…とお小言を続けようとする蘭も、直ぐに黒井の姿に気づいて声をかける。

「さっきのー本当にごめんなさい。私もコナン君から目を離しちゃつて…」

「い、いえ。あの、本当に大丈夫ですので…。…」

黒井は蘭を、少し遅れながらも合流した小五郎と緋江をちらちらと見て言葉を詰まらせる。どうやら人と話すのはそれ程得意ではないらしい。

「蘭姉ちゃん、こつちのお姉さんは黒井小夜林さんって言うんだって」  
「はじめまして。毛利蘭です」

完全に黙り込んでしまった黒井の代わりに、コナンが紹介する。助け舟を出した、と言うよりもこのまま行くと黒井は無言で立ち去ってしまったし違和感の正体を掴めずに終わってしまったしそういう予感があったため、些か強引にだが会話の流れに組み込む。

狙い通り、流れで蘭は小五郎と、一瞬どう紹介したものか戸惑ったが緋江も友人として紹介した。コミュニケーション能力の高い彼女

により黒井を伴ったまま下階へ向かうことになる。

聞けば入り口で彼女を支えてた白い長身の彼女は一足先に喫茶店へ行ってる様だった。それならここで有ったのも何かの縁だし一緒に緒しましょう！という明るい誘いに、若干戸惑いながらも黒井は頷いた。

「しっかし凄い格好だなあ…」

ぱつと見て、せいぜいが高校生…にも見えないかもしれない黒井を見下ろして小五郎が呟く。

「自分で着るのはちよつと恥ずかしいけど…お人形みたいで可愛いですよね」

蘭も改めその黒いレースとリボンの塊の様な姿を見て感想を漏らす。

「…僕らは、バンドを組んでそのイメージでこんな格好なんです」

へーと納得した様な声が上がったと頃で喫茶店にたどり着く。

と、そこで目にしたのは如何にも喫茶店らしい落ち着いた風合いのエプロンをした女性に屈むようにして唇を重ねて居る黒井の連れだった白い舞台染みた装飾過多な服装に、スキンヘッドの女性。

呆気に取られる5人の中でいち早く動いたのは黒井だった。

「人己…!」

僅かに怒気を含んだ声と同時にあの不安定だが、見た目からも硬そうな靴で連れの背に蹴りを入れていた。

世界の外側で、賽が投げられていた。

キック、奇襲により自動成功。

ダメージ、1d6+(靴によるボーナス)1+db2d6。

ひ弱な者ならワンターンキルも有り得る数字を叩き出した。

## かまど旅館でいあいあ！7

人見知りで小柄な人物からは想像できない暴挙の後に、唾然としながらも背中にかなりのダメージを受けた連れ：名は加賀知人巳と紹介された彼女を席へ介抱しながらも、コナン一行も自己紹介をする。

「…小夜林：まだ怒っているのか？」

「いいえ。特に何も」

そう言いながらも黒井の眉間に僅かに寄っている。なんとも、痴話喧嘩に首を突っ込んでしまったような居心地の悪さを感じる。

「ごめんなさいね。私がつかりピッチャーを落としかけたの受け止めようとしてくださったんですけど、随分すらつとしたかですわっかってしまったんですよ…」

今日は衝突事故が多いようだ。

謝罪しながら6人の前にお冷をてきぱきと並べて行くのは喫茶店の方を運営している、旅館の支配人亀山の奥方だ。喫茶店らしいナチュラルな色のエプロンに付けられた名札には『様子』だけ書かれている。

「ご注文はお決まりですか？」

「このオリジナルのコーヒーを…」

途中まで言いかけた加賀知がコナンを見た後に、一番年配らしき小五郎を見る。

その視線にクエスチョンマークを浮かべる父親から手書きとコラージュで彩られたメニューをさっと取り、コナンに見せながら提案する。

「コナン君はこのオレンジスムージーとかどう？」

ボクも珈琲で良いよ、と言いかけるが普段小さな子供が珈琲をごくごく飲んでいるのを咎められてばかりなので大人しくその提案をのむ。

結局、コナンを抜いた面々は珈琲。絹江と蘭と人巳はケーキセットも頼む。

絹江は食欲が無い様だったが、疲れの溜まった様な表情なので周囲

に勧められてだ。

「それにしても、そちらはどういったお集まりで？」

正直正面に並んで座る、白と黒の二人の方が、どういったご関係で？となるが、もう既にバンドのメンバーだと聞いているのでそれ程違和感を感じなくなつて来た。

「私の弟が行方不明なんです…それで名探偵の毛利さんにご同行をお願いして、探しに」

一応依頼内容はプライベートな事なのだが、本人が明かすのなら問題ないだろう、という事で加賀知と黒井にも宮口正平の写真を見せる。

姉への連絡は一週間前なのだから、今日始めて訪れたという二人が見かけた可能性は限りなく低いだろうが、念のため。

「それは、さぞご心配でしょう」

その言葉と共に、加賀知は写真を受け取り黒井にも見せるが双方とも心辺りはないと申し訳無さそうに写真を返した。

「ねえ。あのおじさんなら何か知ってるんじゃないの？」

コナンが指差したのは、チェックインした時から窓際の席で足を組み何事かを考えるようにしている中年の男。

「駐車場の車も、ボク達のと加賀知さんのしかなかったから近くの人なんじゃない？」

「え？」

と呟いたのは誰か。

その疑問符が何か分からずえ？と少年も首を傾げる。

「そんな奴居たか？」

思い出そうとするように斜め上を見る小五郎の声に、自分が指差した方を見るコナンだがそこには誰も居なかった。

あれ、確かに居たはずなのに…おっちゃん達に話すために振り返った際に席を立ったのだろうか。それにしても足音等は一切しなかったが…。

「お待ちせしましたー」

度数は入って居ない眼鏡を外し、ごしごしと目を擦るが再び中年の

男の姿が見える訳でもなく、代わりに視界に入ったのオレンジ色の液体の入った大きなグラスだ。ミントと柑橘類の爽やかな匂いと、それよりも強い珈琲の香り。

レビュウの有った珈琲は確かに美味しかった。

「お水も、ちよつとラズベリーみたいな味がして美味しい」

「お洒落ですよね」

珈琲と美味しい手作りケーキ絹江も少し息をついたのか、薄く微笑むが、黒井は何故か加賀知を見上げて軽く睨んでいた。

「趣味が講じて始めたのだけど、喜んで貰えてよかったわ」

亀山祥子は非常に気さくで明るい。商売人と言うよりはいくつになってもお洒落なお母さん、と言った所か。

旅館を経営する支配人に今後の広報に関わりそうな、行方不明案件について率直に聞くのは憚られたが、彼女になら大丈夫だろうと、宮口正平に付いて尋ねる。

「さあ…どうだったかしら…？私も主人も、完全にやりたい事を好きにやっているだけだから、お茶にもお食事にも来ないでお泊りだけの人だと顔を合わせないから…ああ！でも、今日お泊りの、皆さん以外にもう一組いらつしやるんですけど、その人達はちよつと一週間前に来ていたから、ひよつとした廊下ですれ違う位あったかも…」

言葉の前半であからさまに落ち込んだ絹江の顔が幽かに明るくなる。

「その人たちは何号室ですか？」

本来こういった事は答えられないのかも知れないが、そこは流石、毛利小五郎のネームバリュー。もともと小規模な旅館。部屋数も限られて居るので教えなくともすぐ割れるだろうと言う事で部屋番号はあっさり判明。

「あ」

黒井が唐突に呟く。

「どうかしたか？」

声をかけたのは加賀知だけだが、皆が黒井を見る。

「その部屋…なんだか焦げ臭い様な臭いがしていました」

その後まさか火の不始末かと慌てた祥子が夫である支配人に声をかけ、合鍵を片手に向かった結果。10畳の和室に黒い妙な焼け跡の線が走り、一人狂気に陥り笑い狂う男性と、性別すらも分からない唯の墨にまで成り果てた人体を見つけ絶叫が響くまで、五分も無かった。

## 閑話とネタと次のシナリオアンケート

ほとんど話は進んで居ないのですが、次のシナリオの準備の為にこの様なページを設けさせて頂きました。

■ここまでのクトウルフネタ

d b 2 d 6

ダメボの算出方法は、S I Z + S T R の値です。

魔術や機械等の補助が無ければ人間の場合ダメージボーナスは1 d 6 までです。2 d 6 の d b を叩き込んで来た時点でおそらく人間では無いでしょう。

ところで、コナン氏のキック力増強シューズは d b 幾つなのでしょうか？阿笠氏は大変な物を作り出して居ますね。

ラズベリー味のする水

ぶつちやけ、支配血清。

10 滴程度でも摂取すると、蛇人間に操られる様になってしまう(幸運ロール失敗で)。

自分や、自分の愛する者を危険にさらす命令でなければ、蛇人間の言うことを聞いてしまう。

効果は1 d 10 + 10 日は続く。

蛇人間さんは、毒薬や薬への興味関心が高いですからね。

■おまけの P C 達

高校生探偵 ( )

女性。なお、中退している模様。

ファンブラー探偵(失笑)。7割は信じない、アホの子。あれれーとかは言わない。馬鹿は空気を読まない。アホの子ロールは無敵。

推理なんかしない。鍵開け？その辺の鈍器で叩き割ろう。

海岸で拾った拳銃を初期値でぶつ放し、夜鬼を打ち落とそうとして仲間を瀕死に追い込んだ。

有名な、毒入りスープでヘマトフィリア患ってる。うっかりでドリームランドへ転送され、ロストして、今現在はマジカロギアで魔法使いをしている模様。

おそらく出張って来たら、あの世界の高校生探偵の胃に穴を開けかねないほどの馬鹿娘。なお、出身はイギリス。

オネエ元自衛官

死者蘇生シナリオの為に作られたPC。奇妙な共闘で、地下鉄で殺された自衛隊員の一人という設定らしい。…そうか…。

戦闘ゴリラ。高学歴の超ハイスツペクオネエ。PLが楽しそうだった。

深きものをお刺身にして食べ、シヨゴスをお汁粉みたいといい食べ、ゴミさん…ミルゴをエビフライにして食べた。クトウルーでグルメレースをしている。

現在はSAN値が全て吹っ飛び、ハスター信者になったらしい。国家権力の方々と繋がりがあつたら良いな、と思う。

厨二病神官（宮司）

執筆者のPC。オンセでのロールがめっちゃくちや恥ずかしかった存在。

厨二病を患ってる宮司。喋ってる事がだいたい意味分からない。初期SAN値90という点以外、突起すべき事は無いが、セツシヨン2つ参加して、報酬でSAN値が100を超えてしまった。

友人のシナリオでNPCとして貸し出したさい、諏訪信仰の神社だった筈が、嘗てイグが信仰されていた事にされたので、現在この神社ではイグが召還しやすくなっています。やめて。

と、書きましたが、この三人は今後出てくる予定はありません。事情は異なりますが、一応皆ロスト扱いですが、要望がありましたら何か考えて見ます。

本編に関係の無い駄文でしたが、お付き合いくださりありがとうございます。  
ございました。

## かまど旅館でいあいあ！8

耳を劈く様な悲鳴に「うるさいです」と言うように、小夜林は耳をふさぐ。

あんまりな光景に毛利の娘と、宮口絹江がお互いに抱きつくように腕を取り合っている。支配人の奥方は、完全に現状を把握できずに呆然と固まっている。

男性陣はすでに再起動して部屋に駆け込んでいる。

一人笑い続ける名も知らない男は焦点は定まらず、口の端の皮膚が裂ける程開いて鳴声と唾液を垂れ流しにしている。これはもう、こちら側に戻ってこないだろうと見切りをつける。

そんな男に「何があった!？」と意識を向けさせようとする小五郎の脇には、小夜林にぶつかった少年、コナンが険しい顔で佇み、部屋を見渡し、数秒で支配人を振り仰ぐ。

「亀山さん！警察と救急車呼んで!!」

「え…警察ですか…!」

驚いた表情とは別の、何か、よくわからない顔をして黒こげの人型を眺めて居た支配人が我に返った様に数度瞬きながら鋭い声を上げた少年を見つめる。

「連絡してきます…!」

そう言ったのは部屋の外で呆然としていた祥子で、階段を駆け下りていく音が聞こえる。

「人巳。大丈夫ですか?」

「あ、ああ。大丈夫だ。少し、驚いただけ…。それより小夜林は何か分かるかい?」

じつと黒焦げの遺体、もはや唯の人型にしか見えない物にも臆せず部屋の中を見回す。

部屋の畳には何らかの凶形の様なもの焦げ付いている。大まかな形は十字に、その四方にそれぞれ違った凶形が足されている。

「そうですね…。人巳は時間に関するアレと言っていました。どの

程度話しても平気ですか」

むやみやたらに知ったことを話すと、連れに多大なショックを与える事も有るだろう。人巳の心労を気遣う。

だが当の人巳が答える前に少年の高い声が割って入った。

「黒井さん、この変な線について何か知ってるの!？」

「…」

ぬ。とでも言うように、小夜林の口元が僅かに歪む。ショックを受けない程度の事を選んで伝えようにも、流石にこんなに小さい子供に教えていいのか…。

「これはちよつと怖いお話だからね。坊やにはまだ早いよ」

どう断ったものかと思案する口下手な黒い人物に、白い方が助け舟を出すも、えーとコナンはいかにも不服そうに繭を寄せる。

「ボクも知りたーい!お願い、黒井お姉さん!」

うるうると眼鏡の奥の大きな瞳を潤ませ、小夜林のスカートを握りしめて見上げる。

「…今夜眠れなくなっても僕は知りません。あれは一時期オカルトマニアの間で噂になっていたものです。ヨグソトースの球霊の印、と言います」

「よぐ、そとーす?」

胡散臭そうに、コナンが呟く。怯えたり、更に興味を見せる様なそぶりもない。なんとも夢も希望もない自動である。

「はい。何らかの神様を召還するとかなんとか」

「黒井さんは何でそんな事知ってるの?」

きりつと、黒井は言い切る。

「キャラ作りです」

横で話を聞いている人巳が小さく噴出すが、ゴシツクとパンク衣装でバンドを組んでいるという二人組み、ああ、成る程な。そういう系統か…と心中で乾いた笑いをこぼすコナンにはその程度の認識だ。

「あんたらも、この部屋から出てっってくれ。警察が来るまでは誰も何も触るなよ。つと、お前もだぞ!!」

堂々と狂人と死人の同居する部屋に乗り込んでいた人巳と小夜林

に小五郎が怒鳴り、ついでに部屋の奥へ進もうとしたコナンの首根つこを掴み外へ放り投げる。気づけば支配人の亀山はケタケタ涎を流し笑い続ける男を何とか立たせ部屋を出て行った所だ。

「…貴方は？」

何処か湿気を感じる声音で人巳が小五郎に尋ねる。

「なに？」

「貴方はどうするんだ？」

「俺は警察が来るまでに出来る事をする」

はあ…と何処か甘いような妙に艶っぽい吐息をもらした人巳が口角を吊り上げてニイと笑う。

「毛利さん、貴方は有名な探偵では有るが権限を持った警察ではない。貴方も一緒に退室するべきだ、そうだろう？」

じつと、何か力の籠った、それでいて緩く微笑むように弧を描いて細められた瞳が小五郎の目を見つめる。

一拍。

「ああ、そうだな」

どこか平坦で気の抜けたような返事をして小五郎が部屋を出て行く。

その光景を、再び部屋に入り込み捜査を続行する機会を伺っていたコナンが目丸くしてみている。その目が鋭く怪しむような視線になる事も確認しながらも、人巳は小五郎を伴って部屋を後にし、廊下で未だにうろたえ佇む絹江に声を掛けながら一階の喫茶店スペースへ向かうよう先導していく。

小夜林は一人部屋に残ったが、まだコナンも人形じみた装いの少女をじつと眺める様に、探る様に廊下から見据えている。

「蘭さん達の所へ行かなくていいのですか」

「それはお姉さんでもしょう？」

「僕はお姉さんではありません。…君には血清が効いて無いんですね」

後半は小さな独り言。よく聞こえなかったのか、小首を傾げる少年に小さくため息を付き諦めた様に部屋から出てくる。

「皆の所へ行きましょう」

そう言つて小夜林は少年の手を些か強引に握つて歩き出した。人はあまり得意では無いですが、この子供は特に苦手です。と心の中だけでぼやいた。

コナンもコナンで不可解な現場から無理やり引き剥がされて不機嫌だ。そんな二人が二階まで降りた所で、カタン、と音がした。

見ると、三十近くいたこけしの一つが倒れころころと二人に向かって転がってくるころだった。

「やあ。少し良いかな?」

こけしを注視していた背中に声を掛けられ、コナンは慌てて振り返る。つい今しがた自分たちは階段を下りて来たが、この人物が階段を踏む音は一切音がしなかった。

「なんででしょうか」

慌てた様子もなく振り向いた小夜林に、男は愛想よく笑い掛けながらなれなれしく語る。

「俺は竹城つて者で、風水師をしてるんだ」

その竹城と名乗った男は、コナンが喫茶店で目撃し、少し目を離れた際に消えた男だった。

## かまど旅館でいあいあ！9

「風水師い…？」

突然自己紹介に、当然といったら当然の反応をしてしまうコナンを攻める事は誰にもできないだろう。見ず知らずの人間がにこやかに「風水師です」なんて挨拶して来たら若干の恐怖や宗教の勧誘なのかと疑うだろう。

増してや怪しい人間の多いご時勢、街中でこんな風に声をかけられた小学生は、思わず防犯ブザーを鳴らすかも知れないのだから。

「ああ。別に怪しいものではないよ？」

そうは言うが、傍目から見たら中々に怪しい黒井も胡乱な視線を竹城に向ける。

「この支配人とは数年来の付き合いでね…。何度も言ってるのさ。ここは風水的に大変良くないってね。聞きやしないのさ、彼は。どうだい？何か良くない事が起きたんだらう？」

「おじさんさっきの悲鳴聞こえなかったの？」

「やっぱり何か有ったんだね。俺は、相変わらず風水的に最悪なこのホテルを見て回って居て、丁度浴場に居たせいで聞こえなかったんだらう。教えてくれてありがとう」

「…」

明らかに胡散臭い。とんでもなく胡散臭い。いくら長年の付き合いを持つ知人の経営するホテルだからって館内を無断でうろつく何て事をするだらうか。

黒井に至っては一切の反応せずに、半ば睨む様に竹城を見ているだけだ。

少女の様な小柄な人物と、見た目だけなら幼い少年に「怪しいおじさん」認定の視線を貰いながらも竹城はにこやかに下階へ降りていく。

不信感を募らせながらも下には既に小五郎も支配人も加賀知も居る。階段を下れば喫茶店スペースからでも見えるだろうと追いはし

ない。

ただ、これ幸いとしつかり握ってくる黒井の手からするりと抜け出して、転がったこけしを拾った。

「…？」

妙な違和感を覚えた。

手に掴み、持ち上げてみるとこけしの重心が移動する。空洞になっており、中身が移動しているのだろう。そつとこけしの底の部分を見る。幽かに中からからからと音がした。

そして裏には。

『2010／3／6』

「どうかしましたか？」

こけしを棚に戻すことなく、じつと固まるコナンに対して黒井が小首を傾げて訪ねてくる。

「う、ううん！何でもないよ！でもボク、お手洗いに行きたくなちやつたから、黒井さん先に皆のところに行つてくれる？」

何かを思案するように斜め上を見ながらも殆ど表情を変えずにした後に「お姉さんを心配させてはいけませんよ」とだけ告げて先に階段を下り始めた。

コナンは黒井がこちらを振り向かないのを確認してから改めて手の中のこけしを見つめる。

やはり作りは拙く、土産用や飾物として市販されるレベルない。にも関わらずどれも顔に特徴があり妙に個性を持っていた。

それに何処となく既視感を感じる。そう。先ほど声をかけた男、竹城に似ているのだ。

とりあえず、それを棚のスペースが開いた部分に立たせ、他のこけしの裏を見てみるとどれも底の部分に日付が書かれている。

「作成日って考えるの妥当か…。数ヶ月に一個位のペースだな」

そう結論付けた所で、こけしの頭部を外せそうな事に気づいた。やはり中は空洞で入れ物の様に成っていた。そつと中身を見てみる。

中に入っていたのは、灰と乳白色の小さく硬いもの。

その小さなものを摘んでよくよく観察して気づく。

「これは……人間の歯……!?!」

形状や磨耗具合からみて恐らく成人のもだろう。そしてこの灰も恐らく人間のもの。

そして全てが同じように重心が動き空洞だった事を考えると……全てに遺灰と少量の骨や歯が入っていた事になる。三十程の、人間の燃え残り。

更にはつとする。最初にこのこけしの群れを見た時に感じたもの。絹江に見せられた弟の写真。

宮口正平に似た顔立ちのこけしが居たのだ。

ぱつと、何処となく正平の面影を残したこけしを掴み取り裏を見る。

『2017／10／25』

絹江に正平からの最後の連絡があった日付だった。

それが意味するであろう真実に険しく眉を潜めるコナンの耳に、『ガシャン』という重い音が響いた。

「!?!」

はつと顔を上げるがそんな重厚な音を響かせるような物は無いくつかのこけしがこちらを凝視するように向いていた。

何か、氷で出来た手で背を撫でられる様な気分を味わいながらも全てのこけしを元の場所、位置へ直した。

マジカロギア編予告！名探偵と禁書を追え！（四月馬鹿）

それは衆目の前で起きた。

まるで己の技を誇示するかの用に、スポットライトの中を数々の仕掛けを潜り抜けた怪盗キッドがこの度の獲物であるビッグジュエルへ手を伸ばそうとする。

本来それは窃盗行為。非難されるだけのはずのそれが、観客のように集まった野次馬たちはまるで称えるように感嘆の声を上げる。

今回も、彼は華麗に宝石を持ち去るのかと思いきや、その想定は大きく裏切られる。

「偽物の羽しか持ち合わせない、哀れな鳥さん。これは私が頂くね」  
舞い降りた。そう、比喻ではなく、白い大きな翼を羽ばたかせた人間がキッドの触れようとした宝石をさっと持ち上げ、飛び去って行ったのだ。

翌日の新聞、ニュース、話の種は怪盗キッドの獲物を掠め取った翼人で持ちきりだった。

「いったいどんなトリックか、はたまた集団幻覚か…」

警察は何一つ痕跡を見つめる事は出来なかった。



大法典に所属する第五階梯の魔法使いは、眠そうに瞬きをする。

「仕事を立て込んでいるのにごめんなさいねえ。急を要する案件なのよお」

分科会に集められた面々は固唾を呑んで眠そうな魔女を見つめる。

「今回観測された魔法災厄は、禁書『怠惰の翼』だと考えられているのねえ」

「はい！センセイっ！断章二つの禁書がなんで急を要するんです

？」

金茶の髪をポニーテールにした青い目の少女が元気よく手を上げる。

「それは、魔法災厄の起こった地域と状況が問題なのよお……。その土地を米花町といいます。そして状況。来訪者であるリートさんをご存知かしらあ？『怪盗キッド』という魔法使いモドキ：マジシャンかしらあ？彼の前に現れたせいで日本全国に、魔法が晒されてしまったのよお」

「それは問題ですね。これ以上目立って隠蔽の限界を超えてしまいません」

如何にも魔女、といった出で立ちの女が繭を潜める。

「そうなのよお。だからねえ、事前の情報収集が間に合っていないのよお」

「それでもいくらか分かっている所あるんでしょ？」

片目を眼帯で覆った獣耳を生やした少年が首を傾げる。

「今のところ怪しいのは、この辺りねえ」

眠そうな目をした魔女が、宙をぐるりと指でなぞると幾人かの人物の顔が映る。

「断章に憑かれてると思われ人物に直接会った『怪盗キッド』：ただ彼は変わった魔力で守られて居て調査がまったく進んでいません。そしてこちら『毛利蘭』過去から現在までただの愚者で在りながら『怪盗キッド』との接点が多すぎます。そしてこの子『江戸川コナン』愚者達の中で、『キッドキラ』と呼ばれています。：本当になんの情報もないのよお：周辺から地道に埋めるしかないのよお、ごめんなさい？」

情報不足の中、その分科会は動き始めた。



「ハジメマシテ！リート・神埼と言います！イギリスからの交換留学生デス！短い間ですが、よろしくネ！」

帝丹高校に現れた、金髪青目の少女。

◆ 学校からの下校中、江戸川コナンの後をちよこちよこことついて歩く  
隻眼の黒い子犬。

◆ ある路地裏でぶつかる二人の魔女。

「大法典に敵視もされない妖怪風情が、小賢しいものですね」

「魔女の誇も捨てて傭兵に成り下がった奴が何を言ってるの?」

一触即発。

『絞首の花』、セーレム・インスマンが魔女とは何かを教えてあげます」

「赤魔術の正当な後継者が魔法の何たるかを教えてあげるわ…!」

◆ 飼い主の見つからなかった隻眼の子犬を、蘭の許しを得て家に上げたコナンはその小さな犬の頭をなで、寝仕度を整える。

犬は既に枕元で眠っている。

かつん。

窓に何か硬いものは当たる音がして振り向くが、なんともない。何かゴミでも風に飛ばされ、窓を叩いたのだろうか。

横で既に就寝している小五郎は鼾をかき、気づいた素振りもない。

丸まっていた筈の犬だけが、ピクリ、と耳を動かす。

「えーコナンくん?」

小さく名前を呼ばれた気がしたが、周囲に何の気配もない。

「エツト…新くん?」

「!？」

なぜ、そんな呼びかけが聞こえるのか。いったい誰が…?

闇の中で身構えると同時に、窓の外に人影が見えた。金髪の、高校生程度の少女。決して足場のない上階の窓の外に少女が僅かに上下しながら此方を見ていた。

◆  
来訪者であるリートは己も馴染みのある高校へ毛利蘭の調査に向かったが：魔法を上手く使えずにその反動が運命変転となり、此度のアンカーである蘭へ向かった…。

それは悔やむことであり、魔法使いでありながら人間である事を忘れない彼女の心を大きく揺さぶったが、事件はそこで起こった。

蘭へ襲い掛かった運命変転は『別離』親友や恋人、親や兄弟、大事な人間との別れ：その魔力の歪みは彼女の愛する想い人へ向かった：が、想い人である『工藤新一』へ不幸が降りかかった様子はない。『なんでかと思つて、俺が君を調査してみたら『工藤新一』は『江戸川コナン』だった分けた。俺達風に言うくと、君は一つの存在だけど、二つの名前と周囲への認知で世界に対して二重のアンカーを打ち込んでいるんだ」

コナンの後を付いて歩いた子犬は、見かけだけは同い年位の幼い少年になってそう説明した。

「新一くんは、凄い探偵なんだよね!?!この魔法災厄を収める為に、手をかしてヨ!君もこまるでシヨウ!」

こうして、魔法使いと探偵の禁書を巡った騒動は幕を開けた…。

嘘です。エイプリル様の嘘予告みたいな奴でした…。

## かまど旅館でいあいあ！・10

ずっと階段の踊り場まで折、折り返しもう半分下るところで小夜林は立ち止まる。

二階を見上げればトイレに行くと言っていた筈の少年はこけしを一つ一つに手に取って眺めている。しばらくその様子を見ていた小夜林は、またため息をついてから、蹄を模したブーツを脱ぐ。

また声をかけられては面倒だと、否応なく足音が響いてしまう靴を脱いでそつと階段を上がって行く。

「…」

どうやら、余程集中している様でこちらに気づきそうにはない。

こちらに来ないのならば、まあ、別に何をやっていても良いだろうと無視し死体の有る部屋まで戻った。

「遅かったね。小夜林」

部屋の前にはすでに人巳が居て、腕を組んで待っていた。

「あの子をここから離れたかつたんですよ。15、6のまだ幼い人間に見せるものではありませんから。…人巳の方は問題ありませんか」  
「問題ないさ。私は人に『お願い』するのが上手だからね」

何か含みを持たせて笑む顔に、若干面白くないものを感じながらも小夜林は少々顔を顰めるも、既に長い付き合いで散々風変わりな事件に共に巻き込まれ、彼女はそういった性格なのだときらめる事にし早々に探索を始めようと件の部屋へ踏み込む。

「無能共を呼んだ様ですから、手早く済ませましょう」

「おや。手厳しいことだ。…そうは言っても私は今回あまり役に立てそうにないね。これはどう見てもオカルト10割の現象だろうか？」

「もし、僕が何か見落とした時よろしく」

まあ、無駄に探りすぎてショッキンクな物をひっぱりだしてしまう事もあるのだが…。

小夜林は、残念ながら、という訳でもないが人間の死体如きなんとも思わない。正直ただの有機物、肉、という認識だ。

なので必然的にこちらを調べるのは小夜林だろうと、部屋に転がる

顔立ちも性別も分からない黒焦げの人間だったもの。完全に炭化しきり、皮膚も肉も骨も同じ炭に成り下がっている。

これだけ豪快に焼けているにも関わらず、その人物以外はまったく焼けた跡も無い。焼けた人間を持ってきてここに置いた様な有様だ。

そうになると、気になるのは部屋全体に広がるヨグⅡソトースの球霊の印だろう。魔術師でもない様な人間二人の魔力で如きで神格を呼ぶ事などできるのだろうか。

それならこの部屋に何か、マジックアイテム等が落ちていないかと探す。無能な癖に此方の動きを制限してくる警察がつく前にそれだけでも回収して置きたいのだが…。

「おっと。小夜林。面白い物が落ちてるよ」

できるだけ死体を視界に入れないように部屋中を探索していた人巳が屈みこみ何かを摘み上げるようにして、呼びかけた。

「…ウィジャボード、という奴ですか？」

「の、ようだね」

娯楽、遊具として作られた交霊術を占いゲームとして作られたものだ。要は日本でいうこつくりさんだ。文字をなぞる為のプランシエツトも一緒に見つけた。

「交霊術、しかもこんなゲーム用の玩具で神格は呼べ無いと思います…。この部屋の彼らとは別に術者が居て、偶然この炭の方とお連れの方はその招来の中で交霊に手を出してしまっただけですかね…」

意見を求める様に長身の相方を見るが、人巳は大仰な仕草で額に手をやり天を仰いでいた。

「なんですか」

「相変わらず、小夜林の言葉は頭が痛くなるよ…」

「僕も人巳の使う薬物はさっぱりですけど…難しい事を成し遂げようとすると人巳は、好きです」

芝居がかった仕草から、虚を疲れた様な表情になった人巳はふふつと笑ってかなり低い位置にある小夜林の頭をなでる。

「君は突然可愛い事を言う」

「…失言でした。無能共が着く前に他の人間の所に合流しましょう」

照れ隠しにそっぽ向き、奇妙な形の蹄のブーツを履きなおしてそそくさと部屋を出た。

かまど旅館でいあいあ！・11

遺灰、それも混じっていた歯の形状的に人間の物だと思われるもの。そんな物を見つけてしまった上に、なんとも奇妙な音が響いたのだ。

どうにも、腑に落ちないもよもやとしたものを引きずりながらも蘭や小五郎、死体と共にいた名も知らぬ男性の元へと戻るべきだろう。竹城という自称、風水師という胡散臭さ満点の男も合流しているはずだ。彼からも聞きたい事はある。

宮口正平に、偶然というにはあまりにも顔の特徴を捉えたこけし。その中にも当然の様に入れられていた灰と骨の一部。そこに記された日付は姉である絹江へ「助けてくれ」と言葉を残した日と同じものだった。

これは限りなく支配人のクロが濃厚だが、今この場でそれを暴き立てるのは不味い様に思う。宮口絹江という依頼人は弟に対して些か過剰な反応をする。

この旅館に来るまでに幾度も、「あの子には私が居なきやだめなの」と繰り返している。

人間が不自然な形で焼け死んだ上で、件のこけしの話などしようものなら彼女がいったいどういった行動に出るかわからないのだ。

「…あれ？」

こけしやその中身、支配人と面識があるらしい竹城についてどう話を詰めていくか考えていたコナンのは目の前の光景に首をかしげた。戻ってきた一階の喫茶店スペースには、いくらか人が足りていなかった。

コナンと黒井より先に一階へ向かったであろう、竹城という男。途中まで共に来た黒井。

彼女の連れの加賀知。

その三人の姿が見当たらない。まさか旅館の外に出たわけでは無いだろう。どう見ても不信な人死にがあつたのだ。動揺する女性陣は兎も角、もと警察官であり今でも数多の事件に巻き込まれる小五郎も

居るのだ。その状況でこの旅館から出ていくなんて無理な筈だ。

「おや？どうかしたかい？」

振り返った背後、たった今コナンも降りてきた階段から白と黒の人影がこちらに向かいつつ声をかけてくる。

「加賀知さんたち…いつの間、何時から皆のところから離れたの…？」

それは不信感を込めての問い。

コナンは終始二階にいたが、その二人が上ってきた気配は一切しなかった。それ以前にこんな状況でふらふらと歩き回っているというのも不信感を加速させる。

「ついさっきですよ。僕たちも君と同じようにお手洗いに行っただけです」

しれっと、何て事無いように黒井は答える。

「コナン君！遅かったじゃない！一人でどこいったのよ」

心配そうな顔をした蘭が、絹江を祥子に任せ階段下でたむろする三人にかけよりながら声をかける。そんな彼女に謝罪する以前に思わず問いを投げ掛けてしまったのは仕方ないだろう。

「ねえ！蘭姉ちゃん！加賀知さんたちってさっきまでここに居たの？ずつと？ボクも今上から降りて来たんだけど、すれ違ったりしないで、へんだなーって」

無邪気に不思議がるように訪ねてみると、蘭はきよとん、として、何を聞いているんだ？とでもするように小首をかしげてから淀みなく答える。

「ええ。人曰さんたち『ついさっきまでずつと一緒に居た』わ」

淀みなく、答えたはずなのだがその言葉になんとも言えない酷く感覚的な違和感を覚える。

「それじゃあ、ボクが戻って来るまでに、竹城さんっていうおじさんが一階に来たと思うんだけど…そのおじさんは？」

今度こそ彼女は不思議そうにして答えた。

「そんな人、来てないど…。それよりも勝手にどっか行っちゃだめよ。」

そう言いながら手を引かれ、皆の所へ向かおうとするがコナンは慌ててしまう。

来ていない？そんな馬鹿な。確かに彼は階段を下って行った。そこを下れば確実に喫茶店のスペースからも見えるだろうに：まるで途中で消えたとでもいうのだろうか。

「：そうです。じつとしていられないのなら、僕と遊びましょうか」馬鹿な。という思いで階段周辺をきよろきよろ振り返る幼い少年の姿を見て何を思ったのか黒井がそう話かけてくる。

そして何かをこちらへ示すように差し出す。

「ウジャボードというものです。こっくりさん、たとえば君も分かるでしょうか」

名称や、その由来なぜコインやグラスかが動くのか、という事は知ってるが、オカルトという側面からは全く信じていない物のだった。

## かまど旅館でいあいあ！12

ウイジャゲーム、コックリさん、チャリーゲームなど簡単な準備と数名の人間で行う交霊遊びの様なもの、は世界各国に存在し作法に差異はあれどだいたい同じような儀式めいた行動をする。

この日本ではコックリさんと呼ばれ、10円玉と五十音表を使うものが主流だろう。それはある程度の間隔をあけて突如子供たちの間で思い出された様に流行ったりするのだ。

心霊的なものをとんと信じないコナンは、かれこれ二度目の小学生であるがコックリさんの流行を経験したことはない。

まさかここで初体験するとは思っていなかった。

コナンとしては先ほど見つけた遺灰らしきもの、姿を消した竹城、宮口正平の行方、明らかにおかしいな焼死体など調べたい事は山ほどある。それなのに、黒井に捕まってしまったのだ。

彼女の思惑としては、大変な惨事の中でじつとしていられない幼い子供の気を引いてじつとさせようというものなのだろうか…。

「本当にやるの?」

正気を失って笑い続ける死体と共に居た男と、弟の安否が気掛かりで落ち着かない絹江。そんな二人をなだめる大人たちから少し離れた位置で黒井とウイジャボードをはさんで向かいあっていた。

「怖いですか?」

「怖かねーけど…」

うっかり素がはみ出てきている。

「好きな子の気持ちでも聞いてみますか」

淡々と表情を変えずに訪ねられ、瞬時に蘭の顔が浮かび苦笑する。こういった類の交霊遊びは参加者それぞれの微妙な筋肉の動き、意識で制御できない僅かな振動が影響しあい勝手に動いたように見えるのが殆どだ。

無意識とはいえ、そこには参加者の期待も混じるので恐らく蘭について尋ねたら…と。

「黒井さんは好きな人居るの?」

そう聞きつつも、離れた所にいる加賀知に視線を送る。二人の言動を見る限りでは互いに特別な感情を抱いている様に見える。

性別に関してはそんな野暮な事は言わない。

「…人は見かけに寄らないものですよ」

「え…?」

「いえ。直ぐに考え付かない様でしたら僕が何か聞いて見ましょうか。『ヨグソトースには何処で会えますか?』」

アルファベットで書かれたボードを見ると文字を辿る。コナンにしてみれば、勝手に引つ張られる感覚だ。恐らく黒井が子供を楽しませようと動かしているのだろう。

— basement

「地下…?」

「凄いですね。最近の子は普通に英語が読めるんですね」

「ちよ、ちよっとだけだよ。それよりヨグソトースってさっきの部屋で言ってた、アレ?」

「『地下に行くのに特別な手順は要りますか?』」

無視して黒井は次の問いを投げかける。

ボードの数字の羅列を順に示してみせた。

「君も何か聞きますか?」

もしか、黒井はこの旅館について何か知っているのではないか、と思いはじめた。あのこけしの中の灰の正体や行方不明になった宮口正平についても。

僅かに躊躇い、少し含みを持たせて問う。ウィジャボードに、と言うよりも黒井に対しての疑心をぶつける様に。

『宮口正平は…生きています?』

『どこに』とは問わずにあえて生死を尋ねる。

また勝手に腕を引かれる様な感覚を覚える。

— NO

「黒井さん、あなたは何かを知ってるの?」

「僕はここについてなにも知りませんよ。だから聞いているんです。なんなら聞いてみましょうか?」

相変わらずの真っ黒な衣装に、真っ黒な髪、真っ黒な感情の無い瞳がじつとコナンを見据える。視線を動かさず此方を真っ直ぐに見たまま問いを発する。

『僕は今嘘をつきましたか？』

—NO

視線も向けられない手が勝手に動く。

そして瞬きなく続ける。

『ではコナン君は嘘をついていますね』

—YES

闇のような混濁の瞳にざわりと寒気を感じたところで、旅館の外からサイレンの音が聞こえてきた。

## かまど旅館でいあいあ！・13

精神分析（物理）の使い手では無いことを悔やみながら、人巳は小夜林と江戸川少年の方をちらちら見ながら正気の沙汰でなくなっている男をなだめようと、周囲の人間に合わせ奮闘しているのだがちつとも効果がないのだ。

マトモな思考回路をして此方をすっかり認識するのならば、その認識をずらす方法は幾らでもあるのだが、こうも狂乱されては手の施しようがない。

「おっと、むの…警察がようやく到着したようだ」

人巳はヒトよりも耳がいい為に、すぐにサイレンの音に反応して周囲の者たちにも告げる。絹江や発狂中の男は相変わらず顔色は優れないが、その他のものは安堵した様な表情をする。

…支配人以外は。

そんな事はどうでもいいの。人巳にとってはニアに押し付けられた案件。恐らくヨグの件だろう。それならば、問題はその召喚阻止ないし、術者を探しニアに伝えればいい。

後は…。

さつさと入って来た警察に一番に話しかけ、すぐさま小夜林と少年のもとへ向かう。

「小夜林。警察が来たようだから事情を話しておいで。私はもう『話し終えた』からね」

別に、子供に嫉妬したわけではない。ああ。もちろんだとも。

目を見開き、驚いたように固まる少年からそつと手を離し小夜林は無言で頷き人々の輪へ向かっていく。救急隊員が未だに叫び、口が裂けそうなほど開けて笑い狂う男を救急車に乗せようとするが盛大に抵抗している。アレはそろそろ物理で精神分析をするべきだろう。実際に精神病院でまれに絞め技で暴れまわる患者を沈静させることもあるらしい。

「江戸川君。小夜林はそんなに怖がらせたのかい？」

小夜林に手を握られた状態でウイジャボードに添えられていた手

を、未だに信じられないといった顔で見つめている。

「そういったものは、人間の筋肉の微動で動くものだ。なに。怖がるものではないよ」

「う、うん…」

なんとも解せぬ、と言った顔ながらも頷く。

「さあ。警察が来たよ。お父さん…いや、保護者の方の所へ向かうべきだ。…ああ彼はこれから現場に行くんだね。それならお姉さんのところへ行こう」

解せぬ、といった顔からすぐさま何かを思案するような顔をして、さも『無邪気です』といった表情を作って人巳に人懐っこい声を上げて腕にしがみつく。

「えー！ボク、加賀知さんともお話ししたい」

おやおや、と些か怯み、どういった対応をするべきかと悩む。

そんな二人をお構いなしに笑い狂う男の狂乱は更に拍車がかかってきている様で、救急隊員一人を突き飛ばし駆け出そうとする。それを今まで絹江の背を撫でていた少年の姉らしき人物が直ぐに反応し、止めに入ろうとするがその前に小夜林が蹄のブーツで回し蹴りを叩き込んでいた。

ああ、アレは痛い。なんの配慮もしていないだろう。

それに背の低い小夜林の蹴りは相手にとっては妙な位置。ちやうど身体を中心。主に股間にヒットし、そのまま撃沈していった。

周囲にいた男性人が内股になるが、救急隊員はいち早く復活し男を担架にのせ搬送していく。

「ね、ねえ…黒井さんって何者？」

何者、と言えば彼の姉、毛利蘭も何者だ、と疑問を抱くほどに反応が早かった。あれは何かしらの武道を極めているだろう。

「小夜林かい？何者…と言われてもうちのバンドのヴォーカルさ。あの体格でなかなか腹のそこに響くようなしっかりした声を出すんだ」「そういう事じゃなくて…」

「何か妙な事を言われたかい？あまり深く気にしない方がいい。私も小夜林が『なんなのか』は良く分からないんだ」

「……」

どうももどかしそうな顔をしながらも、僅かに含みを持たせた言い方をすればぼつと顔を上げる幼年を人巳はまじまじと見て、心中でほくそ笑む。なるほど。この子は随分聡い様だ。そしてあらゆるものを見逃さない。

これは使える。

子供だろうが、いや子供だからこそ、気づくことも有るだろう。なに、滅多なものを見ても理解しなければ大したことはない。

人巳にとつては縁もゆかりも無い子供だ。それならば利用：協力して貰おう。

男性人が警察と共に階段を上がり、その後を女性人が進むのを横目に人巳は少年の直ぐ横にしゃがみ込み声を潜めるように囁く。

「実はねここだけの話が有るんだが、聞くかい？」

此方をはつと振り向きながらも、目を輝かせ、まるで期待するような言つてしまえば楽しそうな顔をする。

「うん！聞きたい！教えてー！」

ふふふ、と喉の奥で笑つて耳打ちする。

「実はだ、私は有る人物にここの旅館で妙な事が起きるといふ情報を得てね。それを調べに来たわけさ」

「それでさっきの黒こげな死体みたいなことが前にも起きたの？」

「さあ。そこまでは。ただ妙な事、しか教えてくれなくてね……。しかしあの件も関わっているんだろう。どうだい？君も一緒に調べてくれるかい？」

江戸川少年はしばし、人巳の爬虫類を思わせるどこか冷えた瞳を覗き込みその言葉に嘘はないかを探る。そして決心した様にして子供らしい天真爛漫さでもって大きく頷く。

「うん！」

表情には出さずに人巳はにやりとする。

人心を掴み、それは惑わせ動かすのは彼女の得意とする事だ。

## かまど旅館でいあいあ！14

現代日本では浮きまくり悪目立ちする格好に騙されるが、その顔立ちは間違いない絶世の美女である加賀知の目をしっかりと見つめながらコナンは思考する。

果たして、宮口正平の件やこけしの中の遺灰など。

彼女の言葉に嘘は見られない。誰かに頼まれてこの旅館の機密を探りにきたという。正直、自分で言うのも虚しいがこんな子供に打ち明ける事ではないだろう。

いや、子供だからこそ話したからと言って何も影響はないだろうという驕りか。

それならば、加賀知の提案通り『協力』するのはありかもしれない。警察がきてしまった以上、大人である彼女の目があるという建前で行動の制限も減るのではないかと考えた。

：黒井よりも得体の知れなさが無い、というのも理由なのだが。あわよくば彼女との会話から黒井という人物につて探りを入れられれば、という事も。

そう考え、子供らしく無邪気さをいっぱい浮かべて元気良く頷いて見せる。

「うん！」

加賀知が、出会いの様に、どこか蛇を思わせる様な笑みを浮かべるのに僅かにうすら寒いものを感じながらも彼女へ問う。

「加賀知さんが他に聞いたことってないの？」

ふむ。と彼女は僅かにだが考える風にして顎を引く。

「あいつは、こちらが困ってるのを愉しんでいる節があるからね。私たちに指示だけ寄越して『何が』とは一切教えずさ」

「それ…すつごく怪しくない？」

よくもそんな大雑把な話、しかも相手は自分たちを困らせて楽しんでる事を確信しながらも頼みを聞いてやってくるなんて余程親しい仲なのか、弱みでも握られているのか。

「ああ、そうだろうね。なんせあいつ自身が胡散臭さ10割みたいな

存在だ。まあ、そういう訳さ。私の分かっている事なんてほぼない。  
：君は何かこの妙な事に気づいたかい」

一瞬躊躇ってから、宮口正平の事、こけしの中の遺灰の事、風水師と名乗った竹城の事を話す。

その三つを聞いて加賀知は一つ頷いてから、喫茶店のスペースで警察や救急隊員と言葉を交わす数人を眺めてからコナンの手を握って引く。

その手の異様な冷たさに一瞬怯むが、向かう先がロビーのカウンターだと気づきそのまま付いている。

不思議な事に、加賀知が警察の目の届かない所へ向かうのに咎めはしない。

「ねえ…加賀知さん、ボクの話信じるの？」

「おや、『嘘つき』なのかい？」

「…嘘じゃないけど…」

もう一度、警察と人々、特に支配人の様子を見てから、どうどうとカウンターないの帳簿を漁り、コナンに渡してくる。

黒井の『嘘を付いている』という言葉と重なる。

それでも渡された帳簿を捲り、宮口正平の失踪日まで遡りつつ、竹城という名前を探す。

支配人の言う通り、宮口正平が『宿泊した』という記録がないが、ちやうど絹江にメールを送った日付に赤松隆二という人物の名前が残っていた。

「ところで小夜林は、何か言っていたかい？」

「加賀知さん、黒井さんと仲良しなんだから直接教えてもらえないの？」

「あー…小夜林は、ちよつと謎が多くてね。私にも教えてくれない事が多いのさ。それでどうだい？君の知りたい事は分かったかい」

少し意外なものを感じる。彼女たちはまるで友人以上の様に接しあっているの样に見えたが案外お互に未知の部分が多いようだ。

「うん。少し気になった事はあったけど…これといった決め手は…」

「よし。じゃあ次だ」

「次？」

再びさつと、コナンの手を引きカウンターの奥の扉へ向かう。スツフルームとプレートが掛かっている。

さも当然といった様にノブを数度回し、

「やはり施錠されているか」

そして当然の様に裝飾過多なネクタイピンを外し鍵穴に差し込む。

「ちよ、ちよつと加賀知さん……！」

コナンも捜査の為と、うっかりすれば違法な侵入を果たしたことも有るが、正直現在の子供の姿という事を免罪符に使っていた節がある。

それを、成人した人物がこうも堂々と錠前破りを決行する事に驚いた。

「ふふふ。良い子はマネしてはいけません。生き延びるためにこういう事が必要だったりするのさ」

がちやり。

とネクタイピンであつさり解錠してしまい、愕然とする。

「さあさあ、無能共が騒いでいる内に早く済ませてしまおうか」

加賀知に促されるままに、スツフルームに踏み込む。

そこは小さなキッチンがついた、下手をすれば生活する事も可能な一室だった。実際に生活感も感じる。

「私はここで見張っていよう。好きに調べるといいよ」

…なぜ子供に対して、加賀知がここまで放任してくるのか些か引つかかるが、利用させて貰えるならば利用しよう。

先ずは、と押し入れに手をかけた。

そこに数冊の本や、ノート、おそらくこけしを作る為の工具、そしておびただしい数の時計、特に腕時計が多い。

あの飾られたこけしが支配人が作ったと言うのなら、『中身』も彼が『作った』可能性が高い。

そして一冊のノートを開く。

「これは……！」

西暦と月日に人名、そして時間と1000度付近の温度が記されて

いる。

一番最近の物に、宮口正平の名前が確かにあり、そしてコナンの記憶が確かならばこの日付はこけしの底に書かれた日付に一致する。

やはり…宮口正平は、支配人は…、と思うところで、ふと、目に入る。あのコナンと黒井の前に現れた風水師を名乗る男、竹城の名前が記されていた。

「なるほど…」

見上げるといつの間にか加賀知が背後からのぞき込む形で見下ろし、あの蛇を思わせる妖艶な笑みを浮かべる。

「黒は彼か」

## かまど旅館でいあいあ！15

物怖じしない江戸川少年が、あちこちと家探しをしてくお陰で魔導書やおぞましい物の目撃を回避出来ている。有難いことだ。

その成果として、少年が一冊のノートをじっくりと検分している。暫く覗き込んでいても何の異常も無さそうなので人巳も背後からそれを覗き込んだ。

そこに書かれて居るのは人名に日付に、高温の温度と時間。

江戸川少年から得た情報を考えうると、恐らくここに書かれた人間は死んでいるのだろう。…あの部屋にあった死体の様に燃やされて。しかしこのノートに羅列されたあ人物たちは、何てことはない。ただ人間に殺されただけだ。

邪神の類は絡んで居ないのだろう。

その中で気に成る名前。竹城、といったかこの江戸川コナンや小夜林が目撃し、忽然と消えた男の名前が記されている。

死んだ男が出歩くものだろうか？

昔の自分ならば、そんな馬鹿な、と笑い飛ばしただろうが今は違う。散々つけたいな事象に巻き込まれたのだ。今ならばその問いに「是」と答えるだろう。

恐らく、竹城は魔術師の類で、時間に関するアレを信仰していたのだ。

それが何らかの理由で殺された。

殺された魔術師はそれを良しとせず、己が信仰するものに縋ろうとした。召喚し、時を巻き戻し殺された事を無かった事にする為か…。

恐らく殺したのは支配人か…。竹城の後にも名前が連なつて居るのを見るに、彼より後に死んだ者は贄か。

「なるほど…。黒は彼か」

支配人は恐らく、自信が邪神召喚の為の贄を作っていることは気づいて居ないだろう。と、成ればニアの依頼を解決するには竹城…いや、人巳には死者をどうこうする能力は無いので、知らない内にはとは言え、贄を運び続ける支配人か、例のアレとの接点を持った呪物を

壊せば良いのだろうか…。

と考えた所で、江戸川少年が此方を見上げて居るのに気づく。

「…加賀知さんは、どうするの?」

どうする、というのは恐らく人理の内の殺人者の方の事だろうが、正直人巳にとつてはどうでも良い。そんなものは此方に向かなければ無害という物だ。

だが、ヨグIIソトースの召喚に関しては、

「止めなければ成らないだろうね」

「どうやって?」

話が食い違つて居るのは承知しているが、ここで余計な行動を起こされても面倒になつてくる。このまま無能共に嗅ぎつけられた場合、諸悪の根源の魔術師や召喚の為のリンクを排除する事は出来ないだろう。

「そうだねえ。先ずは、確固たる証拠でも確保してみるとしよう」

勿論、支配人の行いではなく魔術的痕跡の抹消の為の、だが。

「江戸川君は、もう少し私に付き合ってくれるかい?」

一拍置き、少が真面目その物の顔で頷く。

その意を決した様な表情に何とはなしに微笑ましいものを感じる。

知りたいという事は、今現在は無知だという事。無知で有るが故の探求心は知ってしまった後には味わえない興奮を齎す。

初々しい事だ。

何れ、知る事が恐怖と同義になる時が訪れ、知る事が失う事に転化する日が来る。

「この旅館で妙な所つて、後はここだよね?」

スタッフルームからそくきと出るが誰にも見とがめられたりはない。先程無能共が到着した際に少し、認識を歪めて彼らには私が認識できないものとなつて居る。

「私達」の良く使う手だ。

稀に効果の薄い者が居るのが面倒なことだが、小夜林が彼方に残り

意識を逸らせて居るだろう。

：ただ、あのこは所謂コミュ障である。逆に事情聴取に時間がかかり好都合なのかも知れないが。

そんな訳で楽々とやって来た扉の前には旅館の作りとは些かそぐわない扉。

しかも電子錠が設けら0～9までの数字をいくつか入力しなければならぬ。

「…あからさまに怪しいが…しかしなあ」

残念ながらこの数字の鍵について、人巳にはさっぱり手掛かりがない。：少なくとも、奥方の誕生日や記念日などでは無いだろう。

あの時計への異常な執着心を考えるに、最も気に入った時計の製造番号や、そんな所だろうか…。

しかし今、彼らには人巳は認識できない物となっている。この時点から話を聞きに行くのはほぼ不可能だろう。

という障害に美しい顔を歪めた人巳の視界で、江戸川少年が酷く困惑した様な自分自身が信じられない、という様な顔をしながら電子錠へ、恐る恐るといふ様に手を伸ばす。

「…江戸川君は心当たりが有るのかい？」

いや…と、子供らしからぬ冷え切った、しかしどこか不安げに揺れる声で否定する。

「さつき…黒井さんがこつくりさんで『地下に行くには特別な手順は要りますか？』って聞いた時に、ちょうど数字を示してたから…まさか、と思つて」

そう、何故自分がそんな事を試して居るのか理解できない、でも試されずには居られない…と言う様に小さな少年の指が順に数字を入力していく。

そして、がちやりと音を立てて扉は解錠された。

「まじかよ…」

ぼそりと呟く言葉に礼儀正しいが好奇心旺盛な子供の影が無かったが、人巳は今現在超常的な現象の結果を目の当たりにどうこの事象を受け止めるべきかと同様する少年の為にスルーして置く事にした。

こつくりさんで、コインが動く事はまま有る。参加した人間たちの筋肉の僅かな震えが影響し合い、何らかの言葉の様な物を綴り、期待感からか人間は勝手に脳内で補正を加える。

その程度のものだ。

その程度の筈のものが、正確な答えを与えたのだ。

暫く考え込んだ江戸川少年の表情は面白い程ころころ変わる。

その変化を眺めて居る人巳は思わず苦笑を零すが、少年は自分の思考に囚われていて気付かない。

「加賀知さん…本当に黒井さんって何者なの…？」

結局、現実的な回答である小夜林がこの件に絡んでいる可能性に落ち着いたらしい。

この子供、幼い割に頭が固いらしい。超常的な物は受け付けられないと見える。そのくせ探求心は旺盛。

これは、『あいつ』に目を付けられ易そうだ。

非常な現実を目撃し、それを否定する方法を失った瞬間、彼は狂気に陥るだろう。その様はきつと『あいつ』を大いに愉しませる。

「…ひとつ忠告しよう。小夜林は、まあまだ問題ない部類だが、いいかい？少年。全身真っ黒な男に出会ったら全力で逃げるべきだ。関わってはいけない。今君が小夜林を怪しんだ思考手順で持つてあいつらに挑む事は危険だ。小夜林は今は無害な可愛い仔山羊なのだからね」

江戸川少年の目が驚愕に見開かれた。

閑話 彼らが旅館でいあいあしている間に…

控え目な照明のみの地下駐車場にて、美しい金糸の髪を持った美女は歩みを止めた。

日本人とはかけ離れたすらりとして居ながらも、女性的な体つき彼女の足音に合わせてもう一つの規則的な足音が付いて回っていたからだ。

これが国外だったのなら、女の一人歩きに付きまとう足音、しかも薄暗い場所というだけで叫ばれたり、武道立ち技されたり、こぶしスダンガン判定を受けても仕方ないがこの日本ではその限りでもない。だから金髪の美女もただ振り向くだけに留めた。

そして自身の足音にぴったり合わせて張り付いて来ていた人物を真正面に捉えた。

「…あなたは、誰…？」

一瞬息を飲み、呆けた様な声での誰何がやっとだった。

彼女の背後に居たのは、彼女自身。

姿形、そっくりそのままの美女がにやり、と笑いながら立って居た。違いはカラーリング。

彼女の髪は美しい金色で、瞳は澄んだ青、肌はミルクの様に白。しかし背後を付かず離れず影の様に追っていた女は違った。

顔立ちも背格好も一緒な筈なのに、その髪は黒く、その瞳は黒く、その肌は死人の様な血色が失せた土気色に浅黒い。身にまとった服も黒く、全身が闇で塗りこめた様に黒い。

「誰？面白い事を聞くのね。見れば分かるでしょう？貴女自身よ」  
そうして発せられる声も、そのトーンも彼女自身。

『クリス・ヴィンヤード』？『シャロン・ヴィンヤード』？それとも『ベルモット』？何も変わらない。私は貴女自身」

ただ、くすくすと笑う顔は見る者を不快にさせる嘲笑で、その美貌を完全に損なっている。自分以外全て取るに足らないガラクタだと嘲る貌。

這い寄り聞くもの、見る者を不安にさせる闇その物の様な存在がそ

ここに居る。

「良くできた変装ね。私は私よ。他の誰でもない」

ベルモットの出した結論はそれだった「千の顔を持つ魔女」。そう称される彼女も他人に成りすますなんて容易い事だ。

目の前の『黒い自分』も誰かの悪趣味な変装なのだろう。問題は三つの呼称全てを関連付けて呼びかけて来るといふ事。

この女…いや性別すらも不確定なこいつは何者なのか…？

「冗談だ」

突然響いた声が、低い男性のものに変わる。

「いやいやいや、そう身構えるなよ。ちよつとからかっただけじゃないですかヤダー。あと銃は止めとけ。これ、親切心。うっかり中身を見たいのかあ？」

人格その物が切り替わる様に、声質もその口調も変転していく。余りにも異様なヒトガタ。

ベルモットは最大の虚栄を張って涼しい声を取り繕って尋ねる。

「…で？おふざけだったのなら、あなたは何なの？」

自分と同じ貌を持った人影が、こくりと首を傾げてくつくつと笑いを零す。心底愉しそうに口角を上げて笑う。

「いやね、ふっふふふ！ああ、思い出し笑いき。気にするな。ちよつと玩具：おつと失礼。知人の一人が先程、正に愉快痛快不愉快な誤解を招いたようですねえ!!あつははは！これは、逃す手は無いと思っただのサ！何なら誤解では無くしてやろうと思っただけだ。ああ、そうだ。『何者か』だったね。君と同じき『千の貌』とも呼ばれる。いろいろありすぎてなあ。この身体では無いがまあニア・ホーテプと名乗って居たりもする。まあ好きに呼べばいいさ」

くつくつ。

喉の奥で猫がする様に笑う自分自身、という姿に僅かに後退する。

本来の彼女が、自身のドツペルゲンガー程度に恐れ慄く様なやわな人物ではない。

これの衝動は純然たる恐怖。生きている以上避けられない、原始的な生物としての危機感が訴える反射の様なよろめき。

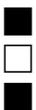
あの影の如き、世界の果ての如き黒い瞳を覗き続けてはいけない。  
その先に辿り着いて得られるものは崩壊だけだ。

「という訳さ。覚えて居たのなら今後ともヨロシク」  
「…!!」

ぐわり、と足を動かす事も無しに接近した真つ黒な人物はベルモツ  
トの額を爪まで真つ黒な指で一つツン、と軽く小突く。

その瞬間、彼女の意識はひび割れる様にして崩れ、一瞬の眩暈の後  
にクリアになる。

そこには既に人影が無かった。  
貌を持たぬ神の姿も無かった。



#### キャラクターシート

※無双にならない程度に神話生物で探索しよう。を念頭に身内卓  
で遊んだ際の実際のキャラシです。一見強そうですがもっと制限が  
盛られて居たので結構難易度高かったです※

※もう小夜林に関してはバレバレかなって事で提示します※

※それでも最後の足掻き敵に―と○で隠している心算です※

名前・黒井 小夜林 (くろい さより) 年齢・― 性別・― 職業・  
ヴィジュアル系バンドのボーカル

STR (筋力) : 44      DEX (俊敏) : 14      INT (知性) :  
14      アイデア : 70

CON (体力) : 17      APP (外見) : 12 (―)      POW (精  
神) : 18      幸 運 : 90

SIZE (体格) : 12 (44)      SAN : ―      EDU (教養) : 12  
知識 : 60

HP : 14 (30)      MP : ―      ダメージボーナス : 2d6  
特殊な技能

・踏みつけ40  
・――80  
・忍び歩き60  
・森の中に隠れる  
80

呪文

「――ブニ――スの招来」

「黒い仔山羊の招来」

「アザトースの呪詛」

黒井「黒いだけでコナン君に誤解されそうなので、最初に弁明しておきます」

## かまど旅館でいあいあ！・16

「…ひとつ忠告しよう。小夜林は、まあまだ問題ない部類だが、いいかい？少年。全身真っ黒な男に出会ったら全力で逃げるべきだ。関わってはいけない。今君が小夜林を怪しんだ思考手順で持つてあいつらに挑む事は危険だ。小夜林は今は無害な可愛い仔山羊なのだからね」

加賀知のその言葉に、思わず息が止まった様になる。

相對する事は危険であり、関わっていけない『全身真っ黒な男』、とは…まさか自身が追っている黒づくめの男達のことなどうか？

そうだとして、この人物は一体何を知っているのだろうか？

『今は』と引き合いに出された黒井小夜林とは何者なのだろうか？そんな疑念が一瞬のうちに脳裏を駆け巡る。

「あいつらの事何か知ってるのか!?小夜林さんって本当に何者なの!?!」

気付いた時には咄嗟に腕が伸びていた。

白いフリルに彩られた加賀知の袖を掴み、詰め寄っていた。当の突然小さな子供に詰め寄せられた筈の加賀知はその声のトーンの変化や切羽詰まった表情等は気にも止めずに、ただ少しか驚いた様な表情を作って見せる。

「私の忠告を聞いていたのかな？関わってはいけない。私も何も知らないんだ。むしろ知って居たのなら私はここには居ないだろうよ」

ふう…とどこか遠い目をして見せる。知らない、という割にはそれがどういった物だかを理解して居るからこそ、忌避して要る様な雰囲気を感じ取る。

だが、その表情の中に本気で警戒し関わりたくないという思考が確かに見えた。

「ほら。そんな事より今は目の前の事だ。そうだろう？いい加減ここで騒いで居ては気づかれてしまう」

…これは後で調べてみる必要があるだろう。

ここで問答しても曖昧な言葉ではぐらかすだけだろうと思い、加賀知の言う通り今は目の前にある事件を何とかすべきだろう。

胡乱な視線をもう一度加賀知に向け、背後の未だに事情聴取を進めている一団の様子を確認してから地下への階段へ踏み出した。

「…内側からはまた別の番号が必要、とかでないの良いのだが…」

コナンに続き扉の内側へ滑り込んだ加賀知の言葉にはつとし振り返るが、そつと閉められた扉の内側には外側の様な電子錠も見当たらない。

この加賀知という人間がまれに、妙に疑り深い様に感じる。その警戒心の出所に疑心が加速する。

「ずいぶん大きな焼却炉だ」

地下室の空間のご真ん中に、大きな焼却炉が据えられていた。近づき検分してみるに、焼却炉としてだけではなくボイラーとしても使用可能な様だ。

天井を這う配管と、この旅館の間取りを考えるに浴場のお湯もこれで沸かしているのだろうか。

扉は閉められているが今は何かを燃やしている様子はない。

焼却炉の目の前には座り心地の良さそうなソファが置かれている。試しに座ってみると、ちょうど、コナンの背丈では座高が足りていないのだが、成人男性ならばちょうど焼却炉に取り付けられたガラスから中が良く見える位置なのでは無いだろうか。

先程見つけたノートの記録といい、『こんな配置』のソファ…。この件の犯人は、犯行を楽しんで居るとしか思えない。

証拠としては、この焼却炉、こけしの中の人間の遺灰らしきもので十分だろうが問題は客室に等々に現れた黒焦げの遺体だろう。

それについてはなんの判断材料も見つかっていない。

今回の件とは全く別の事件で、あの連れらしき狂った様に笑い続ける男の仕業か…。

「おっと、これは遺品かな？」

うっかり思考に嵌りかけていたコナンが慌てて振り向くと加賀知がソファの背後に並べられていた棚の一つから腕時計を一つ摘ま

み上げている所だった。

はっと、指紋の心配をしたが、ご丁寧に加賀知は白い衣装に合わせた様な白手袋を嵌めていた。

「支配人…の物じゃないみたいだね…」

行儀は悪いかもしれないが、そそくさとソファの背もたれをよじ登り飛び越え、加賀知の検分していた棚の中身を覗き込むと支配人の年齢にはそぐわない履き潰されたようなスニーカーと電源の落ちたスマホが入って居る。

「ねえ加賀知さん、あの焼却炉の扉開けてくれない？」

遺品らしきものには焦げ跡はなく、焼却炉内にも何か残っていないかと気になって居たのだが鉄の扉は重そうな上取っ手は上部に付けられコナンの背丈では開けるのに苦勞しそうだったので、そう頼んで見た。

その瞬間の加賀知の顔は、もの凄かった。

まるで爬虫類の様にどこか冷え冷えとし飄々としうつすら笑みを浮かべている様な加賀知が「滅茶苦茶嫌です!!」という変に人間らしい顔をしてみせた。

「……………仕方ないか…」

たっぷりの間を置いた後にしゅしゅと言う様に焼却炉へ向かっていく。その際に摘まみ上げていた腕時計を元には戻さずになんか感概もなくコナンの小さな手の中に落としていった。

白い手袋をしたままの指がそつと伸び、取っ手に絡み付く。

シャガン。

妙に既視感を抱く音がなり重そうな扉が開かれるが、中は暗く、何も無い空間が広がって居た。

何をそんなに警戒して居たのか、加賀知がふう、と盛大に息を吐き出す音が聞こえた。

「…加賀知さんあぶない！」

何も無い事に安堵したのか暗い内側をよりよく見ようとした加賀知が焼却炉内へ僅かに体を傾げた瞬間に、

ガシャン！

と今度こそ、どこかで聞いた様な音が鳴り自動で持ち上がる筈のな  
い扉が加賀知の首を挟もうとするように閉まった。

そうして何の操作もしないにも関わらず、ボツ、と点火され、み  
るみるうちに内側を炎の色に塗り固めて行く。

それを間一髪でコナンが精いっぱい力の力で後方へ服の裾を引き回  
避させていた。

渡された腕時計は咄嗟に投げ飛ばされ地下室の床を滑り入り口付  
近へ転がっていく。

「いやあ…驚いた。例を言うよ」

尻もちをついた状態で、燃え盛る焼却炉の炎を眺める。

「そこで何して居るんだ!？」

突然の出来事に、何が要因かと探る様に焼却炉を観察していた二人  
の耳に支配人の慌てた叫び声が響き、背後から二対の足音が響く。

「コナンくん!? また勝手にこんな所に」

「蘭ねえちゃん! 上に居る警察を呼んで来て! 早く!」

突然地下へ駆け込んで来た体の支配人を追って来たらしい蘭が全  
てを言い切る前に、割って入る。支配人に見つかってしまったこの状  
況で、彼がどんな行動を取るか分からない。

何せ、人間が焼ける所を優雅にソファアに座して眺める様な人間  
だ。

「絹江さん…?」

状況は呑み込めないままにも、コナンの切羽詰まった様な鋭い声に  
経験から何かを察した蘭が慌てて上階へ戻ろうと踵を返した所で、立  
ち止まってしまう。

そこには、蘭より一足遅れて地下へ降りてきていた絹江がいた。

ただその様子は異様で、まるで幽鬼のようにふらふらとした歩みな  
がらもその瞳には狂気じみた威圧感が宿り、向かい合った蘭の足を止  
めさせた。

ふらふらとした足取りでゆっくりと進む絹江は、先程コナンが放り  
投げてしまった腕時計を振るえる手で拾い上げる。

完全に据わった目で、それを確認した次の瞬間、

「これ、正平に：私がプレゼントした、なんで、なんでこんなところに：正平は!?! 正平はどこなの!?! どこに居るのよおおおおおおおとおお!?!」

常に不安げにしていた彼女からは想像も出来ない程の絶叫。悲鳴の様な叫びをあげて支配人に掴み掛かる。

がんっ!と大きな音をたてて、不意打ちで掴み掛かられた支配人はその勢いのままに熱され始めた焼却炉に背中を打ち付ける。

「あんた正平は来ていないっていったじゃない!?! なのになんで正平の持ち物があるのよ!?!」

「き、絹江さん落ち着いて…!」

火事場の馬鹿力とでも言うのか、女性の細腕が成人男性の首を締め上げながら揺する。狂乱する絹江を落ち着かせようと蘭が駆け寄るが、弟への依存具合を垣間見ていたコナンからしたら、あの状態の絹江を落ち着かせるのは酷く難しい様に思えた。

これは、自分が上へ行って人を呼びに行った方が早いだろうと、駆け出した所で、すつと割り込む黒い影が有った。

まるで、道を塞ぐように蹄のブーツを履いた真っ黒な衣装の少女が立ちふさがる。

「黒井さん！そこを退いて!」

「ここを開けては駄目ですよ。こけしが来て居ます」

地下室の惨状など我関せず、興味なし、といった表情の黒井はふるると首を振る。

「こけし!?!」

その意味の分からない言葉に、表情一つ変えずに見返す、黒井の真っ黒な瞳にぞわり、と寒気を感じる。

「小夜林！焼却炉だ。客室と同じ球霊の印があった。この混乱だ、穏便にとは行くまいから、全て踏みつぶしてしまってくれ。事後処理は私がどうかしよう」

更に意味の分からない言葉に、大きな声を上げた加賀知を振り返るが直ぐに前方黒井の動く気配へ再び視線を前に戻す。

「何をやる気だ!?!」

はあ、と面倒くさい、とでも、呆れたとでもいう様な息を吐いて黒井が小首を傾げる。

「お気になさらず。ただ、そうです。君が今後も自分自身でありたい、四足で這いずりよだれをまき散らすだけの狂った生き物に成りたくないのなら、目を閉じて置くことをお勧めしますよ」

その言葉が終わった瞬間、コナンの視界は黒くがさついた、まるで巨木の様な質感のものに占領された。

## かまど旅館でいあいあ！17

全ては茶番である。

目の前の光景に、小夜林は辟易とした表情：いや、実際には表情は何の変化も示さず黒い空虚な瞳で目の前の茶番を眺めて居た。

茶番という以外になんと言えれば良いのだろうか？

一応は現場検証という名目上、やって来た警察官もこの旅館に居た人々も真面目腐り、緊張した重々しい表情で事を進めているが、その実、支配人の男以外は皆人己の支配血清で操られているだけだ。

真実としては術者が邪神召喚を試みた儀式の地にて、降霊術を行つた一般人が焼け死んだ：というよりも炭化した、という物だが、無能の名を欲し儘にする警察官にそんな真実は通用しない。

ヨグIIソトースは人間に邪神と呼ばれる分類の中ではまだ温情のあるものだ。望む知識を与えてくれる。ただその得た知識に人間の精神は付いて行かないだけだ。霧の様なヨグIIソトースの身体に触れたとしても炭化、等という人間でも観測できる変化しか起こさない。

非常に有情である。

だが、警察にはそんな事象さえも受け入れて貰えない。だから、それとなく超常的な物の存在を隠匿するように制限を掛けられている。

ただ、支配血清の効果の出なかった江戸川コナンという少年だけが、邪魔をしない様に人己が気を引いて居るのだが…。

小夜林としては、どんなに無能共が現場検証をしようが、辿り着く結論は既に用意されたものでしかないのだから、仕方がない。

早く終われとばかりにぞろぞろと無意味な事をして回る人間の後を些か遅れてついていく彼女の耳に、何か、複数の物が倒れる音が届いた。

丁度、二回の休憩スペースになって居る所から件の三階へ向かう為の隊列を築いて居る最中であつた。

見れば、こけしが十数個、ころり、と転がっている。

「…なんでこけし」

思わずの様に呟いた小夜林の言葉に、警察官を先導する様に先を進んでいた支配人が勢いよく振り返り、自身に追従していた人数を視線で数えた後に慌てた様に駆け出す。

案内されていた警察官は勿論、奥方や毛利探偵、の驚いた様な声も無視して階段を駆け下りて行く。そのすぐ後を探偵の娘がコナンが居ない事に気づいた様に駆け出す。

ある程度、行動や思考を操れようが大事な者や自身の生命に関わる行動は命令が聞きづらくなるらしい。今回に関しては超常的な物を伏せる事、となつて居ただけなのだから、致し方ないだろう…。

「あ、わ、私…蘭さんとコナン君探してきます…」

自身の弟が行方不明であり、常に絹江を気遣っていた蘭の慌てた様子に何か思う所があったのだろう。警官の制止を聞く前に駆けだして居た。

「僕が皆を呼戻して来るのでどうぞお構いなく。皆さん先に行つていてください」

幸いな事に、諸事情により身元を詳しく調べられては困る小夜林に対して注意がされる様に、人己が配慮してくれていたらしく特に訝しかられる事も無く集団から離脱した。

その結果がこれである。

地下階でありながら、それなりに高さの有った筈の天井を枯れ木の様な黒い大きな影が突き破り、歪な歯が並んだ口から異音としか言えない鳴き声を発し、蹄の足を踏み鳴らす。

激しく掴みあつていた筈の絹江も支配人もその動きを止め、枯れ枝の様に広がりうねる触手を見上げあんぐりと口を半開きにし呆然とする。

「馬鹿な、こんな馬鹿な事、こんな…」

今までその手で幾人も人間を焼き殺して来た男は化け物としか表現のしようのない影に「ありえない」と譫言の様に繰り返す。

確定的な弟の死の証拠を突き付けられ、既に狂気の縁にいた絹江は



絹江は噴出した炎にまかれ、髪や皮膚が焦げ付く臭いをさせながら「正平……正平……」と弟の名前を呼びながら動こうとせずに笑い続けている。

「さて……では、私は後始末をしようか。火は、苦手だしねえ」

人巳は、焼けかけて居る人間も未だに木霊する複数人の悲鳴も、小夜林だったモノも、小さな子供を守る少年も無視して支配人の背後に歩み寄る。

「取り合えず、この件は全てあなたのせいという事で」

白い手袋の嵌められた手には、針が装着済みの注射器が握られていた。

## かまど旅館でいあいあ！終と次回のプロローグ

コナンが目覚めると、かまど旅館が燃え上がっていた。慌てて周囲を見渡せば、救急車に消防車、パトカー等が複数あり、自身は救急隊員と話をする蘭の膝の上に抱き上げられていた。

もつと良く辺りを見回そうとすると、後頭部に鈍い痛みが走る。それと同時に、これまでの経緯が駆け巡る。

宮口絹江の依頼により、その弟を探してかまど旅館へやって来た。そこで、目星い証言は得られなかったが、同じように何かを探りに来た加賀知と、旅館を探索した結果に見つけたもの。

それは支配人が人を焼き殺していた記録。

そして忍び込んだ地下階で見つけた稼働中の焼却炉、その中にコナンたちと同じ日に宿泊予定だった二人組の一人が正に燃えていた。

これは証拠などと言って居られないと、通報するも、警察が到着する以前に支配人の此方の動きが見つかり、乱闘に発展した。

弟の遺留品を見つけてしまった絹江は支配人へ掴み掛かる勢いで、すっかり開き直ったた支配人は焼却炉を暴走させ証拠も、遺留品も、旅館ごと燃やそうとした。

ここでふと、違和感を覚えるが、一体何なのかが思い出せない。もやもやと脳と頭蓋の隙間に水銀でも流された様に頭が重い…。

暴発する焼却炉、ヤクザと結託し邪魔者の処分をしていた、人間を焼くのが趣味だと高笑う支配人、建築法に違反し、スプリンクラーのない旅館、黒い影、あつと言う間に燃え広がる炎、弟の名を呼ぶ絹江の声、黒い蹄…。

反芻される光景を、異物とノイズが乱す。

到着した警官に、笑いながら全てを話す支配人…どこか、焦点の合わない目で。

再び、違和感を覚える。確かに、加賀知と旅館内を調べて回った様な気がするのに記憶にある映像に加賀知や黒井の姿がほとんど思い出せない。

「コナン君、大丈夫…？」

膝の上に抱えたコナンが、額を抑え眉を顰めるのを不安そうに蘭は見つめる。

「ちよつと…あ、ううん！大丈夫！」

心配させまいと、元気に声を上げる。それと同時に、調子が悪いなごと思われてこのまま救急車で運ばれても堪らない。

「そういうえば、加賀知さんと黒井さんは？」

記憶の映像に無い二人を探すと、少し離れた場所で二人がぼつりと居るのを見つけて、蘭の腕を掻い潜り駆け寄っていく。

視覚的な記憶はない癖に、しっかりと覚えて居る加賀知の言葉、

『…ひとつ忠告しよう。小夜林は、まあまだ問題ない部類だが、いいかい？少年。全身真っ黒な男に出会ったら全力で逃げるべきだ。関わってはいけない。今君が小夜林を怪しんだ思考手順で持つてあいつらに挑む事は危険だ。小夜林は今は無害な可愛い仔山羊なのだからね』

◇

「人己。僕は『コレ』をアザ…ええと、お、おじい様？経由で返しに行つてきます。僕はただ仕え、奉仕するものだけど流石に他所へ行く『モノ』を横取りは不味いと思いますから」

『コレ』といい、フリルとリボンで彩られた身体、腹部の辺りを撫でる。何かの呼称を呼ぼうとし、目の前の人己に気を使った様にぼかした呼び方を使いながらも、それで正しいのかと思案する様に目を逸らす。

「ああ、そうか。召喚は成されなかったとはいええ、あれらは神に奉げられた供物か。そのまま小夜林が持つのは不味いんだね」

その辺の事情は人己には分からないが、奉仕種族という奴も大変なのだろう。

こけしごとヨグⅡソトースへの贅を呑み込んでしまったものだから、その贅を返しに行く必要があるのだろう。

「僕は今回の件を上の方たちに伝えて、後はその方々で死人の処理はどうとでも、うわあ!？」

この旅館を訪れた時と全く同じように、小夜林に江戸川少年が後ろからぶつかる。

「黒井お姉さん！二人とも大丈夫だった!？」

小さな子供が小夜林の腰にしがみ付く様にしながら、心配気に見上げる。

人巳が僅かに面白く無さそうな顔をした。

「…僕はお姉さんではありません。はい。問題ありません。君は人巳のお手伝いをしてくれた様ですね。ありがとうございます」

うん！と子供らしく笑うが、15、6にしては些か幼過ぎないだろうか？と思いつつも小夜林は頭を撫でる。子供にはこうするものだと、『育った家』で学習していた。

「ああ、本当に助かったよ。ところで君のお姉さんが心配そうに見て居るよ?」

やはりどこか面白く無さそうな声音の人巳が、ちよつとばかり強引にコナンを引きはがし、こちらを心配そうに見つめる毛利蘭へ向けて押し出す。

子供への嫉妬なのか、ミートシールドお疲れ様、とでも言いそうな雰囲気である。

そんな想い人の行動に、小夜林は顔面の筋肉の動きだけで微笑んでみせる。ぎこちない演技の様な笑みだが、その声音は本当に嬉し気はどこかくすぐつたそうにする。

「人巳は時々子供の様に焼きもちを焼きますね。でも、僕は、それがちよつとくすぐつたくて嬉しいです。なので、僕だけ別行動に成ってしまうのは残念ですが、このまま」

そこまで言った所で、何も変更されていない着信音が小夜林のフリル過多の服のどこから鳴り響く。ごそごそとスマートフォンを抜き出して画面を確認してから通話を開始はせずに人巳の顔を見上げる。

「……すいません。すこし外しますね」

◇

加賀知に押し出されるままに蘭の元へ向かいつつも、直ぐに「おじさんの所にいってくるー!」と誤魔化し人の輪から外れたコナンは、

先程黒井に付けた盗聴器が拾う音を確認した瞬間聞こえたのは着信音だった。

着信音と共に、あの蹄のブーツが立てる足音がして直ぐに止まり、黒井の声が聞こえる。

―もしもし。…：はい。僕です。

―いえ。特に用件も仕事も入ってはいません。

―お母さま、ですか…。はい。分かりました。では僕はこのままそちらに向かいます。

相手方の声は一切聞こえないが、黒井の母親についての話だったようだ。

通話が終わると直ぐに、また別の通話が始まる。

―もしもし人巳ですか。僕です。申し訳ありませんが、お母さまがいらつしやる様ですので僕はお迎えする準備の為にこのまま帰る事に成ってしまいました。

どうやら、加賀知へ連絡をしたらしく二人はこのまま離れて別行動になるらしい。

まあ、本命はなにやら今回の事件や、「今は無害になった」と言われる真つ黒な出で立ちの黒井なのだから、問題は無いだろう…。

―ああ、違いますよ。都内にある家です。…：そうです。その事です。はい。では、道中お気をつけて。

会話的に母親はが上京でもするのだろうか？その報告だけであり先程漏れ聞いた『上の者への連絡』とはなんなのか何の情報も無いまままだ。

なんの情報も無いままに、通話は終わってしまう。

例の黒づくめの奴らとは関係なかったとしても、今回のヤクザと繋がりがあった事件を調べに来たと言っていた二人にその顛末を誰かに伝えると言う黒井は何やら良からぬ動きをしているのかも知れないと警戒し、彼女の方に盗聴器を仕掛けたのだが…。

コツコツ、と数時間の間に聞きなれたあの蹄のブーツが鳴らす足音が暫く続いたかと思うと、突然音が消える。ノイズなども入り込まずに、無音。

無音が聞こえる。

目の前に闇が広がる様な感覚、の次の瞬間に音が溢れる。フルートに近い、笛の音色。神経を焦がす様なリズムを刻む太鼓の音。恐怖に音をつけた様な音が曲の様に重なりながらも、ただの不協和音の様に捻子くれながら脳髄を侵すように響き、反射の様に装着したイヤホンを叩き落とし、飛び退り、肩で息をする。

その一連の動作を行った後に、何故、自分がこれほどまでに怯えたのかが理解できずにコナンは呆然としてしまう。

直ぐにはつと我に返った様にし、イヤホンを拾い上げるが最早何の音もしなかった。先程の様な無音が広がって居るわけではなく、本当に機械の壊れた様なざらついた音だけがしていた。

◇

かばかぽと、蹄のままの音を立てて小走りに去っていく小柄な姿の小夜林の後ろ姿を微笑ましく眺めながら、先程からマナーモードの為、ひたすらに振動で訴えてきていたスマホを引っ張りだす。

非通知と表示されていた。

「はい。加賀知です」

どこか笑い含みの反応で人巳は応対する。

電話の向こうからは僅かに棘の有る、底冷えのする様な声が届く。

「残念だがね、以前にも言った通り、契約は満了だ。私はあそこでやることやりつくした。もう、用はないんだ」

数語、通信機器の向こうから怒気を込められた言葉が届くのに、人巳は本格的に笑いだす。

「それは脅しの心算かい？いいさ、やって見ればいい。君たちは私をバケモノと呼んだ。見た筈だ、認識を攪乱し人心を惑わすのを。それに…我らが偉大な父は慈愛に満ちているが、大変執念深い。裏切者も、加護を与えた身内を傷つける事も許しはしない、必ず報復をもたらす」

通話の先の相手は言葉を失った様に反応が途切れる。

「……分かってくれて嬉しいよ。そじゃあ、また、私が欲する設備と資

材、資金を用意できたらいつでも連絡しておくれよ」

誰も見ていない場で、人巳はにっこりと笑う。

「さようなら、ジン」

別れを最後まで聞かずに、通話は切られていた。

「おやおやこれは酷い」

ちつとも残念ではなさそうな顔をしながら、人巳はそんな事を呟いて最早興味はないとばかりにスマホを戻し帰途に付く。電話をする為に人の輪から離れて行ったのだが、そのまま姿をくらまそうとする人巳を止める者はだれもいなかった。

◇

『 (むめいさいきしよ) 』

四人組の日本のバンドグループ。

ページの上部に何処かのステージの上に、四人の人間が居り、旅館で出会ったままの姿の黒井と、加賀知。

ドラムセットの前に座った司祭の様な服装の上からぼろぼろに薄汚れた黄色いローブを纏った、体形から察するに女性で有る事しか分からない人物。椅子に座したままにギターを抱える、足の無い包帯塗れで人相の分からない男性。

そんな中々にインパクトのあるメンバーの写真が貼られている。

実際に文字で書くと「無名祭祀書」、という発音に成るらしい。…本当にバンドを組んで居たのか…という気分になる。

件のかまど旅館の事件から数日、コナンは未だに黒井と加賀知、ひいては加賀知の言っていた『全身真っ黒な男』について気にかかり己の出来る範囲でいろいろと調べ漁っていた。

まず気になった、黒井と加賀知の身元。思い返してみればあの事件の時自分は一切、警察の事情聴取に立ち会えなかった事に思い至る。

毎度毎度、つまみ出されながらも何だかんだと潜りこんで来たコナンだが今回に冠しては、一切関わる事は出来なかった。まるで、誰かの意思でもって遠ざけられた様な程にだった。

そのせいで、あの二人の名前は知っていても、年齢も分からないままだった。

バンド活動をやって居る、とは言っていたが、そのグループ名も聞いていない。

本当にあの二人が所属するグループが有るのか…？と疑問を抱き、先ずは、とそこの所を現代っ子らしくネットで検索をかける。

さて、どういったキーワードを…と考えながらも文字が打ち込まれていく。

『バンド 黒井小夜林 黒山羊』

「やぎ…？」

自分で打ち込んだ文字に疑問を抱く。

本名のまま活動しているとは限らないが、手掛かりとしては入力する。だが何故、山羊、などと入力したのだろうか？確かに蹄のブーツに真つ黒な衣装を纏って居たが…。

どうも、ここ数日思考が自分のものでは無く成ったような気分がある…。

「疲れてんのか…」

むしろこんな幼児化し、幼馴染の家に頃が見込み、行く先々で事件に巻き込まれている状況で発狂しない方が稀なのかしれないと思ってしまう。

小さくなつてからのこれまでも思いだし、些か遠い目になっていたコナンだが、改めて検索結果の画面を見て選択したキーワードは正しかったようだ。

検索結果の上部分に数枚の画像が並ぶが、その中には間違いなく黒井の写真が提示されている。

少し下へスクロールする事で、有名な解説サイトが一番上に出て来る。

グループ名は『

』と無名状態になっており、その何も入

力されていない状態を「むめいさいきしよ」と読ませるらしい。

：二人の衣装で半ば予測がついて居たが、所謂そういうジャンルらしい。

あんまりにも当然の様に、なんの偽りもなく存在した二人に、些か面食らった様な気がした。

が、気を取り直してそのページにぎっと目を通していく。

悪魔や邪神崇拜、魔女のサバトをモチーフにした楽曲を作成しコアなファンがそれなりに居る、という事が把握出来たが：メンバーそれぞれの個人的な情報はほぼ記載されては居なかった。

このご時世、少しでも知名度があれば出身地や生年月日、経歴などがまとめられしまうものなのだが、このメンバーには伏せられている点が多すぎる。

実際、『工藤新一』で検索するとこの解説ページが作成されていたりするのだ。

過去に解決した事件も列挙されているのだが、ある一定の日付から更新されなくなったそれを見ると、複雑な気分になる。

ふう、とコナンは幼子らしからぬ溜息をつき、余り収穫の得られなかった画面を閉じる。

ぱつと検索サイトのホーム画面へ移り、トップ画面には様々な情報が詰め込まれている。芸能ニュース、天気予報、などなど…。

『東都児童失踪事件 手掛かり皆無』

『女優■■■、一般男性と婚姻からのスピード破局』

『明日日本海側では大荒れの予想』

ぱつと見た中で気になる文面を見つける。

『悪魔と契約の対価か？旅館支配人、取り調べ中に変死』

反射の様にそのニュースを開く。

そこには人が焼ける様を愉しんでいた、悪魔の様な所業を成した男が起こした事件と、その男の末路が綴られている。

亀山俊樹は、逮捕後から体調不良を訴えており取り調べも病室で行っていたようだがその最中、つい昨日、警官たちの前で変死を遂げた。

首元、頸動脈が崩壊し夥しい内出血による即死。

原因は不明。

未知の病気、あるいは薬物の使用が疑われる…などという事が書かれ、因果応報、自業自得、悪魔の様な所業が招いた結果、等と締めくくられていた…。

黒き地母神に奉げるいあいあ！・1

「御子さま、御子さま、お帰りなさい。おかあさんの御子さま。私達のお兄様、お姉様」

黒井小夜林は、都内某所の養護施設に『帰って』来た。

その養護施設は都心部から少し離れた場所にあり広大な敷地を持つ。しかしその敷地内の殆どは、鬱蒼とした林であり家屋はそこまで広さもない。

部屋数はそれほど無いにも関わらず、小夜林を出迎える子供たちが異様に多く、皆そろいもそろって幼い。

出向かえる大人の姿は見えない。

「ただいま戻りました」

淡々と告げ、手近に居た子供の頭を撫でる。

「御子さま、御子さま、もうすぐです。もうすぐおかあさんに会えます」

「もうすぐです」

「七日後ですよ！おかあさんが、七日後に会いに来てくれますよ！」

「みんなで、おかあーしゃのところに、かえりえるね」

きやつきやつと嬉し気な声を上げる筈なのに、子供たちのその目に生気は無く、良く見れば怪我をしている子供が多い。

怪我、というには余りにも生々しい裂傷や打撲痕、異様に痩せた子供など。

本来なら、小さな子のそんな有様に普通の完成ならば眉を寄せ、その不憫さに目を背け、なんなら涙を流し、こんな状況を作った者に憤りを覚えるかもしれないが、小夜林は人の理解の外の生き物だ。

そういうものだ、としか認識できない。

「小夜林さん、お帰りなさい」

幼い子供が多い中に、一人だけ、辛うじて二十歳間近の女性が声を掛ける。

「ただいま戻りました。珪。七日後、なのですか」

瑠、と呼ばれた女性は古傷がおおく残る顔を綻ばせて頷く。足が悪いのか、直立するだけでも横へ傾いてしまいが杖等について居る様子もない。

「はい。七日後です。いよいよ、おかあさんに会えます。それまでに、もつともつと寂しい子供達を集めましょう。皆でおかあさんを迎えますしよう。小夜林さん、あなたが儀式の要です。よろしくお願いしますね」

分りました、とだけ小夜林は頷いた。

周囲の子供たちは、尚も嬉しそうにはしゃいだ声をあげていた。

◇

現在、灰原哀と名乗る少女は夕暮れの小学校を一人後にする。普段は、なんやかやと登下校を秘密の共有者である江戸川コナンや少年探偵団の面々で行うのだが、今日は様々な要因が重なり一人での下校だった。

ほんの少し前、組織から逃げ出したばかりの頃は、いくら姿が変わっていたとしても表に出る事に恐怖していた。

それが今は呑気にランドセルなどを背負い、夕暮れの道を一人で歩んでいる。

彼のおかげなのだろう、と心中でのみ小さく微笑む。

「灰原哀、ちゃん…?」

知らない声に、呼び止められる。

振り返り見上げた顔はやはり知らない顔だ。痩せて、髪も肌も手入れのされていないぼろぼろで着た物も身動きする度に嫌な臭いがする程に薄汚れている。

そんな有様の中年女性。

「……」

名を呼ばれても、見ず知らずの見るからに怪しい風体の人物に返事をして、肯定を示したやる義理もない。

灰原はポケットの中に手を入れ、110を押し、直ぐにでも発信で

きる様に身構える。

「お父さんや、お母さんは居るの？」

唐突にそんな事を聞いてくる。

もちろん、『灰原哀』に両親は居ない。実在しない子供だ。

…宮野志保にも、もう両親も、姉も居ないが。

「寂しい思いはして居ない？ご飯はちゃんと食べてる、おかあさんに会いたくなる日はない？」

頬のこけた、まるで疫病神の様な女が矢継ぎ早に問いかけてくる。

「可哀想に、可哀想に…こんな小さい子が…」

にじり寄る様に歩み寄る女に合わせて、後退する。

緋色の夕日の光がどこか淀んだ双眸に不吉な色が差し込んで、不気味さがますます。

「おばちゃんとおいで、大丈夫、何も寂しい事がなくなるのよ、おばちゃんと一緒におかあさんに会いに行こう？おかあさんは全てを受け入れて愛してくれるわ」

なにも無い空間をまさぐる様に伸ばした女の両手が灰原の手を握ろうとするのを、ぎっぴりと振り払う。

「何かの宗教勧誘かしら？…そういうのに興味はないから」

それだけを言い捨てて、灰原哀、という年の割に酷く大人びて、どこか冷えた印象の『児童』は早足にその場を後にした。



江戸川コナンは二度目の小学生生活の中では珍しく、一人で下校していた。

気になって居た新人作家の推理小説の発売日だったので、いつもの少年探偵団の下校の誘いも断り放課後本屋に直行して居た。

しかし問題が一つ。

この小学生の身体、あまり重い物が持てないのだ。

ハードカバーの分厚い推理小説。気になる物を全て買って帰るには、子供の細腕には重労働過ぎるのだ。その為、脳内議決を行い、熟

考を重ね、持ち帰れるぎりぎりを選びに選び抜いた。

熟考するあまり、帰路に就く頃にはすっかり夕暮れになって居た。重い書籍を抱えやつのことで、居候先の毛利探偵事務所に戻ると、事務所の前、正確に言えば下階の喫茶ポアロの真ん前である。そこに業務妨害レベルで、来店者の邪魔に成りそうな立ち位置居り、上階の探偵事務所を見上げている人物が居た。

「おねーさん、探偵事務所に用事なの？」

思わずそう、声を掛けていた。

酷くやつれた、生気のない女だった。

年のころは20代後半位か、着る物もくたびれており、どこか追い詰められたような顔をしていたため、思わず声を掛けていた。

「ひっ…」

声を掛けられた女は、小さな子供に何故それ程まで、という程に怯えた声を上げる。

「…どうしたの？」

「ええ、ええ。なんでもないわ、大丈夫、大丈夫よ。…ああ、僕、この子なの？」

「う、うん…上の探偵事務所にお世話になってるんだ…」

そう、と言いながら女は未だに怯えた、挙動不審の儘にしながらも肩にかけてたトートバッグから何らかの紙束を引き出しぱらぱらと捲る。

直ぐに顔を上げ、コナンの顔を覗き込む。

「江戸川コナン君？」

こくり、と頷くだけ頷く。

何とは無くに視界に入ったトートバックには木と花で編まれた揺りかごを絵本のようなタッチで描いたロゴに『黒のゆりかご』と文字が入って居た。企業、法人、何かは分からないが組織間で作られたものなのだろう。

「…ずっと探偵さんの所に預けられてるの？」

まあ、世間的にはそういう事になるだろう、と些か気まずい気分になりながら肯定する。

「お母さんは迎えに来ないの？寂しくないの？酷いと思わないの？辛くないの？」

怯え、おどおどとしていた女が、震える声の儘に矢継ぎ早に言葉を吐き出しながらずいずいと迫って来る。その異様な様子に気おされ、半歩引いた所で、

「あの、うちの子に何か御用ですか？」

学校の帰りにそのまま買い物を買って来たのか、食品の詰まった袋を下げた蘭が些か不審そうな顔でコナンの背後に立って居た。

目の前の女のあからさまな挙動不審っぷりに、無意識にコナンの手を握って居た。

「……毛利探偵の娘さん…、高校生…確か、離婚された…妃弁護士の……」

「お父さんとお母さんは別居中なだけです！」

思わずの様に、反射で反論した蘭の声に女は数拍止まった後に、そそくさと何も言わずに人込みに消えて行った。

「…なあに、今の人…」

「さあ…？」

コナンとしてもそれしか言いようが無かったが、取り合えず、怪しい人間で有る事は理解出来た。

## 閑話 彼らが母を求めている間に…

ある中規模な製薬会社が所持する一つの研究所のエントランスで、ふんわりとした癖っ毛に同じくふんわりとしたフェミニンな白のワンピース姿の女が、びーびーと鳴り響く、来客用と表示されたゲートにあわあわと左右を見回していた。

「あ、あれ？あれれ？すいま、すいません!?あれ？何でかな!？」

あわあわと慌てる彼女の豊満な胸がそれに合わせて揺れる。エントランスを通過する社員らしき男性達はその様子にごくりと唾をのみ、哀れなまでに慌てふためく彼女を先程そちらのゲートへ案内した受付嬢も思わず見つめてしまう。

まさに、(おっぱい) S I Z I 8。

「申し訳ございません。こちらの施設は弊社の製品開発の場と成っておりますので、社外秘のデータが多数保管されて居る為通信機器や撮影機材の持ち込みは一切禁止されております。お客様を疑う様で失礼かとは思いますが、機械類は全て此方でお預かりいたします」

「あ、あ、そうなんです。すいません。アポを下さった方は何も伝えて下さらなくて、うう、すいませんっ」

最早涙目である。

「それは申し訳ございません…。では改めて、スマートフォンやPCなど有りましたら此方へお預けください。腕時計や装身具に関しましてはゲートを通過されてからのお返しと成ります」

「は、はい！すいませんー!」

やはり胸を揺らしながら、ふわっとした女性は小さなバッグを丸ごとと受付嬢に渡し、再びゲートを潜ろうとするが…びーびーとまた警報が。

「あ、あれ!?何でだろう!?あ、これのせいですかね!」

首に掛け…というよりも最早胸の上に乗っている状態のドッグタグを摘まみ、外すが受付嬢は困った顔をする。

「そこまで小さく薄い物には反応しない筈なのですが…」

その言葉の通りに、やはり金属探知機は再び鳴った。

◆ ある中規模な製薬会社は、とある『組織』のフロント企業として機能して居た。

勿論、その会社に勤める殆どの人間はそんな事知る由もなくごくごく真つ当に仕事をこなしている。隠れ蓑として機能して居るのだから、それも当然の事だ。

ごく普通の企業として存在しているが、経営部は完全に『組織』のものであり会社の利益よりも『組織』にとつて有益な方針を選んでいく。

ある程度纏った金の動き、研究機材や研究資材の大量購入にあたり、こういった企業が有ると何かと便利なのだ。そして今回の様に、秘密の取引の場においても、有用性を発揮する。

社内に『組織』の者が普通に働いており、その人物の名でアポイントを取り安全な対談の場を得る。

今回もその類だったのだが：来るはずの人物がなかなか訪れず、ごく一般的な会社の応接室に似つかわしくない黒ずくめの男二人、ジンとウオツカは徐々にイラつきを増していた。

「a fait longtemps! Monsieur!

約束の時間を過ぎてても、現れない待ち人に苛立ちを募らせていたウオツカは此方へ向かう足音と、扉を開く音に反応し相手を確認めずに文句の一つでも浴びせかけようと勢い込んで立ち上がったが、それ以上の勢いで持って約束をしていた女が飛び込んで来る。

怒気を露わにした大柄の男の気迫にも物怖じせず、親し気な挨拶の言葉を発し左右と交互に頬を合わせリップ音を鳴らす。

因みに大きな胸も、頬を合わせるの順じ押し付けられている。

そのあまりの勢いに怒気を込めてぶつける筈だった罵声はどこかへ飛んで行った。

「ジンもお久しぶりです！また会えて嬉しい！私、貴方達とお仕事させてもらえるのとても好きです。連絡を頂いてから楽しみで、」

「その前に言う事が有んだらうが！兄貴を何分待たせたとお思ってんだ

！」

まるで少女の様にはしやく女を、漸く勢いを取り戻したウオツカが一括する、と華やいでいた女の顔が一瞬して曇る。

「わ、あ……！そうでした！ご、ごめんない……！わ、わた私ったらうっかりエントランスで止められてしまつて……あのあの、ご迷惑をおかけしてしまつて」

「いいからとつとと座れ。誰のせいで時間が押してると思つてんだ？」

慌てふためき謝罪する女に最後まで言わせず、ジンが向かいのソファ、先程まではウオツカの座つて居た場所を顎でしゃくれば、ぴやつと、驚いた兎の様に着席する。

「あ、あの、お話の前にこれだけちよつと出させてください」

よいしょ、とおもむろに白いワンピースの胸元に手をつ込み、その谷間から小さな銀色の拳銃を取り出し目の前のローテーブルに乗せる。

「遅、遅れちやつたので、慌てて走つてきたので、その、汗を掻いちやつて……もし部品が錆びたりしたら、可哀想なので……」

ゆるい癖つ毛の髪を恥ずかし気に顔から払いながら女は赤面する。

この女は完全に組織の人間という訳ではない。むしろ、こんな妙なモノを抱え込みたくない。というのが強い。

名前はジル・フルを自称している。元軍人という自己申告で、現在『掃除屋』として必要になれば呼び出す、使いつ走りの様なものであり、裏切りの心配のない、使い勝手のいい道具だ。

さらに、この女は狂人だ。

伝手を辿つた先で、この自身を『愚か者』と名乗る女を見つけた際に、接触した奴はその柔らかな、虫も殺せ無さそうな柔らかくおどおどとした女に聞きたい「今まで何人殺した？」と問いに、

「私は誰一人殺していません。ただ、脳という素晴らしい装置を腐るだけの汚らしい肉体から救つてあげてるだけです」

そう微笑んだという。また、何処にでも銃を持ち込む為に、自ら左腕を切り落とし金属製の義手を着け……と噂されるがこのフルは『肉

体』を蔑視している。

機械を信奉していると言っても過言ではない。己の肉体さえ腐肉として厭うた可能性もある。

他にも、気味の悪い噂は多々聞く。フルルの近くで虫の羽音が常に聞こえるやら、喋る生首を抱えていたやら…。まったく馬鹿げた話である。

だがそんなもの、関係無いほどに使い勝手がいい。『掃除屋』というが、彼女は始末屋としての側面を持つ。なんの痕跡もなく、人間を消して見せる。

しかも報酬が、その標的たる人間で済む。

消えても問題のない人間を与えれば、それで満足している。組織の指示に従っていればフルルは望むモノが手に入る。離反する要素がない。

それに、今回の標的は『バケモノ』だ。

「…てえ訳だ。あいつの知識を外に持ち出される位なら、消しちまった方がいいだろ」

事のあらましなど話しても、この人間の脳みそを集める事にご執心の恋する乙女の如き狂人には関係のない話だろう。

単純な話。今回のターゲットはシェリーが放棄した研究を一時的に継続させていた『バケモノ』だ。

この狂人は、超常的『バケモノ』の姿を見てどう反応するのかと観察する様に見つめながら監視カメラの映像より抜き出した画像を投げて超越す。

そこには映って居るはずだ。

人間の様に二足歩行をし、人間と変わらない背丈を持つ鱗に覆われた蜥蜴の様な生物が。

「……蛇人間……?」

その画像をぼかん、として見つめていたフルルが、まるで糖蜜漬けの董でも口に含んだ幼女の様に、心底嬉し気に呟いた。

◇

ぱちり、と明りを灯した瞬間背中にぞわり、と嫌な感覚が駆け抜ける。

その感覚には覚えが有った。

もちろん、組織にも知られていない超個人的に借りている一室に、何者かの気配があるという事もだが、この感覚は違うと知って居る。知ってしまったっている。

いつか、何時だったか、暗い地下駐車場に這い寄った黒い影、黒い自分自身。

不可解な経験と本能的な恐怖心…。

ベルモットは反射の様に振り向いた。

振り向いたそこに居たのは、つい先ほどまで顔を合わせていた筈の、

「ジン…じゃないわよね？」

黒一色のその姿、ただしそれは銀色であった筈の髪まで闇色に塗り込められていた。

「来ちゃった」

まるで、語尾にハートマークでもつきそうなトーンで血色の悪い頬を自身の手で挟み込んで小首を傾げるようなぶりっ子ポーズ付である。

そんなもの、絶対に当人がやらない。もしやったのなら、正気を疑う。それか度重なる面倒ごとにととうとう気でも振れたかと憐みの目を向けて、暫くの休養を進める。

しかしその人をおちよくった様な言動、これは、確かに見たあの時の…。

「……ニアね？」

「ふはははー！正解!!よくまあ覚えて居たものだ!!POW対抗ロール成功、おめでとう！神話技能を2%程進呈してやってもいい！」

全く同じ声でありながら、全くもつての別物。

ここまでそっくりに似せておきながら、わざとその完成度を崩す態度。何がしたいのか、何を考えているのか分からない。

喋る内容さえも意味の分からない、トチ狂ったものである。正気を持たない者が持つ強大な力程恐ろしいものはない。

「何が目的なの…？」

自身の背後に現れ、現在は真正面に陣取るニア。つまるところ、彼女が通った入り口は現在ニアが塞いで居る。目的の分からない狂人のからの離脱方法を模索しながら訪ねる。

「いや？別に？ただ君がとつても頑張っているみたいだから、ちよつと手助けでもしてやろうかとね。俺は頑張って生きている人間がだああい好きなんだ」

にやにやと、厭らしい笑みで嗤う。

それはどう見ても『頑張る人間を手助けしたい』などと言うものではない。どちらかと言えば、人の破滅を望む悪魔にしか見えない。

「あなたはそんな親切な人には見えないけれど？」

口角が引きつきそうになるのを、嘲笑の形でもって誤魔化す。

「何を言ってるんだか！俺はとても親切だぜ？なにせ、俺は人間と対話してやってる！まあ、出来れば人間どもが狂気と混乱に陥って嘆きながら破滅していく様を見たいなって願望はあるかな」

胡散臭いウインクを飛ばして来る。それをジンの顔でやるは止めて欲しい。不気味過ぎて仕方ない。

だがやはり、ニアは悪魔の類の様で、ベルモットを唆しに来た様だ。

そこで、彼女は気づく。

ニアは決して狂人ではない。

闇の様な双眸は、確かに理知を灯している。叡智を持ちながら、どうなるかを理解して居ながら、全てが台無しになる道を敢えて選び、言葉の通りに全てを絶望に叩き落そうと画策して愉しそうににやにやと嗤う顔。

「ん？ああ、言つとくが、俺は本当に君の手助けをしてやる気だぜ？君が救われる事でより愉しい展開が待つて居る…ほら、なんだ。君の宝

物なんだろう? 『Silver Bullet』と『Angel』だったかな?」

びくり、と彼女の肩が震える。

ここに現れた時点でこのニアという人物が尋常ではない者だというのが察して居るが、一体コレは何処まで知って居るのだろうかと怖気を感じる。

何もかもを見通して居る様な…。

「おお? 興味を持ったようだなあ! よしよし、いいぞいいぞ。それじゃあ少しお話ししようか」

「…分かったわ。あなたの話を聞かせて。…でもその変装は止めてくれない? そんなテンションのジンは見えていて鳥肌がたつの。それが完璧にやりきって」

「ええ、黒いのは俺のポリシーなんだぞおう」

眉を顰めきやつとばかりに肩を竦める、黒髪のジんに鳥肌が立った。

◇

「よいしょー」

すたん、とわざとらしい音を立てて駅の構内から飛び出し着地したのは日本人離れした顔立ちの少女。

それもその筈で、日本人ではない。強い日差しに、直ぐに赤くなつてしまいそうな白い肌に雨上がりの空の様な清々しい青の瞳。幼げな顔立ちに、背格好でありおまけに胸部も残念な絶壁であるがその見た目よりも歳は上である。

もうすぐで春と言うにはまだ肌寒いが、些か季節外れなダッフルコートの黄色が殊更に幼い印象を与えている。キャラメル色のショートブーツもヒールが無く、幼い印象しか与えない。

子供じみた黄色のダッフルコートとキャラメル色のショートブーツの中間色である、高い位置で二つに結んだ髪がスキップする様に動

く彼女の動きで揺れ、子犬の尻尾の様だった。

「えつと…クロ…の実家…地図…でないヨ…」

ひよっこひよここと意気揚々とバスの時刻表を見に来た彼女だが、多量の数字と行先の羅列と己の持ったスマートフォン画面を交互に見て、眉をハの字に顰めて悲しそうな表情をする。

そうして周囲をきよろきよろとするが、まさに、外国人、と言った様な容姿の彼女に英語で話しかけられたらと、外国語アレルギーを拗らせた人々が視線を逸らし避けて行く。

そんな中、物怖じなく金色の髪を揺らす少女に近づくと影がある。

イケメンしか許されない、或いは極度のお洒落音痴が故の選択か、全身黒一色のコーディネートに銀色の長髪。すらつとした長身であり、こちらも日本人離れした外見である。冷徹な表情にこちらの方は、外見を差し引いても人が裂けて通るだろう。

が、先程からきよろきよろしている少女の知人かと言えば、違う様だ。

じつと、覗き込まれる様にした少女も、不思議そうにその男の顔を見返している。

「……………!!出たナー!この鬼!悪魔!鬼畜ゲドー!邪神!!えんがちよえんがちよ!!」

しばし、見知らぬ男に凝視され小首を傾げていた彼女は、その黒い真影の様な瞳を覗き込みはつとした様に飛び退り、イントネーションの妙な罵倒を浴びせかける。ついでに手刀をチョップよろしく振り回している。

「うん。まあ、邪神なんだけどね? いやー…やっぱり馬鹿って最強だね? アホって無敵だね? 流石脳味噌筋肉族だね? S A N値を全部溶かした狂人は出がらしの様で何の旨味も魅力もないね? なんてお前そんなに元気なの? 馬鹿なの? 死ぬの? 是非周囲に混乱と破滅を振りまいた上で死んでくれ」

少女は長身の男の形をしたモノに額ををぼすぼすと押さえられないが、理の内側に生きているものとしては分からない事を言われながら金茶の髪を揺らしながらパタパタと手を振る。

「なんだオマエ、いつも真っ黒なくせしテ今日は銀髪…くっそ！一瞬間違えるところだったですヨ！」

「ああ、これ？気にすんなよ。ちよつとリアリティに凝つて見ただけだ。……安心しろ？中身は皆大好きな俺だからなっ」

「うー！！滅せヨー！！」

ぶんぶんと腕を振り回すが、リーチが余りにも違い過ぎて当りはせず、大型犬に挑みかかる小さい子犬しか見えない状態を作り出していた。

「よーし。そこまで言うなら張り切つて今、ここで、人間体をばーんてしちゅぞ〜」

「やめテ！オマエ本当に嫌い!!あつちいけーもうヤダ嫌い!!」

きゃんきゃんと吠えるように抵抗する少女の様子ににやにやしなから、ぽすぽすと額を叩き続ける。

「うん。まあ、今回は君にちよつかいを掛けに来た訳ではないんだよねえ。君のお友達の『クロちゃん』？彼女がアブナイお姉さんに狙われてる感じがするからさあ、君に伝えに来てあげたんだよ。ほら、何だかんだ、君はいつぱい俺を愉しませてくれた訳だからねえ」

その言葉に、むすう…とする少女を置いて、長身の男は手をひらひらと振りながら去っていく。

もちろん、少女はその黒い影を追う事はしなかった。

そして、怪しげな男と言い合いをする彼女を見つめる、眼鏡の少年に気づいては居なかった。



彼女の意識は唐突に浮上した。

いや、そんな訳はない。彼女の意識が浮上することなんて、二度とない筈だった。

何故なら彼女の命は失われた。彼女の魂は既に消滅した。

その筈だった。

宮野明美は、確かに死んだはずだった。

だが現に、彼女の意識は浮上し、目を開き、飛び起きるに至った。彼女はしっかりと覚えて居た。小さな探偵へ残した今際の言葉と、握った小さな手を。自身の死の瞬間をしっかりと認識していた筈なのに、今こうして確りと自己を認識出来ている事に、理解が追い付かなくなり、無意味な瞬きを繰り返す。

おかしい話だが、自分が生きている、という事象に恐怖が込み上げてくる。

不安を紛らわせる為に、彷徨させた視線が自身は何も着ていない事に気づき、咄嗟に自身の身体を抱いてしゃがみ込む。

周囲に何か脅威は無いかと、全裸で目覚めた若く美しい女性にしては落ち着いた様子で、辺りも見渡す。

「ここは……どこ……？ 私……なんで……」

もったもな疑問を口に出す。

その言葉に反応する者は無く、辺りはしん……としていた。

その静まり返った場所は、どうやら礼拝堂の様な場所らしいが、教会にお決まりの十字架もキリスト像もない。代わりに大きなタペストリーが掲げられている。

そこには見たことの無い校章が画かれていた。

クエスチョンマークを三つ、放射状に連ねた様な形状の印。

記憶を探って見ても、全く見覚えの無い物であった。

良く見れば、彼女が横たわっていた足元には所謂魔法陣の様な物が描かれており、何か、白い粉が少量零れ落ちていた。

何やら、嫌な予感がした。

予感、或いは、この礼拝堂を埋める不穏な気配。逃げ出すにも、全裸では心もとないともう一度周囲を見渡す。

礼拝堂内は薄暗く、1Mも離れてしまえば物の形は分かり辛くなってしまう。

それでも、礼拝堂内に設えられたベンチの一つにかけられた黄色いローブを見つけた事は出来た。何も無いよりはマシだと思いをそれを拝借し、身にまとう。

一体ここは何処で、何が起きたのか分からない状況に精神がちりちりと音を立てるのを感じながら、辺りを更に良く探ろうと目を凝らし、一步を踏み出した所で、彼女は気づいてしまった。

「ひっ…!!いい、いや…」

そうして、何とか勇気を振り絞って動かしていた体の力が抜け、引き付けの様な悲鳴を上げて腰を抜かしてしまう。

「いやああああああああああ!!」

今まで堪えていた不安や恐怖が、一気に発露し、それは悲鳴という形でもって彼女から発散される。

彼女は見てしまったのだ。丁度彼女が目覚めたのと対局の壁際に吊るされた物。

大人に子供、男に女、統一性のない数人の人間が天井からつるされていた。そのどれもが体の一部が持ち去られ、ぶらりと静かに吊られている。

床には原型もなく解体された人間だったらしき物が乱雑に置かれている。

でろりと臓器を溢れさせたもの、綺麗に頭蓋骨縦に割られ断面を晒す首。もとの部位など分からない程にぐちゃぐちゃとミインチにされた肉の山。

または、人間に近いが妙に捻じれて歪んだ皮を持たない、筋繊維が露出した異形の肉塊がごろごろと横たわる。

天井から吊り下げられた人間たちには、大き目の白い紙に文字が書かれ貼り付けられている。

嫌らしい事に、その紙は噴出しの形に切り取られまるで死体たちが語りかけて来るように見えた。しかも、わざわざその吊り下げられた人間に合わせて口調まで変えられている。

『おはよう、幸運な誰ともしれないおねえちゃん!』

『貴女の身体は私達の身体を奪って蘇生されたのよ』

『これだけの人間があんた一人の為に死んだんだ。もう一度眠りたいなんて言わないよな?』

『君を生き返らせた人は、少し席を外して居るんだ。寂しいかもしれ

ないが僕たちと待つて居て欲しい』

『ね？ね？ね？他人の死の上で得た生はどう？足元の彼らも皆、貴方の犠牲』

『でも誇ってくれ。君が唯一の成功例だ』

## 黒き地母神に奉げるいあいあ! 2

妙な女に声を掛けられた翌日の朝、コナンの通う帝丹小学校では全校朝会が開かれていた。

曰、最近東都で起きていた児童の失踪事件は誘拐と判断され、登下校は必ず集団で行うか、可能ならば保護者に迎えに来て貰う事。

そんな話が全校生徒に対して行われた。

もちろん都内に在住のコナンもその件については知って居たし、今朝も蘭が小五郎に依頼が無いのなら夕方コナンを迎えに行くようにと朝食の席で言っていた。

そんなコナンから言わせてみれば、何故今まで誘拐とせず、失踪などと言って居たのかと思う程の行方不明者数だった。

ニユース等で公開されている行方不明の子供達も、年長で中学生でそれ以下になってしまえば、漸く一人で歩ける様になった程度の幼児だ。とてもじゃないが、一人で行方を眩ませるとは思えない。

だが、誘拐だと言うにしては、何の要求もなく行方不明者だけが多すぎる。

御稚児趣味の変質者…でないにしても単純に子供が可愛いからと連れ去っていく行くにしては人数が多く、被害範囲も広いらしい。

個人の犯行とは思えず、かと言って身代金の要求もなしに複数の犯人が団結しているというの考え辛い。

：目に見えた理がなく法に触れる行為を複数人がぼろを出さずに出来るか、というのが疑問になる。

目的が全く見当たらず、コナンはその全校朝会どころか、授業中もその事件に関して思考を巡らせていた。

そしてその放課後、いつもの通り少年探偵団の面々で、教師の言葉通りに揃って下校しようとしている時にホームルームを追い一旦教室を後にしたはずの担任教師が廊下から顔を覗かせ声を掛けて来た。

「江戸川君と、灰原さんは帰る前に教務室に寄って貰っても良いかな？直ぐに終わるから、皆にはちよつと待ってもらって…」

「なんだよコナン、何かやらかしたのか？」

「コナン君はともかく灰原さんが呼び出される事するわけないじゃないですか」

「おい」

元太や光彦の若干失礼なものの言い方に苦い顔をしつつも、ちゃんと待ってるからねー！という歩美に送り出された。

「それで？本当に何もしていないのね？」

「するわけねえーだろ」

そんな、小学校の職員室に呼び出される様な事をした覚えはない。

：実際の一年生だった頃はあっちこっちに探検しに行き、幼馴染の母親には良く怒られていたが…。

「…そう。じゃあ用件はきつと、誘拐事件の事ね」

「はあ？なんでそうなるんだよ」

そこまで言って、はたと気づく。

「私もあなたも、親元を離れている子供しよう？」

気づきをそのままに灰原が口にする。

小学生のフリも何だかんだと板について来た様な気がして居たが、実際の所無意識の感覚では自身は大人であり今回の事件の被害の対象として除外して居た。

現に昨日、妙な人物に声を掛けられたばかりだったが…あれは誘拐犯、というよりもむしろ宗教の勧誘染みていたが…。

それにしても…普段それ程意識して居る訳ではない事実。

『親元を離れた子供』。

灰原もすんなり出て来た自身の言葉に、少し驚いた顔をしている。

2人の想像通り、教務室でされた話はすぐに両親への連絡は可能なのかと、現在の保護者達へのプリントを渡され遅くなる前にとの配慮で直ぐに返された。

両親から預かって居る、という体の二人は存在しない両親に言及された際にどう誤魔化すかと若干焦るも「聞いてみないと分からない」で押し通した。

それをやってのけた後に、改めて自身達への何も知らない第三者か

らの客観的な印象を突き付けられた気がした。

事情があるにしても、非難されても仕方のない両親像が出来上がって居そうな気がする…。

一度、偽…というか本物の母親による変装だったのが、江戸川コナの母親は顔を合わせて居るがもう少しまともな設定を詰めたの方が良いのかも知れない…。

そして齟齬が出ないよう、念のため、またひょっこり不意打ちに母親が顔を出さないよう連絡でもした方が良さかもしれないと思うコナは、どこか浮かない顔をした秘密の共有者に気づく事が出来なかった。

そしてその日の晩、灰原哀は姿を消した。



これは、夢、だろうか…。

形容しがたい、輪郭の朧げな夢。

酷く感覚的で直感的な世界。ただただどこまでも続く黒。本来、彼女の恐れる色の筈なのに、その世界を埋める黒はどこか温かく円い眠り、角のない柔らかく優しい密度、安心感を与える穏やかな包み込む様な圧を持っている。

どうせ、瞳を開いても続くのは黒い世界で有るのだから目を閉じても何も変わらない。

瞼を持ち上げて居るのも馬鹿らしくなりそのまま目を閉じる。

母親に抱かれていた記憶、というものは当然の様に無いがもしかしたらこの感覚に近いのかもしれないと思ってしまう様な心地よさ…。

このまま目覚める事も無く、『母』に抱かれて眠りに付くのなら…。

それは…………、



「ら、ららら、らら、ら、ららら」

数体の人間が天井から吊るされ、足元には出来損ないの珍妙なヒト型が転がる礼拝堂に明るい少女のハミングと、一定のリズムを刻む靴音が響く。

その場の惨状など気にも止めずに響く少女の弾んだ声に遅れて彼女の華奢な体を包む司祭の様な服が翻るのは、そのハミングに合わせてくるりくるとステップを踏むように踊って居るからだ。

「お留守番お疲れさま。ちよつとどいてネ」

床に転がるデキソコナイ達に彼女が目を向ける事も無く指示を出せば、ぐざり…ぎぎ…と歪なヒト型達が不揃いの手足を動かし礼拝堂の隅へと避けていく。

空いた道を尚、ご機嫌にくるくると回りかつ、かつん、とブーツを鳴らしながら薄暗い礼拝堂を進む少女は出かける前にベンチの一つにかけていった黄色のローブが無い事に気づき、その後にはタペストリー前の魔法陣の上に居た人物が居ない事に気づく。

きよろきよろと周囲を見回した後に、礼拝堂の隅に横たわっていた筈の女性が彼女の置いていったローブを纏い蹲って居るのを見つけた。

「…おはようございマス？…えと…：…はじめまして。あなたの名前も知らないますけど…」

ちよつとした練習の心算で、適当にその辺に有った遺灰や骨、死にたてフレッシュな死体、生体をバラすなどして『復活』を試してみた結果唯一の成功例のこの女の名前を少女は当然知らず初対面の人間に

対する当たり前の対応をするが、蹲る彼女は返答をせず、全てを拒むように首を振る。

「んんんー。人見知りデス？せめてローブは返してくれませんか？胸囲と着丈のカクサ社会で私のメンタルがダイレクトアタックを受けて居るんですヨ。あなたの着れそうな服を買って来たので！返しテ！ください!!そして私の事はフレンドリーにりっちゃんか、ご主人様と呼んでいいからネ！」

## 黒き地母神に奉げるいあいあ！3

平日の、通勤通学ラッシュ地獄過ぎてしばしたった頃、と言いつつも都心部に有る駅なので人気が引くことはないその駅前で妙な二人組の子供が居た。

小学校低学年程度の少年と、見るからに外国人といった顔立ちとカラーリングの少女が缶コーヒを啜りながら二人並んでベンチに腰掛けている。

最近小さな子供の誘拐事件が横行するなかで、この取り合わせはいささか妙で、物騒でもある。

「それで、えと、エドガー…エロ。エロか…エロくん!!」  
「コナンでいいよ、もう」

コナンは現在、平日中の正午も前に何故か金髪碧眼の微妙に片言な少女を相手にするに至ったかと言うと、今朝に起きた二つの事象に起因する。

一つ目は、今朝に帝丹小学校からの連絡であり、「本日臨時休校」と言った旨のものでもう一つはその連絡を受けて直ぐにコナンとして所持して居るものではなく、工藤新一名義の携帯へ阿笠博士よりのもの。

曰、『灰原哀が姿を消した』というもの。

昨日誘拐についての話をされ…と言うが、見た目や身体能力はともかく小さな子供でもなく、ましてやどこぞの探偵とは違い危ない事に自ら首を突っ込む様な真似はしない。

それに、夜が明けるまで博士は彼女が居なくなっている事に気づかなかったというのだ。

素性が素性なだけに、気軽に警察に連絡する事もできずに、まさか何か組織に関係することの有ったら…と考えた結果コナンへ連絡を寄越して来たのだ。

もちろん、そんな話を聞いてコナンは即座に阿笠邸へ向かった。

誘拐事件のせいでの臨時休校ではある為、蘭や小五郎にはいい顔をされなかったがずっと屋内で遊ぶし、帰りは博士に送って貰うから！と言いくるめてやって来たのだ。

酷く狼狽えた様子の博士を何とか宥めつつ、詳しい状況を聞くも朝まで気づかなかったという通りに目立った痕跡を見つける事は無かった。

争った形跡も無しに、まるで自発的に消えた様に、ただただ静かに行方を眩ませた。

見つけたものと言えば、地下の研究室の机に、全てを聞き直した様に広げられたままに成っている彼女の『母親の声』が記録されているあのテープ。

—おかあさん

探偵事務所の前で会った、妙な女が脳内に蘇る。彼女が口にした『お母さん』という言葉が嫌に脳にこびりついていた。

「なあ、博士…あいつ不審者に声を掛けられたとか言って無かったか？」

彼女の性質を考えれば、もし不審者に声をかけられていたとしても心配を掛けない様にと報告していない可能性の方が高い。

「…いや…全くなかった筈じゃが…」

少し思い返す様にするが、やはりそんな話は出て居なかった様だ。『母』というワードが妙に引っ掛かった。

今東都で横行している誘拐事件と、灰原の失踪を繋ぐ具体的な物は無いが嫌に、そのワードが重なり探偵としての経験がそこに何かあると告げるのだ。

「黒のゆりかご…」

ほそりと、その言葉を呟く。

あの女の下げたトートバックに示されたロゴと、その文字。弾かれた様にスマホを引っ張り出し検索をする。

「なんじゃ？…どうかしたのか？」

直ぐに検索結果が表示され、一番上にとあるホームページが示され、その下には纏め記事の様な物が数件。

一番上のホームページを開く。

【黒のゆりかご園

20■年■月を持ちまして閉園致しました】

トップページにその文字だけが表示され、他のページ飛ぶ場所もなくなつたそれだけのページでありどこに有つたのかも一体何の施設だつたかも、閉園理由も何も明記されていない。

そこに含まれる情報は約2年前に閉鎖されているという事だ。

検索結果画面に戻り、その下に続く纏め記事にざっと目を通してみるが全てネット上のゴシップやホラーチックな噂話、そんな物の寄せ集めであり目星い情報を直ぐに拾い上げる事は困難だつた。

「博士。ちよつと『黒のゆりかご園』について調べてくれねえか？」

「黒のゆりかご園、と言うのが哀くんが居なくなったことに事に関係しておるのか？」

「いや…確証はねーけど…たぶん…」

何故か、殆ど公開されていない誘拐されたという子供達の情報も有ればこの件に関係して居るのかも判断も付くのだろうか…如何せん情報が無さ過ぎるのだ。

「俺も調べて来る」

警察に相談出来ない以上、自身で見つけ出すしかない。

目的不明のままに誘拐された子供たちの安否も気がかりであり、出来る事ならこちらでも解決すべきだろう。

そう決心も新たにしたところで、出来れば目立たない様にと名を伏せ続けていた新一として知り合いの警察官へ此度の誘拐事件の情報提供を頼み、先ずは誘拐されたとされる子供について調べてみようとうごきだした。

提供された情報から、何か誘拐された子供に共通点は見当たらず…何故か警察の持つ情報も曖昧な部分が多いせいで事件の輪郭がさっぱりつかめないコナンは現場に行ってみようとまずは駅へ向かった所でその金髪の少女と出会つたのだ。

ただ、彼女に目を止めたのは彼女自身の外見ではなく何か、まるで邪る様に何事かを話す男に見覚えが有ったからだった。

長身に、銀色の長い髪、全身黒すぐめの衣装。忘れるわけも無く、直ぐに気づいた。

「ジン…!?!」

表情までは見えないが、少女の方はぷりぷりと起こった様にして居るがじゃれ合う様な、親し気な印象を受けるその様子に呆気に取られる。

数語会話し、少女を置いてジンは去っていく。

ふと我に返った様にはっとし、慌てて中指を立てて唾を吐き、口汚く罵り出しそうな勢いの金髪の少女へと駆け寄る。

走って行った訳では無いの既にジンの姿は掻き消える様に見えるべく成っていた。

「お姉さん!!」

「どうわあ!?!」

勢いよく駆け寄り、少女の腰にタツクル様な勢いで走り込んで来たコナンに少女は妙な悲鳴を上げた。

「さっきの人と知り合いなの!?!」

「んな訳ねーデス!!誰が有んなくその様に害悪しか産まないヤツと知りあいなんかしてやらナイよー!」

見知らぬ少年に急に意味の分からない質問をされても、反射の様に否定する少女にコナンも少し冷静になる。

「で、でもさっき仲良さそうにしてなかった…?それに害悪しか産まない奴、なんて言うんだから、どんな人か知ってるんじゃないの…?」  
「良くなーい!!ぜんっぜん良くない!!あんな奴知らないシ、アレは今日初めて会ったし、人をコバカにしやがっテ!!というか君はダレ?アレとどんな関係なの…まさかアレの落とし子的なあれ…!?!」

「ンなわけねえだろ!?!」

ぱっと距離をとり、所謂荒ぶる鷹のポーズで威嚇する少女のとんでも予測に思わずコナンもぱっと突っ込みを入れる。

「…じゃあ、なんでアレが気に成るの?アレに関わってもロクな目に

逢わないヨ…」

やっぱり何か知ってるんじゃないか…という物言いだ、明らかな敵意と警戒心が見え少なくとも組織の人間ではない様に思えた。

…実際に物凄く嫌そうな顔して居る。

「……まあイイヨ。ところできみ、黒のゆりかご園ってトコは何行のバスに乗ればいいか知らない？」

「それ！ボクも行きたいんだ！お姉さん何処に有るか知ってるの？」

そう聞いた途端に、今まで眉間に皺を寄せて「おのれ!!」とでも言う様な顔をしていた少女が悲しそうな顔をする。

「ぐぐればデルと思っただけ、出なかった…」

すっかり落ち込んでしまった少女の言葉にコナンもがっかりするも、この人の持つ情報も加えれば少しでも役立つかも知れない。

彼女も『黒のゆりかご園』を目指しているらし上に、先程の様子も気になって仕方がない。一緒に行動すれば探りを入れるチャンスもあるだろう。

「じゃあボクと一緒に行き方を探さない？二人で探せばすぐだよ！」

明らかに自身の年齢の半分以下の幼児と協力した所で、どうにかなるかと言えば、無理だと思うのが普通だろうに、金髪の少女は少々あたまの方の数値が低かったのかその申し出に喜んで応じたのだった。

そうして冒頭に戻るの。

「コナン…コナン…うん!!言いやすいね!!私はリート・神崎ダヨ。よろしくね」

甘い加糖のコーヒーを飲んで元気を取り戻したリートがニコニコと自己紹介をする。

「リートお姉さんってどこの人なの？」

「出身はイギリスだよ。今は日本に住んでるねーDNA的には1／4日本人だよ」

聞いて居ない情報までぼろぼろと落として来る…。大丈夫なのだろうかこの人。

「どうして黒のゆりかご園に行きたいの…?」

「友達…あ、お姉ちゃんの友達なんだケドね！わたしも友達だと思ってるコの実家で、ちよつと連絡取れないから見てきてってパシラされたんだよ！コナンはどうして行きたいの？孤児のオトモダチでも居るの？」

リートとの会話で、黒のゆりかご園と言うのが養護施設の類らしいと知る。

「えつと…ボクの友達がそこに居るかも知れなくて…。でも黒のゆりかご園って2年前にやめちやつたんだよね？リートお姉さんのお友達は経営者側の人のなの？」

ふーん??とリートは首を傾げる。明らかに意味を良く理解して居ない、というか、そんな事気にしなかつた、という顔をしている…。

喋り方や、その良く分かつて居ない表情にコナンは些かこの先に不安を覚え始めた。

## 黒き地母神に奉げるいあいあ！4

『母』を想う夢を視た気がした。

「目が覚めましたか？おはようございます」

その声で目が覚めたのか、意識が覚醒したお陰でその声を認識したのか定かではなく夢の余韻が幽かに残る視界に黒のリボンとレースで埋め尽くされた少女の様な姿の人物が覗き込んでいた。

覗き込む真つ黒な瞳は木のうろの様に空虚でその思考を読む事出来ない。それどころか：意思が有るのかさえ疑わしい程の深淵の様な目…。

その瞳から逃れるの様に、自身の置かれた環境を確認しようとするように周囲を見渡す。

「……、は…？」

見回してみたそこは、一般家庭にしては広く些か無機質なりノリウムの床と薄汚れた白い壁の部屋だ。まるで学校の様な印象を受けるが、教室にしてはやや狭い。

その教室の様な空間には二段ベッドがいくつか並べられ、灰原哀はその内の一つの下段で眠って居た様だ。

しかし、そこに至るまでの記憶が曖昧だった。

怪しい人間に声を掛けられた上に、誘拐の話も出て居たので、念のためと戸締りを確認していただきたい、その、窓の、外に…。

「覚えていないんですか？君は昨晚珪と一緒にやってきたんですが…」

黒い少女が表情は変わらないままに、こてりと首を傾げて膝をつき伺う様に覗き込む。

そう言われても、さっぱり記憶にない。その一緒にやって来たという人物にも覚えはなく、記憶の欠落、自身のあずかり知らぬ内に見ず知らずの環境に置かれている事に恐怖を覚える。

覚えが無い。と示す様にせいぜいが15歳程度にしか見えない少女に対して首を振って見せる。

取り合えず、目の前の人形の様な服装の彼女からは悪意や害意は感

じなかつた。ただ、僅かに違和感を感じるのだが…。

「あなたが珪…じゃないわよね？」

「僕は『黒い仔山羊』という生き物です。珪ではないですね。…珪を起して来ますので待って居てください」

妙な事を言いながら、『黒い仔山羊』は立ち上がりその場を後にしようとするとその黒いふりふりとした人影に小さな影が飛びつき、抱きつく。

「御子さまー」

「みこさまおはよう」

「はい。おはようございます」

『黒い仔山羊』はにこりともしないままに、そのくせに優しい手つきで頭を撫でる。寄つて来た子供たちは流れ弾の様に二段ベッドの下端に上半身を起こした状態の灰原にも子供が抱き着く。

「おねえちゃんも、おはよう。おねえちゃんはなにちゃんですか？」

『灰原哀』よりも幼い子供が舌足らずに名前を尋ねる。

「私は…し、哀、よ…」

「あいちゃんー」

「あいおねえちゃんも！今晚一緒におかあさんに会うの？」

「やったー！いっしょにおかーしゃんのところにいこうねー」

『黒い仔山羊』に明るい声を上げて、きやつきやつとまとわりついて居た子供たちまで、寄つて来て一斉に高い声で人懐っこく話しかける。

「…すいません。多分君がここで二番目に大きな子なので、甘えたいのかと」

「あら、あなたはここの子じゃないの？」

「僕は実質二歳みたいなのなので」

『黒い仔山羊』の要領を得ない回答に内心で眉をひそめるのだが、嬉し気に話かける子供たちのその様相に実際に眉を顰める。

皆が皆、嬉しそうに明るい顔をしているにも関わらずその目には一切感情が無く暗く淀んでいる。その上殆どの子供が不健康に痩せている。

良く見れば、怪我をしている子供も多い。

その上でその怪我は子供の有り余るパワーで遊びまわって負った傷には見えなかった。

「ここに大人は居ないの…？」

小さな子供をこんな状態で放置している環境に不快感を覚え、背中に負ぶさる様になっている小さな女の子に尋ねるがきよとん、と首を傾げる。

「大人はいません。いません。私達には『おかあさん』しかいららないんです」

不規則な足音、明らかに足が悪いと判断出来るものに振り向くと『黒い仔山羊』が二十歳目前、哀の本来の年齢と同じか少し上位の女を伴って戻って来ていた。

「あなたが珪…？」

「はい。おはようございます」

珪、と名乗る女性も酷く痩せていた。

足の骨を折った事が有るのか、そしてろくに治療をしなかったのか、歪に歪曲した足を引きずる様にしてあるき、小さな頃の傷なのか色素沈着をおこした皮膚が服から覗く部分だけでも目に付く程。

元来の顔立ちならば、それなりに美人だったのだろうが顔にも古傷が残り外斜視が目立つ。

「ちよつと…ここについて説明して貰ってもいいかしら…。どうして私はこんな所にいるの？あなたと一緒に来た、らしいけど私にはそんな記憶ないもの」

きよとん、と珪は不思議そうな顔をして見つめ返す。

「食堂の方でお茶でもいれておきましょうか？」

「御子様のお手伝いするー！」

「ぼくもするー！おかあさんに、兄弟のおてつだいをするいいことだったっていいねー！」

「あーずるいー！」

数人きやつきやとすでに哀を置き去りに遊んで居た子供達数人も、『黒い仔山羊』についていく。

その様子を眺めて、彼女は有る事に気づく。

小学生の皮を被った彼女は、その本来の年齢であつてさえもそぐわない程の博識であり有能な学者だ。些か畑違いの分野であろうが豊富な知識がある結論を見出してしまふ。

此処までで目にしただけでも分かつてしまふ程明らかにな、この子供達や珪、という女性の痩せ方はまるで不適切な投薬の結果のもだと理解した。

## 黒き地母神に奉げるいあいあ!5

「ふふおふ、どうふほうふふ?」

「…何言ってるか分からないよ…飲み込んでから喋ろう?」

コーヒートの缶を捨てさせてどうするかを改めて考え様と、現代利器、現代つ子の特権『ぐぐる』のみを頼りにやって来たリートの知る所をもう一度確認しようとした。

したのだが…、缶を捨てると同時にコンビニへ突撃し、フランクフルトや肉まん等を買ひ込みはふはふと頬張って居る。

ついでに、肉まんピザまん、揚げ鶏などが入った袋の口をコナンに向け食べる?とばかりに示して来るので結構ですとばかりに首を振る。

「ん…それで、どうする?コナンは友達住所とかで知らナイの?」

フランクフルトを一本食い尽してからリートは首を傾げる。

そう言えば、リートはここ最近の東都での誘拐事件については知って居るのだろうか…。

「そこに住んでるんじゃないで、居なくなっちゃったんだ」

「ウン?なんで居なくなっただもだちがそこに居ると思ったノ。教えてエロイ人!」

「エロくねーよ!」

「お口が悪いよ。お姉ちゃんが、詳しい人に聞く時はソウ言うって教えてくれたんで間違ってる。コナンはエロイ人!」

「リートお姉さん、それ間違えた知識だから…他の人に言っちゃだめだよ」

「まじか!?マタお姉ちゃんに騙されましたネこれ!」

また、という事はリートの姉は度々そう言った悪ふざけをするらしい。

「えつとね…お姉さんは最近の誘拐事件って知ってる?」

あーそう言えば…等と思い出す様にするリートへコナンは説明を続ける。

最初は明確に誘拐事件と『黒のゆりかご園』の繋がりは見え、漠

然とした感覚で捉えていたのだが今朝警察から得た情報により薄っすらと繋がりが見えた。

まず、行方不明者を大量に出しながら直ぐに誘拐とされなかった理由。

居なくなつた子供に元々家出癖があつた。保護者にあたる人間が子供への興味が薄く、信じられない事に警察への届け出が数日遅れた。保護者と子供の関係が希薄であり、居なくなるまでの行動が全く把握出来ずにいた…など。

そうして実際にコナンも出会つた女。『黒のゆりかご』という名前を知つた原因の女は、何か資料の様な物を見比べていた。

恐らく、標的の子供の家庭環境などを調べた物だろう、と。

「う、うん…?」

「あー…えつとね?二年前に閉園した施設の人がわざわざ子供に直接声をかけたりするのっておかしいでしょ?」

しばし沈黙をしてから、リートはとてもいい笑顔でサムズアップしてきた。心なしか目が泳いでいる。

…大丈夫だろうか…。

まだざつと目を通しただけだったが、ネット上でさえ異様な程に『黒のゆりかご園』の所在地が見当たらないのだ。結局消えた子供の保護者に何か異変が無かつたか聞き、そこから『黒のゆりかご園』への道筋を探るしかない。

…なるほど、これでは警察も困る訳だ…。

「わたし、ちよつとこんがらがって来たヨ」

もそもそとリートが肉まんにまで手を出し始めた。

「お姉さんのお友達はなんて名前なの?実家って事はちゃんと運営してた時なんですよ?」

すでに肉まん一つを咀嚼し終えたリートを現世に戻す為に話を振る。

「クロだよー。クロねえ、もう自立して恋人とドウセイしてるよ。えと…くろ、くろうつつクロエ?つてこー!」

「外国の人?」

「うん！そうだよ。実家に帰るって言うってからクロと連絡取れないから、直接見てこいってお姉ちゃんに言われて、ネ…」

新一としては一人っ子、コナンとしては実の弟の様だと称しながらも歳の離れた（ている様に見える）蘭。世間一般的な姉と言うものは知らないが、リートの複雑そうな表情を見ると一人っ子で良かったと思ってしまう。

「お姉ちゃんに、良く分からないまま送り出されたんだね…」

「妹は、パシリなんだよ…」

うふふ…と青い瞳を細めるリートが少し不憫になったが、連絡も取れない、という事は彼女から聞ける情報も無いだろう。

今も定期的にその友達にメッセージを送っているらしいが、既読にはならないそうさ。

「じゃあ…話が聞けそうな人の所へ行こう」

頭上にクエスチョンマークを浮かべたリートの手を引いて、コナンは淀みなく歩き始めた。

「……か…」

知らない内に呟いた言葉に、……？と手を握ったままのリートが聞き返す。

駅からバスで少し。帝丹小学校とは逆方向の学区に属する住宅街でとある家を見上げながら呟く。

「そう。……が今回の一連の失踪が『誘拐』って判断される切っ掛けになった家なんだ」

「例のコナンのおともだちの家ナノ？」

「……のひとりかな!!」

ジンとじやれて居た現場を目撃した上、目指す場所に知り合いがいるかもしれないというリートを目の届く所に置いておきたいという理由で一緒に来たのだが…普通に考えて見れば小学生が警察の情報を持っているのもおかしい話である。

どこかで、言いくるめダイスが転がる音がしたが、如何せん、数々の修羅場を乗り切って来た江戸川コナンの言いくるめ技能は成長ももりもりの万能技能と化して居た。

近づいた家の表札には『神無』とある。

新一名義のスマホに贈られたデータをもう一度見返してから、ここで間違いないと頷く。その情報に寄れば、ここは誘拐されたときれる子供達の家の中で、比較的普通の家庭だ。

子供が居なくなつて、直ぐに通報する程度には。

「百代!?!」

ばん、と激しい音がして玄関から高校生らしい少年が飛び出して来る。

「百代ちゃんのお兄さん…?」

コナンとリートの姿を確認して、あからさまにがっかりした表情の少年を見上げる。

「う、うん…そうだけど、君たちは?」

「うえ!? わたし、わたし…えー!?!」

「ボク、百代ちゃんと時々遊んでただけど、最近全然会わないから心配で…」

しどろもどろになるリートを置き去りに、ペろつと嘘を吐く。

「…そうか…ごめん、ちょっと暫く遊べないんだ。ごめん…」

「モモヨも例の誘拐なの? わたしのトモダチもいくえ不明なんダヨ」

「君も!?!」

リートの全力な無遠慮っぷりに一瞬、焦るがこれは情報を得るのにいい流れかもしれないと思う。それと同時に、この同い年程度の少年の悲嘆に暮れた表情を見ると行方不明になってしまった彼の幼い妹を見つけてやりたいという想いが強くなる。

『九十九』と名乗った、被害者の兄に促されて家に上がる。

幾ら平日とは言え娘が誘拐された可能性が有るにも関わらず、両親は出勤しているらしい。家には九十九しかない様だった。

「うちは、親が共働きで歳の離れた俺が百代の面倒を見てたんだ…。でもあの日は、テストが近くて家事が山積みで…百代の遊びに付き

合ってやれなくて…それで、機嫌を悪くした百代と喧嘩になって…。いつもは駄々こねても、ちよつと構えば二人で笑いあつて直ぐ仲直り出来るんだ…」

ふう、と深いため息を九十九が落とす。

「大人げなく、妹が謝るまで俺から話しかけない。なんて、意地を張つてる間に…姿が見えなくて…!!」

顔を覆つてしまう兄の姿が余りにも不憫で、眉間に皺が寄る。

リートは話を聞きながら、こくりこくりと船をこいでいた。

「ねえ。九十九にーちゃんは、百代ちゃんが居なくなる前に変な人に声掛けられなかった?」

不思議そうに此方を見つめ、思い返す様に空中に目をやり記憶を探る様にして見せる。記憶を呼び覚ます呼び水になればと、コナンは続ける。

「ボクね今、探偵のおじさんの所に居候してて両親とは別に住んでるんだけど知らないおばさんに『寂しくない?お母さんに会いたくない?』つて声を掛けられたんだ。にーちゃんや百代ちゃんはそういう事、無かった?」

あの時の女は蘭の事も知つて居た。両親が有名なのを差し引いても『離婚した』や『娘』という区分が強く表れている様に感じた。

居なくなつた子供は幼い者ばかりだが、ひよつとしたら蘭や目の前の少年辺りの様な年齢まで対象に含まれて居たのかも知れない。

ひよつとしたら九十九にも接触が有つた可能性もある。

「…いや。そんな話は聞いてないな…。君は、そのおばさんに声を掛けられてついて行かなかつたんだね…」

「うん。一緒に住んでるお姉さんがおばさんと話してるのを見つけて…あつ、ご、ごめんなさい」

九十九は目を離れた隙に妹が消えてしまっている。同じ年齢程のコナンは実の兄弟ではない同居する『姉』がその現場を見つけて難を逃れた。

そういう様に見える現実を突きつけられ、九十九はなお一層後悔に満ちた表情を浮かべた。彼を傷つけてしまったと悟つたコナンが謝

ると、力なく笑う。

「気を使わせちゃったな…こんなちっこいのに。君はいい子だな。君の姉さんも…。あ」

そこで突然何かを思い出した様に九十九が顔を上げる。

リートは完全に眠り込んでいる。

「なに!?何か思い出した!?!」

関係ないかもしれないけど…と言って九十九が話し出す。

「百代が、居なくなる何日か前に、夜中に突然俺の部屋に来て『外に大きい黒山羊さんに乗ったお姉さんが居る』って言ってきたんだ。起こされて、外を見たけど何も居なかったし、夢だろうと思っただけ…朝になって親にも話してたけど信じて貰えなくてわざわざ絵まで描いてたな…ちよつと待つてて」

その絵を見せる為に九十九がリビングを後にする。

「黒山羊…」

「ぶほおあつ!?!」

「な、なに?どうしたの…?」

最近思考した、聞いた、発した言葉に何かざらついた映像が脳内に過り、その不明瞭な物をはつきりさせようと口に出した瞬間突然リートが覚醒咽たのに驚き、少し仰け反る様にして距離を取ってしまう。「う、うーん…いや…ウン??黒山羊なんて悪魔みたいダネ。つて思ってた…だけ…うん」

少し歯切れの悪い返答をし、僅かに目が泳いでいる。

…出身は英国だという彼女にして見れば山羊、と言うのはやはり悪魔のイメージが強いのだろうか。子供を攫う悪魔。そういった印象…。

やはり脳内に妙なノイズが流れる。

その正体の分からない中で、あの旅館で出会った黒い衣装に身を包んだ少女を思い出す。悪魔をモチーフにした楽曲を歌い、蹄のブーツでステージ上に立った黒井小夜林の姿。

いや、まさかそんな…。

そんな自身の思考に潜り込むコナンには、リートが何か遠い目をし

て、諦めた様な顔で天井を見上げながら何かを小さく唱えるには気づかなかった。

「……イアイア……」

小さく唱えた後に、ヤケクソの様にピザまんを頬張り咀嚼し始めたので、尚更その言葉を聞きとがめる者は居なかった。

## 黒き地母神に奉げるいあいあ! 6

「さっぱり分からなかったネー」

「……うん……」

神無宅を、お礼を言つて後にする。お暇する際に、九十九が持つてきた百代が描いたという『黒山羊』の絵を写真に収めさせてもらった。それを眉根を寄せながら見つめる。

「下手だね?」

その画面をのぞき込むようにしてリートがそう評価する。

「まあ、子供の描いたものだしね……」

確かに、お世辞にも上手いとは言えない。

クレヨンで描かれたつもので、黄色で星や月。黒で、山羊……と言うよりもぐちゃぐちゃと適当に引いた線の塊の様な物が画用紙いっぱい埋めている。

山羊、と言うよりも子供の描いた平面的な樹木に見えなくもない。

「コナンも小さいくせに。これより上手く描けるノカー! わたしは無理だけど!」

何故か妙に自信満々なリートだ。

「山羊でしょ? それならボク、もうちよつと上手く描くよ。少なくとも、足は四本にするし」

「何時から山羊の足が四本だと錯覚していた……?」

……前足は手とか言い出すのだろうか?

「これね、昔お姉ちゃんが描いた黒山羊だよ」

しばしスマートフォン画面を弄った後に、画面をこちらに向けて来る。

「山羊……?」

「山羊らしいよ。お姉ちゃんの二は」

そこに写って居たのは、一体どこがどう山羊なのかさっぱり分らないナニカが画かれたキャンパスだ。

正直、山羊らしさを見つける方が難しい。

ソレは、大部分が雲の様な実態のない不定形のもので占められ、口

だどでもいう様な亀裂が数多存在し全てに牙ぎっしりと並んで居る。蹄を備えた足は確かに偶蹄類らしいがそれだけだ。

その足も、角も、山羊にはあり得ない触手が数多不定形の身体から垂れ上がり、或いは天を突く様に伸びている。あえてそう描かれているのか、或いは技法の問題なのか、デロリと融けだしたように黒が滲み落ちている。

「……」

何とは言えない、正体不明の嫌悪感と寒気が背に這い寄る感覚がする。ぶるりと、知らずに身振いしてしまう。

…しかし、リートの姉が描いた『黒山羊』と百代の描いた山羊のへはその力量に大きな差は有れど、どことなく似ている、という印象を受けた。

「これ、何かモチーフとか有るの？」

一瞬走った怖気を追い払う様にリートの顔を見上げて尋ねる。

「うーん。お姉ちゃんハ『啓蒙が、高まるううう!!』って言いながら描いてただけだから、ちよつと分かんないヨ」

「そう…」

取り合えず、リートの姉が中々変わった人間なのは分かった。

「それより、次はどうスルの？わたしには何のあてもないぞ！」

「ああ、ここも行方不明になった子供の家なんだけど…」

そこまで言って、また『友達』という言い訳で押し切れるか考えて口を紡ぐ。

「ぼつろーい！お前んち、おっぱけやーしきーって言えばイイのかな！？」

…大丈夫そうである。

リートは見た目は中学生位で、新一として見れば年下ののだが…彼女はなかなか中身が幼い、と言うよりも些か異常なものを感じるが…。

「叫ばないでここよ…」

一応平日の住宅街だ。絶賛義務教育中の様な二人がうろついて居るのは不審がられるだろう。

そもそも、この家に関しては通報したのは近隣住民だ。元々保護者にあたる両親共々姿を見ない、と言うので通報が成された様だ。

後に警察が捜査に入った結果、数日間大人二人のみが生活して居た痕跡が見つかって居る。どうやら、子供が居なくなった後に、通報する事も無く日常を送り続けていた様だ。そしてそのご両親の失踪。

それも有って、当初は別の事件とされていた様なのだが：同じく近隣の住民の目撃情報で怪しげな女に声を掛けられ会話を交わしていた、という事実も発覚した。

ふと、静かになつたと思いいりーとの方を見るとから揚げが串に四つ連なつた物をもぐもぐと咀嚼している。

「りーとお姉さんはちよつと待っててー！」

此処までの言動を見るに、家主不在の家を調べるのにりーとは不向きな気がする。

「えー！一緒にいくヨー!!」

残念ながら、つて来る。

「スニーキングミッションなら任せろー！」

そんなことを言つて、黄色のダツフルコートのフードを被り姿勢を低くして忍び歩く様な動作をするが、そんな歩く卵焼きみたいな様子では何の効果も無い。

本人に忍ぶ気持ちがあるなら、まあ：とりーとが発言した通りになかなか古い一軒家の敷地内に入り込む。

外壁は雨風に薄汚れたトタンで窓枠も木だ。

玄関のドアも、随分と古ぼけたもので塗装どころか木の表面もはげかけて居る。扉の脇に赤い郵便受けが付けられて居るが、錆びつき元の赤さが殆ど残つて居ない。

一応、と言う様にインターフォンを押そうとしたが壊れているのか、かちり、とボタンを押した感覚しかない。

「ごめんください…！」

控え目に声を掛けるが何の反応も返つて来ない。

がちやがちやとりーとが躊躇いなくドアノブを回すが鍵がかかっているらしい。

「うーん。ルス？コナンはここ入りたいの？」

こてり、と金色の髪を揺らしてリートが尋ねる。

それは、まあ、出来る事なら入って調べたい…。

「任せロー！」

妙に元気な、歩く卵焼きと化したリートが背に背負っていたリュックを降ろしそこから何かを取り出す。

「ちよ、ちよつと待て！じゃなくて、待ってお姉さん！」

その取り出したものを見て、コナンは焦る。

リートが取り出した物は、10kgと書かれた、鉄アレイだ。…それで何をするつもりだ!?

「これで鍵開けをするヨ！」

「鍵開け…って鉄アレイでか!？」

嫌な予感しかせず、ひしつと、小学生の細い腕でリートの腕に縋りつく。

「鉄アレイでぶん殴れば、だいたい何とか成るナル！」

「やっぱりか!!」

「鉄アレイはステキな魔法のステッキだよ」

「何言ってるんだアンタ!？」

少々、リートと揉めた後にコナンが玄関わきに置かれた、枯れた植木鉢の下から合いかぎを発見することが出来、リートによる魔法のステッキごり押しは回避された…。

「ちえー」

なんて言いながら、10kgもある鉄アレイをリュックに戻すリートを横目に見ながら、様々な意味で、『大丈夫か、この人…』と何度目になるか分からない思考がコナンの脳を巡って居た。

何とか穏便に、と言いつつも他人宅に足を踏み入れたコナンは違和感を感じる…。

内装も外観同様に酷く古びたものだが、玄関に並ぶ女性ものの靴、が収められていたであろう箱は新しく有名なブランド物ばかりだ…。

子供が居た筈なのに、子供の靴は見当たらない。行方不明になった

際に履いていた一足のみ、という事なのだろうか。  
がさがさ。

静かだと思つてリートの方を振り向くと、再びリュックから何かを取りだして居た。

「…ねえ。リートお姉さんつて普段何してるの?」

リュックからさも当然の様にシューズカバーを取り出して、一組を此方へ差し出して来る金髪碧眼の卵焼き少女にジト目に成つてしまふ。

「えっ! 要らナイ!? だつて急に逃げる時、靴脱いでたらアブナイよ!! コレ着ければ靴のまま上がりこめるよ!! 普段は教会で歌つてるお姉さんだヨ!!」

そんな事をさも当然の様に考えてシューズカバーを持ち歩いて居るつて…なんのプロだ。なんのとは言わないが…。

まあ、今が有難く受け取る。

もしも一緒に行動していき、何か怪しい動きが有れば容赦はしない。と思つて居る横で再びナゲットを食べ出したので、氣勢を削がれる…。

がさがりがさりという独特の足音を立てて、古びた家屋内を進む。ご丁寧にリートは手袋まで持っていた。中学生女子の彼女のサイズで用意された手袋は少々大きいがなにも無いよりはましだろう。

…それにしても用意良すぎだろ…。

「なんか、あんまり子供が居た感ジしないね?」

毛羽だつた畳の上を進みながらリートが呟く。

それは正にその通りだった。見える範囲は女性ものの服や鞆が散らばり、子供のものらしき物は見当たらない。散乱するゴミの様な物のショップの紙袋やネット通販の段ボール箱ばかり。

子供の玩具や、本の様な物も見当たらない。

ふと目をやったキッチンの一角に、折り畳みに机と一枚の座布団。その一角にのみ黒いランドセルと教科書が一まとめに積まれていた。

子供の居た痕跡はその程度だ。

ざっと家の中を見回しただけでも想定される、この家の子供の生活環境にコナンは知らずに眉を顰めて居た。

「コナンー。ちよつとコレ!!」

「何かあったの?」

部屋の隅で、何かを摘まみ上げる様にしたリートに呼ばれそちらを向く。

「これ…!!」

手渡されたそれは、小さなパンフレット、と言うには文字数の少ないチラシと言った方が良いでしょう。

『望まぬ子どもを真なる母の下へ。双方の幸福を願い、子を愛する母の元へ還しましょう』

その様な文句とその下に、数日前に見たシルエットで黒く抜かれた揺りかごのロゴ。

『黒のゆりかご』

その下には、しっかりと住所が印刷されていた。

## 閑話 彼らが母を求め始めた時に：

ベルモットは僅かに腑に落ちない様な、ボタンをひとつ掛け違えたままにいる様な心持である人物を探していた。

夜間の静かな路地の奥。

そうとは言つてもこのご時世、真の闇など存在はしないこの日本。だがおかしなことに、今彼女が身を置く暗がりはその建物の影から闇が手を伸ばすようにじりじりと迫って来る様な錯覚を覚える。

闇の擦り寄るその物陰に、その暗闇を塗り込めたかの様な少女が佇む。

日常に降りる穏やかな夜の中で輪郭がはつきりと浮き出る闇を纏った少女。

それは、彼女も彼女の周りに居る人間達も同じ色を纏っている筈なのにその少女が異質に見える。

ニアが語った話は俄には信じられない。真つ黒な怪物が、彼女のたった二つの宝物を脅かそうとしている等と。もちろん、彼や彼女は危機と隣にある事は理解して居る。

それでもまさか、その危機の種類が人智の及ばぬ所に居る怪物だなんて信じられない。

信じられない筈なのに：何故かニアの言葉には妙な信憑性があつた。

あんな、どう見てもジンへの嫌がらせとしか思えない変装でもつて語り、その語り口調だったおちよくる様な冗談の様な言い様でしか無いのに、何故か惹かれる物があつた。

そして信じられないと、思うままに、目の前の少女に辿り着いてしまった。

黒のレースとりボンで彩られた所謂ゴシッククロリータの少女が此方が何かを言う前にくるりと振り向く。

「…■■■■、■■■■…？」

聞こえたのは、到底人の言葉では無いもの。

ぶつぶつと泥が沸き上がる様な不快で、不気味な音。意味を成さな

い音、で有りながら何かを語りかけようとする様な、動物の鳴き声ともとれる不気味なもの…。

「…すいません。最近あまり人型になって居なかつたので発声が上手く行っていないかもしれません。ご不快でしたらすいません。それで、どうかしましたか？さつきから僕をつけて居た様ですが」

今度は確りと人間の言葉、日本語で聞こえた。

どこか茫洋とした生気の籠らない声で、真つ黒な瞳に感情は何えす闇の底へと繋がって居る様な虹彩だった。

「あの…僕の話は聞こえて居ますか？予定が詰まって居ますので行っても良いですか？」

こつこつ、と独特な足音を立てて少女は離れて行こうとする。

「待って！」

ベルモットは慌てて声を上げた。

彼女にとつての掛け替えのない、この世界でたった二つの彼女にとつての宝物。彼らの危機に成りうる『化け物』。そう言われた少女は確かに常人では無いだろう雰囲気を持つが、ニアが言う程の危険性は感じない。

このお人形の様な少女をどう、処理したものか…あまりにも発する言葉や見た目が真つ当過ぎてどうする事が最善かと思案する内に少女は去って行つていこうとしたのだ。

それを引き留める為に、思わず声を掛けた。

「はい」

訝しむ様子もなく、黒い少女は振り返る。

「女の子がこんな遅くに一人で歩いて居るのが見えたから心配で…。ごめんなさい、後をつけるような真似をして」

咄嗟に出た言葉だが、特に不審さは無いだろう。いくら日本が平和でも、20歳前の女の子が一人で歩いていていい時間ではない。それなば成人して居るベルモットの言葉に理がある。

「僕は女の子ではありません。…それに闇夜を歩く危険に性別も年齢も、人で有る以上差異はありません」

こてり、と首を傾げて情動なく少女…黒い影が告げる。

「僕はそもそも一人ではありません。兄弟も一緒に来て居ます」  
ずしり、みしり、ぎし…。

そんな音が、ベルモットの背後更に深い闇の奥から響く。  
大きな重量が空間を圧迫する気配が背後からしていた。



「私は…どうして生き返らされたの…?」

驚き、戸惑い、恐怖した。

全てを恐れて、動転し、錯乱し、思考を放棄する段階は既に超えてしまっていた。心をどこかに置き去りにした様な、妙に凜いだ気分で死人だった筈の彼女は問いかけた。

礼拝堂には仄かな炎の明りが灯り、色彩だけは温かく取り繕って居る。

目覚めた時に拝借した黄色のローブは、持ち主であるらしい『りつちゃん』という金髪碧眼の少女へ返した。現在は彼女が買ってきたらしい、洋服に袖を通して居る。

彼女曰、残念ながらブラのサイズは酷い格差がある事しか分からなかったのだ、無い!という事でカップ付きのインナーを渡された。

天井に吊るされた死体や床に散らばる歪に継ぎ接ぎされた人体に臆する事も無く黄色いローブを纏った少女は笑い、自己紹介をしたのけた。

しかも、目の前の精々日本人の感覚では14、5歳程度の女の子がしつと手を振る様に指示を出せば、床に転がる体が蠢き礼拝堂の闇へ姿を消して行く。

金髪に青い目。物語ならお姫様のみみたいな外見の女の子は、まるで魔法使い…御伽噺の悪い魔女…いや邪悪な悪魔の様だった。

そこで精神のタカが外れ、思う存分取り乱し叫んだ。

処理しきれない感情を全て発露させ、空っぽに成ったところに、大騒ぎする大人に戸惑った様子の黄色いローブの女の子が、おどおどとしながらココアを差し出して来た。

思わず乾いた笑いが出てしまう。

血と人の脂の臭気が充満し、何の神とも知れぬモノを祀る礼拝堂で甘いココアの香りは如何にも異質過ぎて、逆に笑ってしまった。

それで、やけくその様にココアを一口飲み、僅かに戻った落ち着きの中で発したのが先の疑問だった。

確かに死んだ筈の私は、何故、生きている？

しかも死体の張り紙の通りなら、多大な犠牲を払ってまで。

「エー？」

尋ねられた女の子。14歳程度と思ったが人種的に日本人よりは大人びて見えるから、もつと幼いかもしれないその子。同じようにココアの入ったマグカップを持ち、黄色いローブの裾を蹴り上げる様にベンチの一つに腰かけて首を傾げる。

「別に狙って生き返ラシタ訳じゃないから。意味なんてないヨ」

何てこと無いように言う。

ただ、何の意味も無く大勢の人間の身体を刻んで、一人の人間を蘇らせたのだという、悪い魔女の様な女の子。

『復活』の呪文ね、当人の魂が要るノ。後は体を形成する『塩』ね」

ふらふらと足を揺らしながら、未だ、礼拝堂の後方に吊り下がり揺れる死体へ目をやる。

『塩』ネ、復元する元の人間の大きさによって要る量が変わるの。本人の死骸が有ればソレを『塩』に還元すれば良いケド。無ければ、別に誰の体でも、使えればイイの」

何ともオカルティックな話だが、実際に死んだ自分が今こうしてここに存在し、確りと恐怖を感じ、ココアの味を脳が受理している。

『塩』で復元した偽物の身体に本人の魂を入れれば、生き返った様に見えるノ」

にこり、と黄色いフードの下の青い目が笑う。

魂はお姉ちゃんが適当に拾って来たものだから、偶然だね。偶然、あなたただただだけだよ。

「み、みゃ…みいーミアニヨさんは、運が強いのかもね」

見た目の通りに、『りっちゃん』は日本語がそこまで堪能では無い様

で会話の中でもイントネーションが不自然な時があり、『宮野』として  
かり発音できない。

「…明美でいいわよ…。そうね悪運、かしらね」

どうしてこんな悪い魔女みたいな子と、フレンドリーな会話をして  
いるのか不思議だった。

「…ところでサ。アケミ。生き返ったって言ってるケドね」

礼拝堂の中に灯された炎が、風もないのにぐらりと揺れる。

夏の青空の様な瞳が、炎の光で怪しく光る。

「他人の身体を還元した『塩』を使った入れ物に、幾ら本人の『魂』を  
入れたからって当人だと思ってるの？」

空になったマグカップを、ベンチに置き『りっちゃん』はたったと  
と、礼拝堂の背後、未だに死体の揺れるそこへ駆けて行く。

距離のあるここからでは何を言ったのかは分からない。それでも、  
歌う様に何かを小さく紡ぐと、吊るされていた死体たちが、ざらりと  
その姿を崩す。

身体のうちがちが掛けた人体は青灰色を帯びた、白い細かな粒子に  
変わり、さらさらと礼拝堂の床に積る。

「あなたたちはね、生前の姿と魂を持った怪物でしかないんだよ。いま  
ある、命に見えるものだって、呪文一つでまた『塩』に逆戻り」

黄色いローブのを纏った、金髪の悪い魔女の様な悪魔は問う。

「ネエーアケミ、偽りの生命を多大な犠牲の上で得てしまっタあなた  
はこれからどうする？」

激しい感情の転換に、上手く機能しなくなっていた恐怖心が、再び  
鎌首をもたげた。

## 黒き地母神に奉げるいあいあ！7

『黒い仔山羊』に案内されるままに訪れた食堂は、やはり一般家庭のそれでは無かった。十数人の人間が一度に席に就ける様にダイニングテーブルが数組置かれている。

併設されたキッチンも、一般家庭の物に比べれば大きい。業務用、といった程では無いが…。

そんな大き目のキッチンには、4口程コンロが有るというに持ち運びできるカセットコンロが置かれ、シンクにはレトルト食品のからが押し込まれている。あちこちを見渡せば、非常食用の乾パンの空袋や、缶詰の空ばかりが溢れている。

到底も子供の生活環境として、相応しいものの様には思えない。

「ごめんなさい。最近『おかあさん』の子供が増えたので、もう残りが少ないんです。どうぞ」

灰原よりも遅れ、足を引き摺る珪がやって来る。

沢山あるダイニングテーブルの一つを示し、座る様に促されるが、その前に常に足を引き摺りよろよろと歩く珪を見兼ねて進められた椅子の目の前席を引いてやる。

「…ありがとうございます。それで、何ちゃんでしたっけ」

「哀よ」

この目の前の女性と共にやって来た、と言うが彼女は灰原の名前さえ把握できていない。

「お茶どうぞ」

相変らず表情の読めない、というよりもお面でも被っている様なるりとした感情を表す事を想定されて作られていないとさえ言えそうな『黒い仔山羊』が目の前にマグカップを置いていく。

些か色の薄い液体が揺れてた。

「それで、私はどうしてここに居るのかしら」

カップへ手を伸ばす前に、最もな質問をする。

「昨晚、私が『おかあさん』の子に成りたい子達を探している時に哀ちゃんに会いました。あなたはそのまま私に着いてきましたか…覚

えてませんか？」

「記憶に無いわね…」

「僕を見て動転して居たのではないですか」

思い起こしてみても、やはりそんな記憶が無い。

…ただ、窓の外に…窓に…黒い…

ぞつとした何かが背を這い上がり、それを振り払うように軽く首を振る。

「…ここはこういう場所なの？」

何や思い起こしていけない記憶を探りそうになり次の質問を投げかける。

先程気づいてしまった、どう考えても健康状態の宜しくない子供に、投薬の結果に寄る不自然な痩せ方。大人の無い環境に、『大人は要らない』という珪の言葉…

「ここは、『おかあさん』の元に還りたい子達の、一時的な居場所です」  
また、『おかあさん』という単語がでる。温もりがある筈のその言葉に何か悍ましいものが潜む気がする。

『おかあさん』は絶対です。絶対、私達を愛してくれる。私達は、愛してくれる『おかあさん』の元に還りたいんです。ここは、そんな子達の集まり。皆ずっと待って居ました…哀ちゃんも運がいいですね。今晚ですよ。もう、数時間で『おかあさん』が迎えに来る」

昨晚の記憶の中で、はつきり残る物。突発的に母の声が遺されたテープを引っ張りだし繰り返し再生させていた記憶…

「もう何も心配しなくていい。『おかあさん』の腕の中全てを委ねて眠りにつけばいい」

『母』という物への異様な信頼と傾倒。まるで質の悪い宗教の様に生き物な当然の様に持つ『母親』への敬神。珪の口調からはそんな物は伺える。

何となく、ここに居る子供たちの経歴に察しが付く。

親に蔑ろにされた子供達が、偶像の様な『母』を信奉し逃げ込んだ場所だ。一体誰が始めたあ事は分からないが、目の前の珪でさえ、誰かに教えられたかのような、信者の顔で語る。

灰原が言えたことでは無いが、成人の様な見た目と中身の年齢が合って居ない。珪の場合は、逆に、まるで幼子の様なのだが…。

彼女に誰がその思考の発端で、子供を集め始めたのか聞いても無駄の様に思えた。

ならば、まだ得体の知れない『黒い仔山羊』に話を聞いた方が良い気さえしてしまう。それ以外は皆、余りにも幼い。

「えっと…他に何か気になる事はありますか？もうちょっと前だと、使うベッドとか、皆と話し合って決めていたりしたんだけど」

「…、あなたもそうだけどここの子供たちの怪我はどうしたの？」

珪は不思議そうに首を傾げる。

「皆それぞれですよ。私は…どれが何で付いたか覚えて居ませんが、日は昔院長先生に酷く殴られて真っすぐ向かなくなりまして…。まあこんな感じで大丈夫ですか？私は今晚『おかあさん』を迎える準備がありますから」

歪みの残る顔で、珪は笑って手を伸ばし灰原の頭を撫でる。

「一緒に『おかあさん』の元に還りましょう」



もともと出会った時から珪に、正気と言われる物は乏しかったですが…ここ数日はお母さまを呼ぶための儀式の準備を行う関係上少し思考が狭まり、精神性が幼く成ったように感じますが、それも彼女やここの子供たちの望んだことなので何の問題もありません。

人間の母親は誰も彼女達を救わなかったのだから、僕たちの信奉する母なる地母神へ縋ったのでしょうか。

何を信じようが、個人の勝手です。僕らはお母さまが信仰と贄への返礼として遣わす者なので彼女達の望みを叶えるべく協力するだけです。

彼女達の願いは『母への回帰』ですから僕は、シユブニグラスの招来に必要な手順を教えたまで。

「…あなた…えつと…」

『黒い仔山羊』と呼び辛ければ…クロエとでも呼んでください」

先程もまで珪と話していた子供が振り仰ぎ、言い淀むのでそう伝え  
ます。黒井小夜林でも良いのですが、バンドメンバーの妹で、彼女の  
様に毛色の異なる人間は上手く発音出来ずに「クロエサニヨ、サニヨ  
リ？」などと言うので、予めの配慮です。

「そう。じゃあクロエ…ここは、何かの新興宗教なの？」

宗教。

人間的感覚から言えばそうでしょう。でも、ここには教義を広めよ  
うとする者は居ません。誰一人。純粋な信仰のみで、僕らは召喚され  
ました。

言葉に変換する事の不可能な、純然たる『母』への渴望だけ。それ  
が信仰心と認められるほどの、純然たる祈りです。そこに偶然贅が捧  
げられた。

なので、以前僕が他所で巻き込まれた事件の様な魔導書も、手記も、  
狂信者もここには居ません。ただ母を求める心があるだけです。

なので、

「違いますね。単純に絶対的な存在の『母』を求めた子供の集まりに過  
ぎません。君もそうなのではないですか？何かが怖くて、何かに抱き  
しめられて、何も心配する事無く眠りたい。母に抱かれない。だか  
ら、珪に着いて来たのでしょうか？」

哀と名乗る少女が一瞬戸惑った表情をしました。

「分からないわ…。覚えて無いもの」

それは昨晚の事？それとも母と言う存在を？

「ついでにもう一つ聞いていいかしら？」

「はい」

「…ここの子供達、さっきの珪も含めて痩せ方が尋常じゃないの。薬  
物の過剰摂取によるものみたい…心辺りはない？」

薬物ですか…それは、人己の得意分野であって僕自身は詳しくない  
のですが…。恐らくこの園の裏の林、その奥にある農園の物の事だ  
でしょうか…？

「僕は詳しく無いので分かりませんが…後ろの林の奥に、畑のような物

があります。一種類だけ、葉が茂る植物が植えられて居て：足りない食品の足しにしようとか、食べて居ます」

ええ、と思い起こし確認する様に一つ頷きクロエは相変らずの黒く虚の様な瞳で続ける。

「怪我や空腹や不安が紛れると言つて、喜んで食べて居ましたが：名前は知りません。それでもわざわざ土を耕して育てられて居たので食べれない物では無いと思いますが、食べた後は少し反応が鈍くなりますね」

その昔、地母神として崇められていたシユブニグラスには人の生贄を捧げられた。対価としてもたらされる黒い仔山羊は、その巨体から豊富な食糧として信者たちの飢えを満たした。一人の肉と巨木の様な生物の肉。人間一人の見返りにしては十分だ。が：この時代神からの授かりものをそう言った用途に捉えるものは無い。

その結果、子供だけで資金源はクロエがもたらすもののみで、食いつ持の無くなった子供たちは林の奥に見つけた野菜らしき物を食べている。

「…そこ、案内して貰える？」

「はい。ではついて来て下さい」

妙に険しい顔の少女を連れ、クロエは歩き出す。相変らず人懐っこい子供が『御子様』と声を上げにこにここと纏わり付いて来た。

## 黒き地母神に奉げるいあいあ！8

「リートお姉さんのお友達…クロエさんって二年前に閉園した養護施設に何で帰ったんだろうね」

もつともな質問を、バスの座席に並んで座るリートへ向ける。

安い造りのパンフレットに記されていた住所への移動中である。

ネット上で異様なまでに情報が消されていた様な場所へ帰ると言って連絡が取れなくなったという。

もし、『黒のゆりかど園』が閉園した後園長なりの責任者や土地や建物の所有者が住んでおり、恩師に会いに行つた等ならまだ分るのだが…。

「知らない。だってお姉ちゃんが連絡取れないから見て来いって言っただけだシ」

「でも友達なんでしょ？」

「そだよ」

話ながらもまた、リートはカロリーメイトを取り出し貪り始めた。

「クロエさんっていくつ？」

ん？と首を傾げ、口をもごもごとしたまま視線だけを寄越す。

漸く児童の失踪が、誘拐と断定されたのがこの昨日で失踪自体はここ最近連続して起きていたものだ。

もし、その時期とクロエと連絡が取れなくなった時期が一緒なら、あるいわ…とも考えた。ただクロエという人物についてはさっぱり分らない。リートの姉の友達で恋人と同棲しているとすると、ひよつとしたらギリギリ10代の可能性がある。

余りにも若く、自身も子供の様な人間が小さな子供を周囲の目に止まらずに連れて行く事の難易度はどれくらいだろうか…？

いや、逆に年齢が近い方が並んで歩いて居ても兄弟に見えるのだろうか…？

「2歳…？」

「えっ？」

ぐるぐると可能性の話ばかり考えていると、余りにも予想の範囲外の答えが返って来た。

「それは嘘だよね」

「お姉ちゃんは『クロエにちやいだもんね〜ピツピルピイ〜』って言テたよー」

「また騙されてるよ、それ。じゃありートお姉さんから見て何歳位なの?」

「私ヨリちよつと下位?」

それでも大分幼いのでは無いだろうか? リートは中学生、13〜14歳程度に見え、それより下となると小学生に成ってしまう。

「…待って。お姉さんっていくつ」

「じゅーきゅー!」

物凄く元気に宣言されるが、正直見た目と相まって俄には信じられない。主に言動が。新一より年上だなんて、余りにも信じがたい…。

コナンは若干『新一』が同年代の中に居て、飛び抜けて頭がいい分類だという事を割と理解しきれて居ない。

高校生探偵と持て囃され、周囲を大人それともかなり頭脳レベルの高い辺りに囲まれて居れば仕方がない。

…それを差し引いてもリートが残念なのは事実だが。主にIN TとEDU的な物が。学生探索者は辛いのだ。

「信じてないな」

隠す事無く、嘘だろ。という表情のコナンの頬を新しいカロリーメイトで突く。

「ちよ、やめ…」

クッキー生地の油分が地味に年齢一桁ぴちぴちの肌にごびり付く。「元々もうちよつと、おっぱいも…おっぱいもね!! 大きかつタけど、喧嘩売つちやいけないノとこう…おいかつけこした結果…ネ…ははは。

生きてて良かったヨーでもおっぱいも無くなった!!」

「公共交通機関でおっ…んんっその連呼は止めよう!」

平日の昼を二時間ばかり過ぎ、郊外へ向かうバスは空いて居るが流石に男子高校生としての魂が恥ずかしいから止めてくれと訴えかけ

る。

「本当に!!お姉ちゃん程は無いケド!!私、もうちよつと背が高くて!!  
C75だったのに!!全体的に縮んでこれダよ!!」

具体的な数字まで出しは始めてしまった。

公共の場で連れが恥ずかしい話題を続ける。S A N C O / 1。しかしそんな正気度現象イベントなど、コナンは平気で無視をする。

何故ならそれ以上に気になる言葉を聞いてしまったのだから。

『全体的に縮んでこれ』

あまりのリートの能天気さに忘れかけて居たが、最初彼女に声を掛けた切っ掛けは、ジンと何やらじやれる様に言い合っている現場を目撃した為だ。

そして『喧嘩を売ってはいけない者』とは…まさか彼女も?だがそうすると、既にやつらに『人間が縮む』という現象を把握されている事になってしまっているのではないか?

「あ。コナン、ここで降りルよー」

突然走り出す思考を妨害し、リートはコナンの手を引いて立ち上がる。

「こっから、林…公園の一部これ?大分歩く見たイ」

「…うん。ねえ…本当にボクと会う前に話してた黒づくめの男の人は初対面なの?」

『黒のゆりかご園』の住所を、当初の手段通りスマホに入れ込み地図を見ながら歩き始めるリートの手を引いて尋ねる。

手を引かれ立ち止まったリートは酷く不服そうな、物凄く嫌そうな顔をしている。

「あの恰好は、初メてだよ。…ひよつとしてコナン、どっかで全身真っ黒な奴に絡まれた?」

全力で顔を歪めていたリートが憐憫の表情を浮かべ、コナンのすぐ傍に歩み寄り視線を合わせる。

先程のリートの言葉の真意が分らないで居る以上、下手な返答出来ずに黙り込む。その沈黙に何かを察したのリートが大きく息を吐く。「なんだー。コナンもアレ系統に巻き込まれた感じかー。じゃあ先に

言っておいた方が良いかな？」

一人で納得した様子のリートが、真面目な顔で告げる。

「この誘拐も、多分『ソレ』系統だから覚悟した方がいいよ」

リートに繋がれたままの手に、じわりと冷たい汗が滲んだ。

## 黒き地母神に奉げるいあいあ! 9

クロエという少女は、珪との対話中も部外者という姿勢を崩さずにした灰原に対してさえも警戒した風もなしに『こっちはです』と言って案内します。

「ちよつと待って」

「はい」

呼び止めれば何の疑問も無しに立ち止まり振り返る。

「…屈んで貰ってもいいかしら…」

「なんででしょう」

唐突な要望にも、素直に屈み視線を合わせる。

「……」

子供相手なのだとしても、このクロエかつらはどこか異質なものを感じる…。そもそも珪も含めてこの人間…子供達から浮いている。

『御子様』という呼称も含めて。

失礼なのは百も承知だが、屈み、視線の高さが同じになったクロエの頬をに手を伸ばし、口を開けさせる。

「ふあ…?」

それでも抵抗なくされるがまだ。

無抵抗に開けた口の中を覗き込んで…手を離す。

「突然ごめんなさい。ありがとうございます」

「いえ。一体なんだったんですか?」

暫く様子を見ていて気になつて居たのだが、クロエに妙な違和感を感じてしまって仕方がない。それは小さなものが度々起こるのだが、正体が掴めない。

先程極近くで言葉を交わした際に、その違和感の一つに気づいてしまい、ついつい確認をしてしまったのだ。

「本当にごめんなさい。でも、何でもないの」

一瞬訪ねそうになったが呑み込む。

『歯式が、人間とは異なるがそれは生まれつきなのか』

考えた末にその問いが出てくる事は無かった。尋ねた通りに、生ま

れつきだった場合酷く失礼な発言になってしまうだろう。

もし別の返答があった場合、何か恐ろしい物が現れそうな気がした。まるで丑三つ時の、窓の向こう側を覗き込む様な…ナニカ潜むモノとかち合ってしまったいそうな…そういう類の恐ろしもの。

「そうですか。では行きましょう」

特に言及はされなかった。

表情を変えずに頷いて、促す。今度は黙ってクロエの後を着いていく。

「…ねえ、この部屋は？」

ロリータワンピースの揺れる裾と成らんで歩く灰原は、異臭に眉を顰める。その臭気は有る一室から漂っていた。

「院長室です。二年前から誰も使っていませんよ」

プレートのような物も無く、他の部屋と何ら変わりないがそこまで大仰な建物でも無いからそんな物なのだろうか…それにしても、この臭いは…。

「この臭いって…」

「腐臭では無いですね。既にその段階は過ぎてるか。それにあれはお母さまへの最初の供物です」

やはり表情を変えないクロエは淡々と告げる。

思わず、と言う様にその扉へ手を伸ばし、戻す。これは触れてはいけない禁忌なのではないかと考えたのだが、その様子を見ていたクロエは不思議そうに首を傾げる。

「鍵は掛かって居ないので別に問題有りませんよ」

行動こそは、疑問を表す者なのにやはり表情は変わらず虚の様に何も見いだせない。腐臭の段階は過ぎた等と言うのだから、この中に有るモノを知っているのだ。それなのに、見ても問題無いと言いきる。

どこか、ヒトの精神構造とこたなるものが目の前の人型に宿っている様な薄ら寒さを感じる…。

普段は危険な事に首を突っ込むなど、灰原が苦言を呈している側だが何故か手が再びドアノブに伸びてしまう。恐る恐るとい様にノブを回し、扉を開ける。

「…っ！」

籠った空気の中、さも当然と言う様に人骨が転がっている。既に肉も皮も臓物も全て虫に食い漁られ、骨だけが残っている。食い荒らした筈の生物たちも餌の絶えた空間に興味は無いのか何も居ない。

埃臭い空間に、独特の臭いがこもり呼吸の妨げに成る様な、圧を持った空気が詰まった空間。その空気がそのまま肺にまで流れ込み、身体の内側に圧迫感が産まれる。

「この人は？」

「園長先生というらしいです。僕は直接の面識を持ちません」

床に、何らかの汚らわしい液体が染み込んだ後がくつきりと残るその真ん中にボロボロに遊離してしまった骨が変色しかさつき劣化した服を着て横たわっている。

頭蓋骨の全面、米神よりやや上に陥没したあとがあり、床には投げ出された大きな灰皿が、余りにも如実に何が有ったのかを伝えている。

何故、については一切分らないが。

「どうして、誰も通報しなかったの？」

いつの間にか、隣に立って居たクロエを見上げる。

「さあ？人間の事情は知りません。ただ大人は誰も何も言いませんでした。その間に僕や僕の兄弟達がやって来て大人と珪達の立場は逆転しました」

その言葉で『何故』は埋まらなかった。

「あなたの兄弟もここにいるの？」

「居ますよ。大体納屋の周りに潜んでいる事が多いです。最近珪と一緒に街に出て居ますが…そこを見ても僕の兄弟の資料はありませんよ」

部屋の壁一つに、若干部屋から浮いた事務用の棚に様々なファイルが並んでいる。その中で名簿と書かれた物が視野の端に引っかけ顔に向けたのかクロエがことりと首を傾げる。

「あれは見ても良いの…？」

「ちよっと待ってください」

こくりと頷きがたがたと柵のガラス戸を揺すり、がんつ、と鈍い音を立てて戸のフレームを歪ませ鍵を壊す。

「どうぞ」

今に始まった事ではない。

このクロエという少女から感じる違和感。その異質な物の正体は決して探ってはいけない何かだと、本能が告げる。向こうが何かアクションを起こさない限り、こちらへ害が及ばない限りは決して、触れてはいけない。探ってはいけない。知ってはいけない。そんな、ナニカ…。

出来る限り、自身の気配を消す様に縮こまる様にしてクロエの横を過ぎファイルの類へ手を伸ばす。受け入れた子供の名簿、運営に関する金銭的なもの…そんなの物が、沢山。

その内の一つに手を伸ばし、開く…。

目にする記録の全ての不審さに、神を捲るにつれ酷く不快な、胸がむかつく様な気分が込み上がってくる。

何がどうして、『こう』なつたのかはそこからは分らない。ただ今のこの異様な状態になる前からこの施設は異常だった。

ばたり。

つい、かつてのここの実態に眉を顰め記録を辿る手を止める事が出来ないに、背後で扉の開閉される音がした。

クロエでは無い。彼女は鍵を無理やり壊した位置のまま、全く動くことなく樹木の様にその場に立ち続けている。

扉を開けたのは、珪だ。

「……ちゃん……」

目覚めた後に顔を合わせた時と、明らかに様子が異なる。

今にも泣きそうな顔で、如何にも心細そうに視線を彷徨わせながらふらふらと入室してくる。

「セキちゃん！セキちゃん！！セキちゃん…っ！」

生気のない視線が彷徨ったかと思うと、覚束ない足取りで進み倒れ込む様にそのまま灰原を抱きしめ、誰かの名前を呼び続ける。

『セキちゃん』とひたすら、周囲も、抱きしめた人物の顔を認識できて

いない様にただただ呼び続ける。

「どんなに『母』を求める心があっても、人の理解の外を受け入れる事は負荷になるんですね」

真影の様な瞳を瞬かせ、クロエが呟く。

「セキちゃんごめんね、セキちゃ…でももうすぐ『おかあさん』が来てくれるから、お姉ちゃんと一緒に還ろう…」

強い力で抱きしめる珪の腕から脱する事もできず、その勢いにどうして良いのか分からずに中途半端な高さで両腕が彷徨う。

先程様々な記録を辿った彼女は知ってしまった。『せきちゃん』とは、今泣き崩れている珪と共にここへ預けられた彼女の妹だと。

そしてその妹は、『事故』で亡くなっている事も。

## 黒き地母神に奉げるいあいあ！10

「ねえ。どうして貴女は何もしないでここに居るの？」

妹とは違い流暢な日本語で金髪に青い瞳の女が不思議そうに問いかけてくる。

大きな画布に向かっていた女が振り返り、さらりと流れた金色の髪を耳にかけながら首を傾げた。ぞわりと寒気とする程に美しい女だ。

窓から差し込む斜陽が、金色の髪を煌めかせまるで後光の様に輝かせる。

「どうして…と言われても、あなたがあの子にお使いを頼んだから、私はやる事もないし…」

宮野明美は目覚めて…いや『りっちゃん』がいう所の、怪物に成り代わってから超常的な力で黄泉還らせた本人である『りっちゃん』と彼女の姉のもとに居る。

もつと正確に言えば、『りっちゃん』の姉に付いて回って雑用をしている事が殆どだ。彼女は芸術家であり、宗教家であり、非常に多忙だ。付き人の需要は高いようだ。

「そういう事じゃ無くてね？何で貴女、せつかく生き返ったのに大人しく私達の元に居るの？あれだけ散々騒ぎ倒したのに、逃げ出そうとする様子もないじゃない」

筆をおいて、自分自身が芸術作品の様な女が真正面に向き直った。

家族とか恋人とかに会いに行かないの？と、まるで感動ヒューマンドラマでも期待している様な顔で尋ねて来る。

「…だって私はもう死んだ人間だし、ニュースにだって成ってるのよ？帰る場所があると思う？」

家族や恋人に関しては言及しないで、それだけを告げる。

しかも本人の死体はしっかりと回収されとうに茶毘に付されている。埋葬された先は、分らないが。

「え。そうなんだ。私ニュースとか見ないからなあ…日本物騒ね。大きな事故にでも遭ったの…？私も適当な魂を捕まえていただけだから、貴女が元々誰かとか分らないし」

美しい女は『魂を捕まえる』などという。

そもそも物騒なのは彼女自身だ。明美を黄泉がえらせた本人は『りっちゃん』だが、そのために使われた大量の人間を集めたのは目の前の美女だ。

どうやってそんな事を、と問えばうふふ、と微笑むばかりで無いも言わない。

明美が居たあの組織が、利益と武力で力を持っていたのならこの女が属するモノの力は信仰だ。ある意味それは暴力や権力から来る力よりも数段厄介だ。

「あらっ？」

まるで彼女自身が崇拜対象だと言う程の美貌で見つめて来た女が小首を傾げる。筆やバケツ、パレットに紛れて存在して居たスマホを持ち上げた。

「ねえ、暇ならお使いを頼まれてくれる？ずっと私を眺めて居るだけじゃないの」

おつかい。つまり外出だ。

先程も言った通りに宮野明美は10憶円強盗の犯人であり、死亡したと報道されている。そんな人物が、堂々と外出出来るものだろうか。件の組織に関しても：死体を晒して居ても未だに安心が出来ない。

それをこの『ただの宗教家』である女に説明する事は憚られる。

「あの子が迎えに来ていって言ってるのよ。姉を呼びつけるなんて生意気。ねえ、車のキー貸すから、行って来てよ。結構な郊外みたい」

その言葉に少し複雑な思いが浮かぶ。

最初14歳位かと思っていた『りっちゃん』は、あの見た目で19歳。目の前の美しい姉は24歳。丁度明美と彼女の妹と同じ位の姉妹。その姉妹の酷く砕けたやりとりはどこかチクリと刺さる感覚がある。

お互いにぞんざいに傲慢に、身勝手に振舞う。それでもソレが出来るのは互いが互いの存在を大切に思っている事を知っているから。長く傍に在った家族を信頼して居るが故に、取れる同性の兄弟の気心さ

れた気安さ。

彼女は自身の妹とそんな風に接した記憶がない。

最終的に、命令には逆らった。妹がどうなってしまったのか知る術がない。

一度失った命であり、『りっちゃん』に怪物と称された身で有りながらそれを確認しようとする気概も無い、臆病な姉…。

「ねえ？聞いてる？」

「あ…、ええ。聞いて居たけど、でも…」

お願いね？そう言っただけで女神の様な顔の『姉』は晴れやかに微笑み車のキーを握らせる。

「人間なんてそんな他人に興味ないものよ？車から降りる必要もない。ねえ、なんなら、このまま好きな所に行ってもいいよ？私は追わない」

やんわりとだが、有無を言わずに明美の手に鍵を握り込ませる。手を握ったまま真摯な瞳で見つめる。青い海の様な瞳にも赤い夕陽が差し込み血の湖を湛えた目だ。

それは傾国の美貌にか、何とも言えない雰囲気にか、妙な怖気が沸き上がり頷いてしまう。

「…分かった」

そう答えればほつそりとした手を解き、お願いね。と笑った。

「ああ、そうだ。多分ナビに居れても出ないと思うから、ここで大体の場所を地図で見に行って」

そう言っただけで再びスマホを手に取り、操作する。

「ここ、らしいんだけど」

こちらに向けられる画面には、郊外にでた自然公園のさらにその奥。地図上では林しかない場所だ。ここから結構な距離がある。来るまでも今から出たら陽が沈んでいる頃だろう。

「地図には載って居ないけど、『黒のゆりかご園』というところみたい。表はしまつて居るけど名前は出てみたいだから」

「『黒のゆりかご園』ね分かったわ」

頷いた所で、ぽん、と軽い音がして再びメッセージを受信した事を

告げる。持ち主が確認する素振りを見せたので

礼儀として、覗き込んだ体勢から身体を離れた。

「…ねえ、明美。一つ注意事項。『そこ』で何を見ても、手出しは厳禁。決して関わっちゃダメ。きつとそれは彼らの悲願だから。そしてあなたは出来れば何も見ない事。考えない事。偽物の命でも失いたく無ければ守って。ね？」

内容を確認し、酷く真面目に、温度のない声でそう指示される。

表情の抜け落ちた美しい顔とはこんなにも恐ろしいものなのかと、頷いて了解の意を伝える事しかできない。

その温度の無い視線から逃れる為に、車の鍵だけを握りしめてその場から逃げ出した。

「……は……あはははははっ！ああ、何て幸運！何たる行幸！我が主の伴侶たる女神が降臨成される！ああ我が主よお喜びくださいますか！彼の女神をこの目にする栄光に与えることが出来、あなたの下僕はこんなにも高揚しております!!」

背後から聞こえる、空気を震わせる様な狂笑を足を動かす事で振り払おうとした。響く声に先程まで会話して居た美しい女の気配は無く、唯の狂人がそこに居るのだと伝えていた。

黒き地母神に奉げるいあいあ！ー！ー

バスを降り、嫌な汗を感じたまま林の中を大回りして進む。

しばらく進めば硬く閉ざされた門扉に、『黒のゆりかご園』と随分と新しい名盤が出て居たのだが、小学生低学年と女子中学生二人では超えるのは難しそうだった。

幸い、その門扉から伸びた塀は敷地全てを囲う様な事は無く、林の中で途切れて居た。

「物凄くひくいねー」

「…そうだね…」

バスを降りてすぐに交わした話題を、敢えて避けるかの様にリートは呑気に呟く。コナンとしてはその辺りの事情をもっと詳しく聞きたかったが、今起きて居るこの事件も『ソレ関係』という事では、話して居る暇は無いのかもしれない。

「何処まで敷地なんだろう…」

本当に、郊外に有るにしてもあまりにも林の面積が大きすぎる。自然の多い環境での養護施設だとしても、林はあまり手入れがされていない。

そもそもここに来る為のバスの本数も少なく、子供が生活するには学校に通うにも不便だろうに…。

今起きて居る誘拐事件以前に、何かこの施設はおかしい。

「コナン。あれ」

手入れもされずに、なかなか歩きにくい林の中で僅かに開けた所にでる。そしてリートが前方を指さす。

そこにはそれなりに大きな納屋があった。

林の手入れは疎かなのに、その納屋はそれなりに綺麗だったが…何か違和感を感じる。その納屋ではない。その周囲。

何てことはない、ただの、周りに比べて大きな樹木が数本あるだけだ。黒々とした硬そうな『樹木』が…。

ざらりとコナンの脳内を何かが過った気がしたが、それについて思考を巡らせようとすると、これまでの人生全てが覆されてしまいそ

うな、不安定な気分になってしまう。

「あれって、黒のゆりかご園のものかな…?」

「あーソツチ? うんまあそつちはそつちで良いけど。うん。大回りして、門の位置と同じトコまではきたかな?」

「そつちって?」

最初から、妙な事しか言って無かったリートだが、殊更に妙な事を言う。

”SENSE LIFE”

「え?」

そつちとは何のことか、と見上げたリートがいつにない真顔で、なにか、耳に馴染まない言葉を紡ぐ。ごく短い、まるで『詠唱』なんて表現がしつくりきそうになる、音。

馬鹿げてた発想だと思いつつも、何故かそんな考えが浮かんでしまう。

この前から、自分はもうしてしまったのだろうか…と若干不安になる。疲れて居るのだろうか。

「うつわあー…」

そして大仰なまでのリアクションで目を覆う。ぼそぼそと6体とか無理ダーと言う言葉はコナンには届かなかった。

「ねえ!?! さつきからどうしたの!?!」

「ンーーーーー。待って、今考えてる。なあにこれ。帰りたい。ちよつと無理。コナンこれは無理だ。お姉ちゃんに迎イに来て貰ウ」  
「だから、どうしたんだよ!?!」

余りにも深刻そうな顔のまま、本当に困った様に嘆くの一切事情を語らないリートに、どういう事だと詰め寄ってしまう。

何か、そんなにとんでも無い事が起こって居るのだろうかと思いが増す。

「取り合えず、あの小屋? 人間が二人いるね」

何故それが分ったのかよりも、慌ててそちらへ視線を戻す。先ほど、納屋を確認した際に気づいたのだが、あの納屋には門が外から掛けられている。

内から開けられない納屋に、人が!?

「それ、子供…?」

「え、さあ?」

そこまでは分かんない。とリートは首を振る。

「…行つて見よう。こんな奥まった出れない納屋に、人何ておかしいよ」

ええー…と今までがんがんでいたリートが明らかに及び腰になつて居るが、コナンはそつと納屋へ進む。

周囲に『人』の気配はない。

納屋の側面に回り、気配を殺して窓からのぞき込もうとして、厚い遮光カーテンに視界を遮られていた。

耳を澄ますと、中からは弱々しい、謝罪の様な言葉が聞こえる。

その言葉にはつとし、急いで入口へ戻り一瞬躊躇つてからそつと門を、外す。

ゆつくりと扉を開く。

「ひついいいっ…!!!」

夕方に傾き始めた日が、納屋の中をオレンジ色に照らす。その光は扉を開けたコナンも照らし、照らし出された小さな少年の影に納屋の中に居た人物が引き攣つた悲鳴を上げる。

「ねえ!!違うのよ!!私達だつて!!仕方なかつたの!!!あなた達に意地悪したかつたわけじゃないのよおお!!本当よ!!仕方なく、仕方なくなのよおお!!」

「ごめんなさい、ごめんなさい…!おねがい、あの化け物たちを何処かにやって…!ひいい、あ!!あああ!!居る!あいつらが!化け物が見張ってる!こつち見てる!!」

リートが言ったとおりに、納屋の中には二人の女性が居たが、コナンを認識した瞬間に恐怖のままに叫ぶ様に言い訳染みたものに、謝罪に、バケモノ等と常軌を逸した狂乱の叫びを上げる。

様々な事件に遭遇し、その中では存在しない祟りを心底信じ怯える人も居たが、目の前のソレは何かが違う。本当に、すぐ後ろコナンの後ろにバケモノが佇むかのように叫んでいる。

二人ともすっかり草臥れ、埃っぽく汚れた服に明らかにやつれた風体だ。片方は高齢の女性で、もう片方はコナンに見覚えの有る人物だった。

あの、探偵事務所の前で声を掛けて来た、妙に怯えた風の女。

しかし彼女はコナンに気づく事は無くただただ、何かに：『子供』と『バケモノ』とやたらに酷く怯えパニックに陥って居る。

コナンが話しかけても、己の恐怖のままに叫び、謝罪し、言い募る。完全な狂気に陥った人間。人を殺めた人間の言葉とも異なる、異様さ：その異様さに思わず半歩後自さってしまう。

その瞬間、背後に気配を感じばつと振り返るが、そこには何も無い…。

ただ黒々した大きな『樹木』が大きく揺れただけ。

閉じ込められていた筈なのに、怯えた様に納屋の奥へ後じさり逃げ込んでしまった二人は出ようという様子もなく、ただただ狂乱に陥って居る。

「警察と：救急車を、呼びますから…」

『大人』が狂っていると言う現状に気おされ、コナンはさらに数歩後退する。外を恐れる彼女達の為に扉を閉める。ただし門は横へ置いて。

身勝手な理由や怨嗟で人の命を奪う『大人』も数多見たが、その実、コナンの：新一の周りには余りにも高スペックな『できた大人』が集い過ぎて居た。

大層聡明な20に満たない『子供』の言葉を尊重し、その能力を認め、思う存分活かせる環境を提供し続け、守る大人が居た。

確かに両親や自身を取り巻く環境に感謝をしては居たが、それを本当の意味で理解しては居なかつたのかもしれない。

得体の知れない何かを目の当たりにして、思わずたじろいでしまった。

相変わらず、しかめっ面で潜んだままのリートの横に戻ったコナンはただ、この得体の知れない背を這いずるナニカを理解する為には、早急にこの事件を解明するしかない。

と、半ば無理やり、こじ付けの様に言い聞かせ、いつも通りを取り

繕うしか無かった。